

第5章 興道寺廃寺の遺物

第1節 土器

第1項 須恵器・土師器・製塩土器

仏器模倣の土器、灯明皿など仏教活動に伴うものと考えられる土器が若干、出土しているが、一般的な食膳具、煮炊具、貯蔵具などの土器の出土は決して多くない。伽藍域での出土は特に低调で、瓦溜まりなどの堆積層に少し混じる程度である。一方で、伽藍北方の掘立柱建物跡が展開するエリア、あるいは寺城北限の付近、あるいは寺域外の北方においては出土量が増加する傾向があるものの、それでも土器の組成をうかがえるほどの一括資料には恵まれていない。

そのような状況を踏まえて古代寺院に伴うと考えられる土器を概観する。

A. 寺院建立期の須恵器・土師器

寺城北限を画する施設に関連すると考えられる東西溝 SD110701、SD120901 の埋土からは8世紀初頭から前葉に伴うと考えられる須恵器杯B、杯B蓋が出土し、内面に暗文を施す土師器椀・皿類が出土している。出土量が少なく、土器組成も乏しいため、溝自体がこの時期に帰属する可能性はあまり高いとは考えにくいが、寺城北限付近には寺院建立初期に伴う施設が存在した可能性がうかがえる。このことは、寺域外の北方に位置する土坑 SK090805 などから出土した土器群からも考えることができ、須恵器杯B、杯B蓋、土師器椀、土師器甕が出土しており、すぐ北側に所在する竪穴建物跡2棟に伴う可能性もあることから、寺院の北側に展開する律令期集落の一般成員が所有した食膳具、煮炊具の一部であった可能性も考えられる。

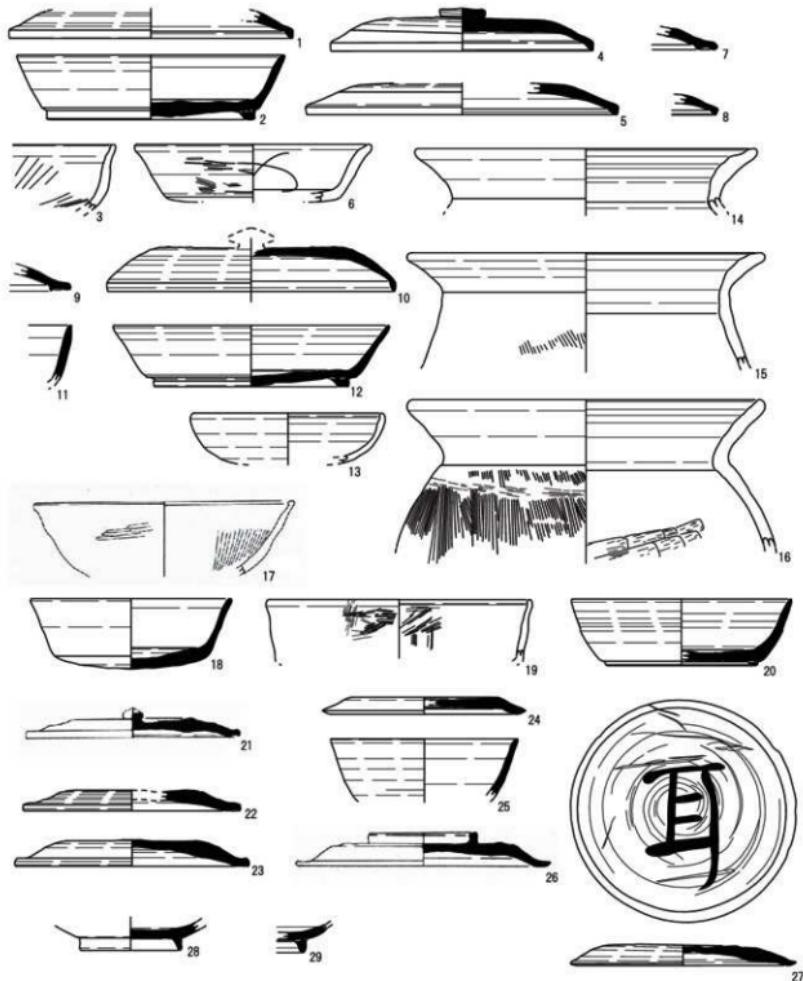
これらの8世紀前半に伴う土器群は寺城北方、あるいは寺域外の北方に特に分布する傾向が読み取れるが、これまで寺院北方で検出されている律令期集落の時期がおおむね8世紀前半に伴うものであることから、寺院造営や寺院経営に伴う施設が寺院北方に展開していたという文脈で理解できよう。

これ以外にも、再建期基壇西辺の堆積層、再建期中門基壇南辺の堆積層、寺城北限に伴う東西溝の埋土などから内面に放射状暗文、外面にミガキを施す土師器食膳具の椀・皿類が出土していることを『2007年報告』で述べた。細片のため、未図化のものもあるが、地方で俗に畿内産土師器と称される土師器食膳具が若干ではあるが興道寺廃寺から出土している。寺院北方の集落で出土している畿内産土師器、あるいは北陸地方に通有の器面に赤彩、暗文を施したもの（仮に畿内系土師器とする）を含めれば、一定の広がりをもって分布している。

B. 寺院再建期～廃絶期の須恵器・土師器

伽藍域における再建期の堆積層に伴う土器として、灯明に使用されたものを含めて須恵器杯・皿・椀類、土師器皿・椀類がある。出土状況からは明確に仏教活動に伴う痕跡は認められないが、伽藍域に持ち込まれた須恵器食膳具が一定程度存在したようである。

8世紀後半から9世紀前半にかけての須恵器杯・皿類と、土師器椀・皿類の出土が若干ある。須恵器蓋は山笠状に扁平化してわずかな返りを伴うこと、須恵器皿に底径が大きく、器高が低くなる皿が出現すること、須恵器・土師器の椀・皿の底部に回転ヘラ切り痕が残ることなどの特徴が見られる。



- 1-3 SD110701堆土(『2012年報告』第114図5-7)
 4-6 SD120901堆土(『2012年報告』第115図1-2・4)
 7-8 SK090803堆土(『2012年報告』第118図7-8)
 9-16 SK090805堆土(『2012年報告』第118図13-16・18-21)
 17 再建期塔基壙(SB020202)西側堆積層
 (『2007年報告』第12図36)
 18 SK150204堆土(本報告第66図2)
 19 SK100101堆土(『2012年報告』第84図15)
 20 P1000803堆土(『2012年報告』第103図3)

- 21 再建期中門基壙(SB080301)堆積層(『2007年報告』第100図394)
 22-23 再建期塔基壙(SB110402)西側堆積層(『2012年報告』第50図3-4)
 24-25 新建期講堂基壙(SB120601)北側堆積層(『2012年報告』第72図2-3)
 26 再建期塔基壙(SB070301)北側堆積層(『2007年報告』第88図361)
 27 再建期塔基壙(SB110301)北地面直上(『2012年報告』第53図8)
 28 SD110101堆土(『2012年報告』第65図65)
 29 再建期南門基壙(SB111101)北側堆積層(『2012年報告』第90図10)

第122図 興道寺廃寺出土土器実測図

寺院再建期に伴うもので、一部は伽藍域、寺域における仏教活動に伴う灯明用の土器と考えられる。

9世紀後半から10世紀前半については、若干の須恵器、土師器がある。須恵器蓋のつまみ、返りが消失し、縮小化、扁平化が進むこと、須恵器・土師器の皿・椀の底部が平高台化し、底部に糸切り痕が残ることなどの特徴が見られる。

『2007年報告』では、伽藍域から出土する灯明用のものを含めた土器の年代から寺院廃絶期について若干の検討を行い、再建期金堂基壇東辺の整地層から8世紀後半から9世紀前葉の須恵器杯・杯蓋（杯B蓋・杯B）が出土し、同様に再建期塔基壇西側・北側の堆積層から8世紀後半から10世紀後半の土師器椀が、再建期金堂基壇西辺の堆積層、再建期中門基壇周囲の堆積層からは10世紀後半から11世紀代の時期の土師器皿が出土することから、少なくとも9世紀前半までは寺院として機能し、遅くとも10世紀後半には廃絶していたものと推測した。

特にその中でも、再建期塔基壇南西隅部の整地面の直上から正位の状態で出土し、寺院廃絶に関連した祭祀に伴う土器と考えられる「耳」墨書の須恵器蓋が9世紀末～10世紀初頭の年代と考えられ、寺院廃絶年代の根拠として『2012年報告』で示している。

C. 土師器煮炊具・製塩土器

伽藍域、寺域からの土師器甕・鍋類、製塩土器の出土は僅少である。塔基壇の東側で確認された創建期の工房に関連すると考えられる堅穴建物跡SB100102・SB100201から8世紀前半の須恵器に伴って丸底の製塩土器が出土しているが、この建物跡での焼き塩の痕跡は認められず、塩の消費のために製塩土器が持ち込まれたものと考えられる。

第2項 施釉陶器

興道寺廢寺からの施釉陶器の出土に関しては、かつて綠釉陶器の出土が紹介されたことがある〔水野 1987〕。これは福井県立若狭歴史博物館所蔵の福井県教育委員会による試掘調査の際の出土資料と考えられるが、第2章で前述したとおり青磁椀の可能性が高い。

一連の発掘調査で出土した施釉陶器としては灰釉陶器の椀か皿の底部2点がある。明確な帰属年代は不明であるが、9世紀代と捉えておきたい。

興道寺廢寺において施釉陶器の出土は僅少である。寺院北方の律令期集落を含めても、その出土量は限りなく少ない。若狭地方では、遠敷郡における官衙関連遺跡として8世紀後半以後に盛行する西縄手下遺跡、木崎遺跡で施釉陶器の出土が増加することと対照的なあり方を示している。ただし、若狭国分寺跡においても施釉陶器の出土は知られているが、出土量自体はさほど多くない。

第3項 墨書き土器

墨書き土器としては、『2012年報告』で示した前述の「耳」墨書きの須恵器蓋と、寺域北方の攪乱坑から出土した須恵器皿の底面に「一」と直線状の墨書きを施したものがあるが、出土資料は多くない。寺院北方の律令期集落においても墨書き土器の出土は1点に留まっている。

「耳」墨書きの須恵器については、墨書きされた耳という文字が示す意味についてはかつて議論されており、寺名、人名、地域名のいずれかを示すものとして考えられている。

第2節 瓦

第1項 軒丸瓦・軒平瓦

興道寺廃寺の軒瓦については、水野和雄氏が採集資料を基に軒丸瓦、軒平瓦の組み合わせとその年代観に関する骨格を示した〔水野 1987〕。その後、『2007年報告』で出土資料を含める形で再整理し、軒瓦I型式：単弁八葉蓮華文軒丸瓦＋三重弧文軒平瓦、軒瓦II型式：素弁十葉蓮華文軒丸瓦＋三重弧文軒平瓦、軒瓦III型式：素弁九葉蓮華文軒丸瓦＋偏行唐草文軒平瓦という3型式からなり、I型式からIII型式へと変遷し、I型式が7世紀後葉、II型式が8世紀前葉、III型式が8世紀中葉という年代を示した。

『2012年報告』において、第9～13次調査出土資料を追加してもなお、基本的な見解に変更ではなく、若干の加筆修正を行ったに過ぎない。第13次調査以後は軒瓦自体の出土ではなく、福井県教育委員会試掘調査時に出土の資料、個人蔵の資料を追加しても、大きな修正はないことから、既報告を踏まえて新知見をもとに加筆修正したものを示す。

なお、以下の出土点数に福井県教育委員会試掘調査時出土資料、個人蔵の資料を含むものとするが、美浜町教育委員会調査における表土、搅乱土などからの出土資料は含まないものとし、軒瓦であるものの瓦当面が残存しないものも含まない。

A. 軒瓦I型式

(単弁八葉蓮華文軒丸瓦)

軒丸瓦の瓦当面は単弁八葉蓮華文。瓦当外縁径20cm前後で、瓦当自体は薄いが、丸瓦部の広端部に厚く接合し、丸瓦部の広端面が瓦当裏面近くまで達している。中房は小ぶりで1+5の蓮子を配し、蓮弁は八葉からなり、肉厚がやや乏しいが、弁の輪郭を細線で画する。外区外縁は型挽きによる二重圈文を廻らせ、内縁に段をもって直立縁を作る。瓦当裏面は、円弧上に丁寧なナデを施している。

丸瓦部の凸面の調整は不明である。

焼成が甘く、灰白色、赤褐色の生焼け状を呈するものが多い傾向がある。出土点数は16点。

(三重弧文軒平瓦I)

軒平瓦の瓦当面は三重弧文。瓦当厚4cm内外、直線顎。平瓦部の広端凸面に粘土を貼り付けて充填して厚みを増し、端面を挽型によって瓦当の弧線を厚く平坦に作り、弧線の凹線は浅く鋭い箱型やU字状を呈する。

桶巻き作りで、平瓦部の凸面の瓦当付近（凸面顎部）には方形区画の中に1単位4枚の花弁を配した型押し文を重複させながら連続的に配する。剥離によって平瓦部の広端凸面が露出する部分には平行叩きの叩き目が残る。平瓦部の凹面は強い縦ナデによって布目をナデ消すものとそのまま布目を残すものが混在するが、前者の方が多い。

焼成は総じて甘く、乳白色、赤褐色を呈する。出土点数は18点。

B. 軒瓦II型式

(素弁十葉蓮華文軒丸瓦)

軒丸瓦の瓦当面は素弁十葉蓮華文。瓦当径17cm前後。『2007年報告』では瓦当文様の精粗差、範傷の進行段階からII1とII2に細分したが、傷の進行段階を誤認していることから、細分自体に意味をなしていない。

II型式の軒丸瓦は基本的に瓦当を比較的厚く作り、径4.5cm前後と中房は大きく、1+8に配する鋭い蓮子をもち、蓮弁子葉が消失し、肉厚がI型式からさらに偏平となり、幅も狭くなる十葉の蓮弁となる。間弁はT字楔形を呈する。瓦当外縁は無文の直立縁で、瓦当上半は丸瓦部の広端凹面の端部に嵌め込むことで丸瓦部広端面をそのまま瓦当外縁としたものである。瓦当裏面は、範に粘土を押し当てた際に生じたとみられる指頭圧痕の凹凸が激しく、丁寧なナデも見られない。

瓦当の範傷は、4段階の進行が認められる。まず、写真20の①は蓮弁と間弁の間に1か所の傷が生じた段階である。次いで、②では中房の蓮子の1か所が潰れた状態となり、さらに③では蓮弁と間弁の間にさらに1か所の傷が生じるとともに、④では範の木目が瓦当に転写された状態となり、最終の段階で、⑤中房の蓮子がさらに2か所で潰れ、⑥範の木目が広がり、⑦と⑧は連弁自体に崩れが見られるようになる。範傷段階1から範傷段階4にかけて連弁の厚みも薄くなる。

なお、『2007年報告』で本型式として掲げた外区内縁に内斜面をもつ資料については、有段式丸瓦の玉縁部である可能性がある。

丸瓦部の凸面には平行叩きを施した後、ナデ消し、部分的に叩き目を残すものが散見できる。丸瓦部の凹面は布目をそのまま残す。

II型式の資料は堅緻に焼き締まり、灰色を呈するものが多い。出土点数は37点。

(三重弧文軒平瓦II)

軒平瓦の瓦当面は三重弧文。瓦当厚3cm前後で、直線額。挽型で弧線を作り出す。瓦当弧文の断面形状から、『2012年報告』までII1…やや丸みを帯びた鋭い山形状の弧線と浅いU字状を呈する回線をもつもの、II2…鋭く短く收める弧線と極めて浅い箱型となる回線をもつものとに細分し、軒丸瓦II型式の細分型式と対比可能なものとして報告したが、軒丸瓦と同様、挽型の消耗によりII2型式とした弧文断面の先端が鋭く、溝も浅くなるものから、II1型式とした弧文断面が丸みを帯び、溝がやや深いものへと移行したものと考えられ、型式の細分は意味をなしていない。軒丸瓦と同様、既報告の三重弧文軒平瓦IIの型式細分を撤回する。

製作は桶巻き作りで、使用された桶の底面は直径36cmほどに復元され、4分割で作られる。模骨(側板)幅は2.5cmほどで14、15枚の側板が使用されたものと考えられる。平瓦部の凸面は総じて叩き目を強くナデ消すが、小さな斜格子叩きをかろうじて留めるものがある。平瓦部の凹面には模骨痕や布綴じ合わせ目を残すものが見られる。

範傷段階1



『2007年報告』第80図341

範傷段階2



『本報告』第23図22

範傷段階3



『2007年報告』第61図236

範傷段階4



『2007年報告』第42図161

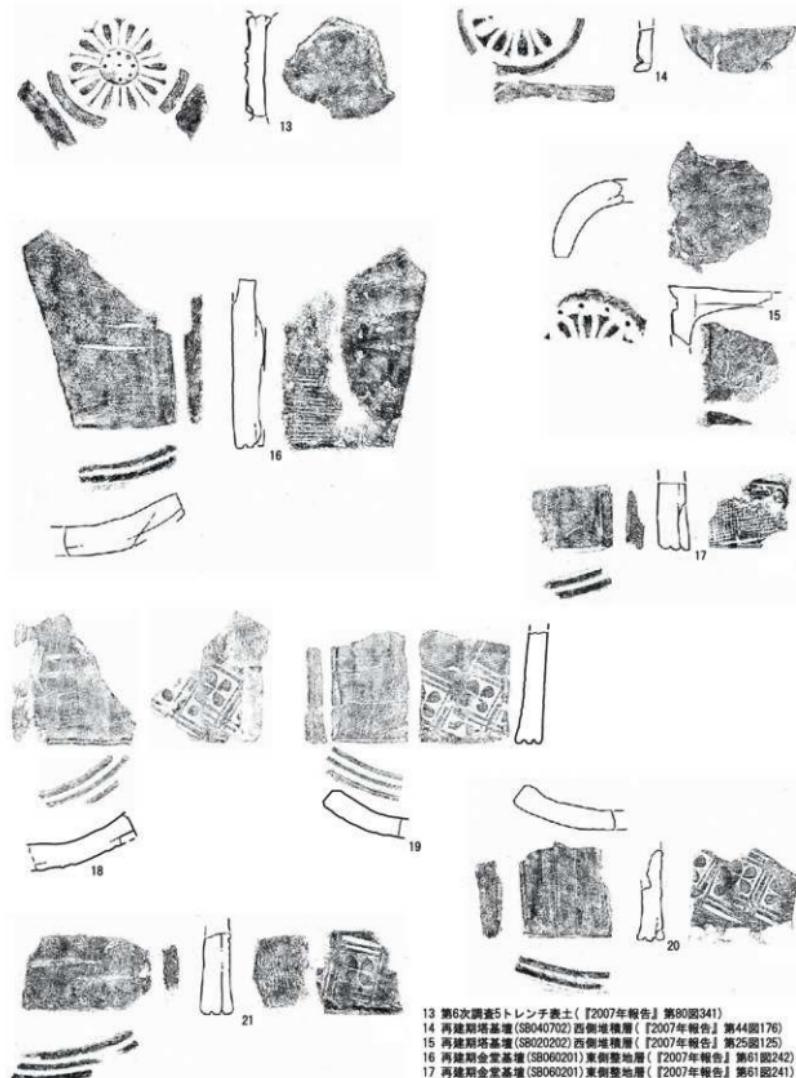
写真20 軒丸瓦II型式の範傷の進行段階



- 1 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層(『2012年報告』第18図34)
 2 再建期塔基壇(SB020202)西側堆積層(『2007年報告』第25図120)
 3 SK060103埴土(『2007年報告』第55図217)
 4 SD110102埴土(再建期南門基壇西側堆積層)(『2012年報告』第92図1)
 5 再建期中門基壇整地層(『2007年報告』第86図35)
 6 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層(『2012年報告』第18図35)
 7 再建期金堂基壇(SB110502)東側堆積層(『2012年報告』第39図5)
 8 再建期金堂基壇(SB060201)東側整地層(『2007年報告』第61図236)
 9 再建期金堂基壇(SB060201)東側整地層(『2007年報告』第61図239)
 10 再建期塔基壇(SB020202)西側堆積層(『2007年報告』第22図90)
 11 再建期金堂基壇(SB040702)西側整地層(『2007年報告』第42図161)
 12 再建期塔基壇(SB020202)西側堆積層(『2007年報告』第22図92)

0 (1:6) 20cm

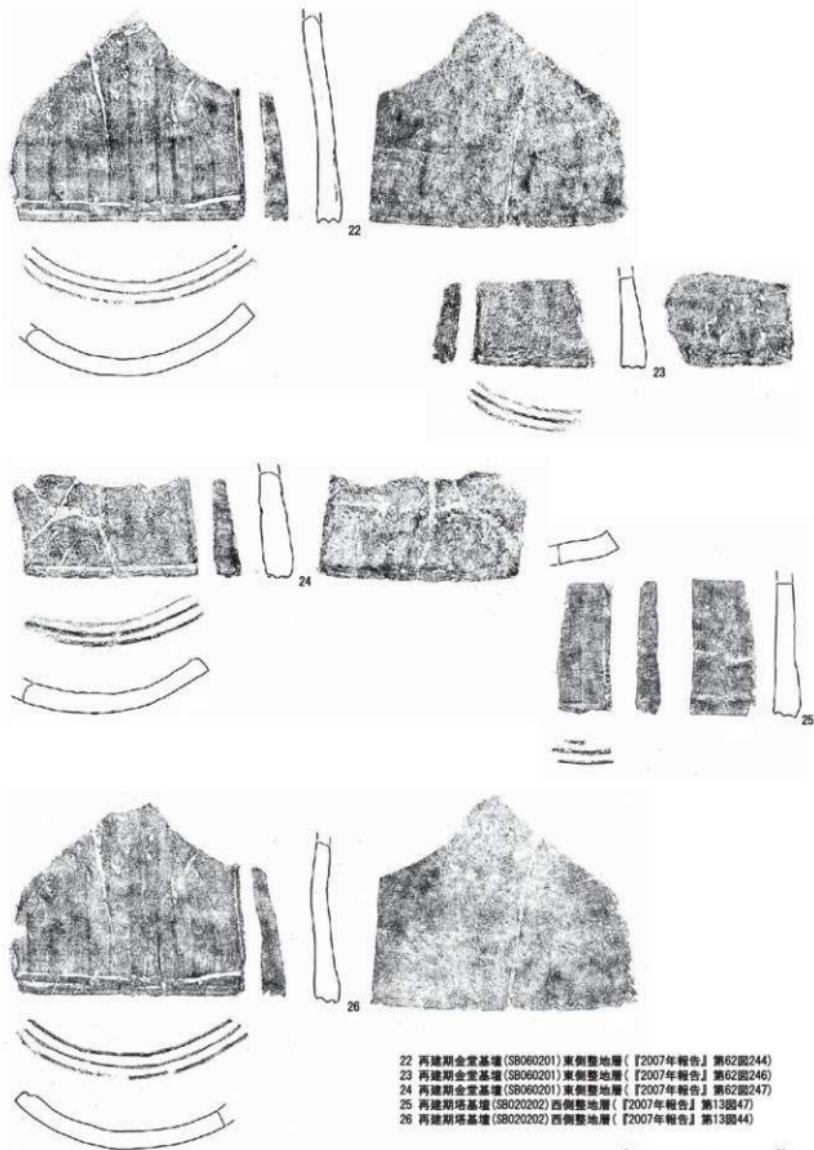
第123図 興道寺廃寺出土軒瓦実測図(1)



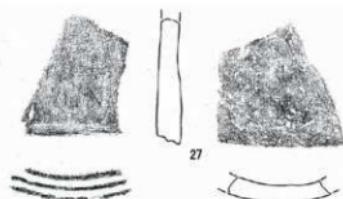
13 第6次調査5トレンチ表土(『2007年報告』第80図341)
 14 再建期塔基壇(SB040702)西側堆積層(『2007年報告』第44図176)
 15 再建期塔基壇(SB020202)西側堆積層(『2007年報告』第25図125)
 16 再建期金堂基壇(SB060201)東側整地層(『2007年報告』第61図242)
 17 再建期金堂基壇(SB060201)東側整地層(『2007年報告』第61図241)
 18 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層(『2012年報告』第19図45)
 19 再建期金堂基壇(SB100402)南西側堆積層(『2012年報告』第45図15)
 20 再建期塔基壇(SB020202)西側堆積層(『2007年報告』第22図99)
 21 SK060103埴土(『2007年報告』第56図218)

0 (1:6) 20cm

第124図 興道寺廃寺出土軒瓦実測図(2)



第125図 興道寺廃寺出土軒瓦実測図(3)



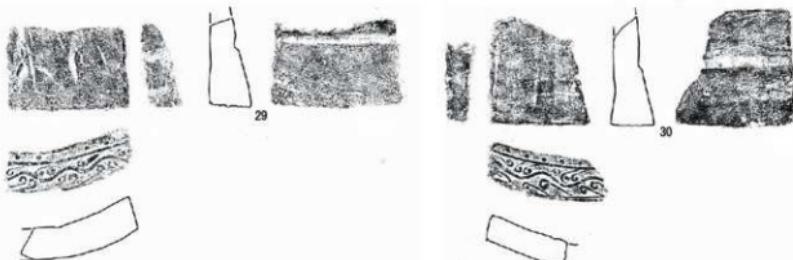
27 再建期塔基壇(SB020202)西側整地層(『2007年報告』第13図48)
28 再建期金堂基壇(SB060201)東側整地層(『2007年報告』第63図249)
29 再建期金堂基壇(SB060201)東側整地層(『2007年報告』第63図250)
30 再建期金堂基壇(SB060201)東側整地層(『2007年報告』第64図253)



28



30



0 (1:6) 20cm

第126図 興道寺廃寺出土軒瓦実測図(4)



- 31 再建期金堂基礎(SB060201)東側整地層(『2007年報告』第64図251)
 32 再建期金堂基礎(SB060201)東側整地層(『2007年報告』第64図252)
 33 再建期塔基礎(SB070301)北側堆積層(『2007年報告』第89図371)
 34 再建期金堂基礎(SB060201)(『2007年報告』第59図223)
 35 再建期金堂基礎(SB100402)南西隅堆積層(『2012年報告』第46図16)
 36 再建期金堂基礎(SB060201)西側堆積層(『2007年報告』第43図1)
 37 再建期塔基礎(SB020202)西側堆積層(『2007年報告』第23図103)
 38 再建期塔基礎(SB040702)西側堆積層(『2007年報告』第44図179)
 39 再建期中門基礎(SB090101)西側整地層 斷面部分(『2012年報告』第59図15)

0 (1:6) 20cm

第127図 興道寺廃寺出土軒瓦実測図(5)

焼成は焼き縮まるものと生焼け状を呈するものが混在し、平瓦部の凸面に平行、斜格子の叩き目をわずかに残すものが見られる。出土点数は 25 点。

軒瓦Ⅱ型式の出土は量的に多い傾向にあるが、軒平瓦に見るよう『2007 年報告』で述べたほどに特別に主体を占めているものではなく、また出土地点についても強い偏向性は見られない。

C. 軒瓦Ⅲ型式

(素弁九葉蓮華文軒丸瓦)

軒丸瓦の瓦当面は素弁九葉蓮華文。瓦当は厚く、蓮子を 1 + 5 に配する中房と、肉厚がやや厚く、さほど幅が広くない九葉の蓮弁からなる。間弁は T 字楔形であるが、鋭さが失われる。外区内縁に 13 個の珠文が配され、外縁内斜面に凸線による鋸歯文が巡る。丸瓦部の広端を未加工のまま瓦当外区の裏面に当てて接合する。瓦当裏面は、瓦当に対して水平方向、一部は円弧状にナデを施す。

範傷は、中房に「-」の傷があり、一部に蓮弁の崩れが見受けられるが、瓦当全体が残る資料に乏しいため、瓦当文様の原型は不明。

丸瓦部の凸面は縦方向と横方向に丁寧なナデを施し、丸瓦部の凹面は瓦当裏面付近で横方向に強いナデを加える。凸面の瓦当付近、つまり瓦当面から 10~15mm のところに瓦范と枷形との境とみられる幅 1mm ほどの極めて浅い凹線が認められる。

焼成が甘く、脆弱なものが多い。乳白色、淡灰色を呈する。出土点数は 13 点。

(偏行唐草文軒平瓦)

軒平瓦の瓦当面は偏行唐草文。瓦当厚 5cm 前後で、平瓦部の凸面は瓦当面から 7~8cm のところで段頸となるものと、緩やかに平瓦部の凸面にいたるものがある。瓦当文は範で作り、瓦当の上外区に珠文を配し、唐草文主葉が内区の左右界線に接続し、支葉は上下界線から派生する文様を配する。瓦当が薄く、段頸をもたない資料も存在し、細分できる可能性もある。

製作は桶巻き作りで、使用された桶の底面は直径 45cm ほどに復元され、6 分割で作られる。模骨(側板)幅は 3.0cm ほどで 15 枚ほどの側板が使用されたものと考えられる。平瓦部の凸面は綱目叩きをナデ消したもののが散見できる。平瓦部の凹面は模骨痕を残す。

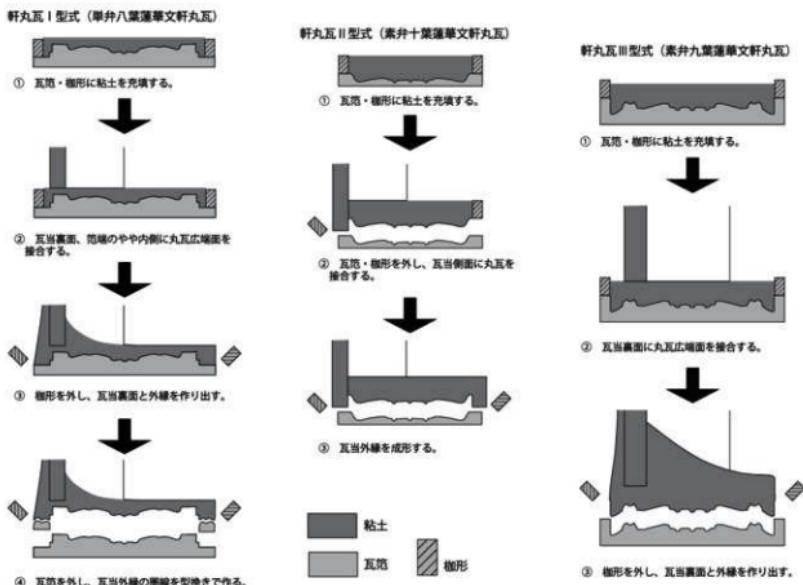
焼成が甘く、脆弱なものが多い。乳白色、灰白色、淡灰色などを呈する。出土点数は 23 点。

D. 瓦当の成形

瓦当文様は瓦范で作り、軒丸瓦Ⅱ型式については決め手に欠くが、いずれも枷形が伴っているものと考えられる。

軒丸瓦Ⅰ型式は、外縁の二重圏線の内側にある段の部分まで瓦范・枷形で作り、瓦当裏面のうち、範端に近いところに丸瓦を接合し、厚く粘土を充填して裏面を作る。二重圏線は型挽きで作り出している。

軒丸瓦Ⅱ型式は瓦当の部分を瓦当あるいは枷形とともに作り、瓦当側面を丸瓦部の広端面のすぐ内側の凹面側にはめ込むことで、丸瓦の広端面の部分がそのまま瓦当の外縁をなす。丸瓦部の剥離によって瓦当側面を観察できるものを確認するといびつなものもあり、枷形を用いて成形しているか、疑わしいものもある。瓦当を丸瓦の凹面に当て込むことを考えると、枷形を用いず、あえて調整しやすいようにした可能性もある。



第128図 軒丸瓦瓦范模式図

軒丸瓦Ⅲ型式は、瓦当面から10mmほど内側に入った丸瓦部の凸面に瓦范と楕形の境と考えられる曲線が認められるので、瓦当外縁まで瓦范・楕形で作り、瓦当裏面のうち、瓦当文様の端の部分に丸瓦を接合し、かなり厚く粘土を充填して裏面を作る。

E. 軒瓦の出土比率

『2012年報告』では、軒丸瓦Ⅱ型式が量的に多い傾向があるが、特に主体を占めているわけではなく、また出土地点についても強い偏向性が見られないことを述べた。現地点での型式別の軒瓦出土点数としては、軒丸瓦はⅠ型式から順に1:2:1、軒平瓦は1:1強:1という割合となっており、軒丸瓦、軒平瓦ともにⅡ型式が最も多いという集計となっている。

第2項 丸瓦・平瓦

『2007年報告』において、小林裕季氏による詳細な検討がなされ、無段式丸瓦、平瓦をそれぞれ3型式に分類し、それぞれの製作技法、年代、出土量は軒丸Ⅰ～Ⅲ型式と対応することが報告された。『2012年報告』においても、さほど見解を改める点もなく、有段式丸瓦を追加する形で報告を行った。『2007年報告』、『2012年報告』を踏まえて、現地点での知見を加えて、本報告で最終的な報告を行う。

建物種別	出土地点・層位	遺構・位置	軒丸			軒平			鬼板 ・鶴尾	熨斗瓦	隅落とし
			I	II	III	I	II	III			
金堂基壇	掘込地業	SK020102埋土		1		1					
	合計		0	1	0	1	0	0	0	0	0
再建期金堂基壇	東辺基壇土	SB060201石積み裏込め							2		1
	西辺基壇土	SB060301石積み裏込め			1						
	東辺整地層	SB060201東辺		4	1	2	6	5		2	
	西辺整地層	SB060301西辺				1					
	東辺堆積層	SB060201東辺			1						
	東辺堆積層	SB100501東辺		1			1				
	西辺堆積層	SB120601西辺		1							
	西辺堆積層	SB110601西辺				1	2				
	北辺堆積層	SB110501北辺	3	5	3	5	2	1	1	1	
	北西辺堆積層	第10次6tr礫層		1			1				
	北西辺堆積層	第10次6tr堆積層	1		1			1			
	南辺堆積層	第10次4tr堆積層		2		1		1			
	南辺堆積層	SD100401埋土			1						
	合計		4	14	8	9	10	13	1	3	1
再建期塔基壇	西辺整地層	SB020201西辺					5		2	1	
	西辺整地層	SB040701西辺		2				1			
	北側整地層	SB070301北辺						1			
	西側堆積層	SB020201西辺		5	1	2	2	1			
	西側堆積層	SB040701西辺		2	1			1		3	
	南辺堆積層	SB110301堆積層		1							
	合計		0	10	2	2	7	4	0	2	4
再建期講堂基壇	南辺堆積層	SB130201南辺		1				1	1		
	合計		1	0	0	0	0	1	1	0	0
再建期中門基壇	西側整地層	第7次2tr整地層	1								
	北側整地層	第11次2tr整地層		1		1					
	西側堆積層	第9次1tr堆積層		1							
	西側堆積層	第9次1tr整地層	2					1			
	西側堆積層	SD110101検出面		2	1	1					
	西側堆積層	SD110101埋土	1					1			
	合計		4	4	1	1	1	2	0	0	0
再建期南門基壇	西側整地層	SD110102埋土	1								
	南側整地層	第12次4tr整地層		1							
	南西側堆積層	第12次2tr礫層	1								
	合計		2	1	0	0	0	0	0	0	0
伽藍東限付近	駆穴建物跡	SK020203埋土	1								
中門基壇東側	土坑	SK060103埋土	1			1					
伽藍北限付近	土坑	SK101002埋土		1							
美浜町教育委員会調査出土合計			13	31	11	14	19	20	2	5	5
福井県教育委員会試掘調査出土合計	金堂基壇付近		2	5	0	2	4	1	0	1	1
個人藏合計			1	1	2	2	2	2	0	0	0
総合計			16	37	13	18	25	23	2	6	6

第13表 興道寺廃寺軒瓦出土点数表

A. 丸瓦・平瓦の成形

長辺の縦方向に粘土板の縦ぎ目が認められることから無段式丸瓦の成形は粘土板巻き付け、平瓦の成形は粘土板桶巻き作りである。興道寺廃寺では一枚作りの平瓦は確認されていない。ただし、凸面に平行叩きを施す丸瓦の一部については、凹面に幅の狭い模骨状の板枠痕が残ることから初期段階の無段式丸瓦の製作にあたっては枠板連結模骨による成形もあった可能性が高いが、総じて木筒による成形によるものと考えられる。

軒瓦を含めた無段式丸瓦、有段式丸瓦、平瓦の凸面に見られる叩き目から、平行叩き 1 原体・正格子 3 原体・斜格子 3 原体・縄目 2 原体の計 9 原体がこれまでに確認されている。

B. 丸瓦・平瓦の叩き目

叩き目の種別を以下に分類し、『2012 年報告』のものを再掲した。

平行 I　叩き目の粗密差、叩きが施された瓦の種別によって a～d の 4 種に細分。いずれも同一原体によるものと思われ、原体の幅は 2.1 cm 前後で、1 単位 4 本の平行文で構成する。平行 I a～平行 I c は平瓦に用いられた叩き目。平行 I a の叩き目の幅は 0.3 cm 前後。平行 I a は平行叩きの中で量的主体を占める。軒平瓦 I 型式の平瓦部凸面の剥離面にこの叩き目が残る。平行 I b は叩き目の幅が 0.4 cm 前後。平行 I c の叩き目の幅は 0.6 cm 前後と粗くなり、同一原体を使用し続けたために平行 I a から I c へと原体の磨耗を招いたものと思われる。平行 I d は丸瓦に用いられた平行叩きで、平瓦と同一原体と思われる。平瓦ではほとんどが端面・側面に対して斜向し、連続的に叩きを施すが、丸瓦は弧状、不定方向の叩き目を疎らに施した後、薄くナデ消している。

正格子 I～III　正格子 I は縦 0.9 cm、横 1.1 cm を 1 単位とする正方形に近い格子目である。原体の彫り込み線は細い。端面に沿って叩き縮め、薄くナデ消される。平瓦のみに見られる叩き目である。正格子 II は縦 0.6～0.7 cm、横 1.0～1.2 cm を 1 単位とする。原体に彫られた格子目がやや不整形であるが、彫り込み線は比較的細い。叩き目の方向は端面に対してやや斜向する。平瓦のみに見られる叩き目である。正格子 III は縦 0.4～0.5 cm、横 0.8～1.0 cm を 1 単位とする長方形の格子目である。格子目は小さく、彫り込み線は太い。正格子 III を残す瓦は比較的多いが、正格子 II をナデ消した際に叩き目が潰れた可能性も考えられる。叩き目の方向は端面に対してやや斜向する。無段式丸瓦、平瓦に見られる叩き目である。

斜格子 I～III　斜格子 I は縦 1.4～1.6 cm、横 1.9～2.1 cm を 1 単位とする均整のとれた菱形の格子目である。彫り込み線は細く、斜格子目を大きく作る。平瓦に見られる叩き目である。斜格子 II は菱形の斜格子目で、縦 0.7～0.9 cm、横 1.3～1.5 cm を 1 単位とする。格子目が小さくなり、彫り込み線はやや太くなる。平瓦に見られる叩き目である。斜格子 III は叩き目の粗密差から III a、III b に細分した。斜格子 III a は縦 0.6～0.7 cm、横 1.2 cm であるが、やや形の崩れた菱形を呈する。斜格子 III b は磨耗のため III a よりもさらに叩き目が崩れる。縦 0.3～0.4 cm、横 1.1～1.2 cm である。粗雑な叩き縮めによって叩き目が広がったものも見られる。また、正格子 III と同様にナデ消した際に叩き目が潰れた可能性も考えられる。平瓦に見られる叩き目である。

縄 I・II　縄 I は、同一原体であるが叩き目をそのまま残す I a とナデ消すもの I b とに細分した。原体の幅は 5.7 cm 前後で、縄の幅は 0.2 cm。1 単位 16 条の縄を原体に巻き付けている。端面に沿って叩き縮める。縄 I b はナデによって縄目が潰れ、細かい叩き目状を呈するが、縄目の幅が I a の原体と一致する。量的には叩き目にナデ消しを施すものが多い。軒平瓦 II 型式、平瓦に見られる叩き目である。縄 II は、同一原体であるが平瓦に見られるものを II a、丸瓦に見られるものを II b とに細分し

た。基本的には叩き目をナデ消すためはっきりと確認できないが、縄目の幅は0.1～0.2cm前後である。平瓦には端面に沿って叩き締めるが、端面に対して斜向するものも見られる。無段式・有段式とともに丸瓦には不定方向に叩きを施す。丸瓦・軒平瓦Ⅲ型式、平瓦に見られる叩き目である。

C. I型式の無段式丸瓦・平瓦

I型式の無段式丸瓦・平瓦は、基本的に叩き目をそのまま残し、あまりナデ消さないことが特徴である。

無段式丸瓦は凸面全体に弧状、千鳥足状、あるいは側面に直交して施された平行叩きを薄くナデ消し、凹面は布目痕を残す。側縁部は凹面を面取りするものと未調整とするものが混在する。

平瓦は、凸面の過半に平行叩きを側面に斜交して連続的に施し、叩き目をそのまま残す。凹面は強い縦ナデで布目をナデ消すものと、布目をそのまま残すものがあり、後者は薄く模骨痕を留める。側縁部は総じて未調整であるが、凸面と凹面ともに側縁に幅の広い削りを施すものも見られる。凸面の広端部・狭端部あたりに正格子（正格子Ⅰ・Ⅱ）、斜格子（斜格子Ⅰ・Ⅱ）の叩きを施すものもあり、凹面の布目をそのまま残すものが大半を占めるが、縦方向に布目痕を強くナデ消し、側縁凹面に面取り状の削りを施すものが見られる。

D. II型式の無段式丸瓦・平瓦

II型式の無段式丸瓦・平瓦は、凸面の叩き目を強いナデでナデ消す。

無段式丸瓦は強いナデで凸面の叩き目をナデ消し、凹面に布目痕を残す。1点のみであるが、正格子の叩き目を残す無段式丸瓦がある。側縁凹面に面取り状の削りを施すものが多いが、未調整とするもの、側縁凸面にも削りを施すものが見られる。

平瓦は凸面の叩き目をナデ消すが、広端部あるいは狭端部に正格子・斜格子の叩き目を薄く留めるもの、凸面の縄目叩きをナデ消し、あるいは薄く留めるもの、凸面全体に強いナデを施して叩き目をナデ消すものがあり、凹面は布目痕、模骨痕を顕著に残している。

E. III型式の無段式丸瓦・平瓦

III型式の無段式丸瓦・平瓦は凸面に縄叩きを施す。

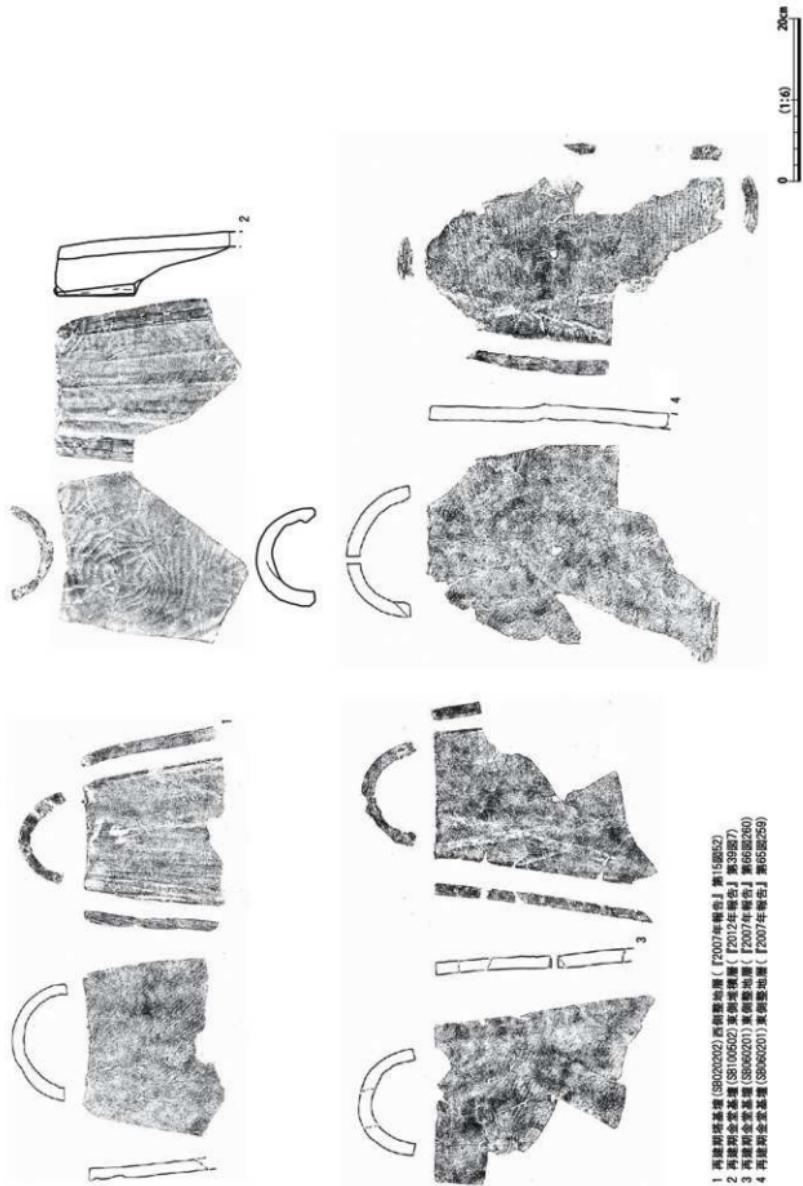
無段式丸瓦は凸面に施された不定方向の縄目叩きを薄くナデ消し、凹面には布目痕を残す。平瓦は凸面の縄叩き目を薄くナデ消し、凹面に布目痕、模骨痕を残す。

有段式丸瓦は玉縁と筒部を一体に成形するもので、筒部の凸面と側面に平行した縄叩きを施すものと叩き目を精緻にナデ消すものとが見られる。側面の凹面側のみ削りを入れて、凸面側はそのまま割り離して未調整としている。III型式の無段式丸瓦と並行する時期の瓦と考えられる。なお、『2007年報告』では有段式丸瓦を軒丸瓦（II型式）の外縁部分と誤認して報告しており（第22図96～98、第49図196など）、『2012年報告』で訂正している。

F. 丸瓦・平瓦の出土量

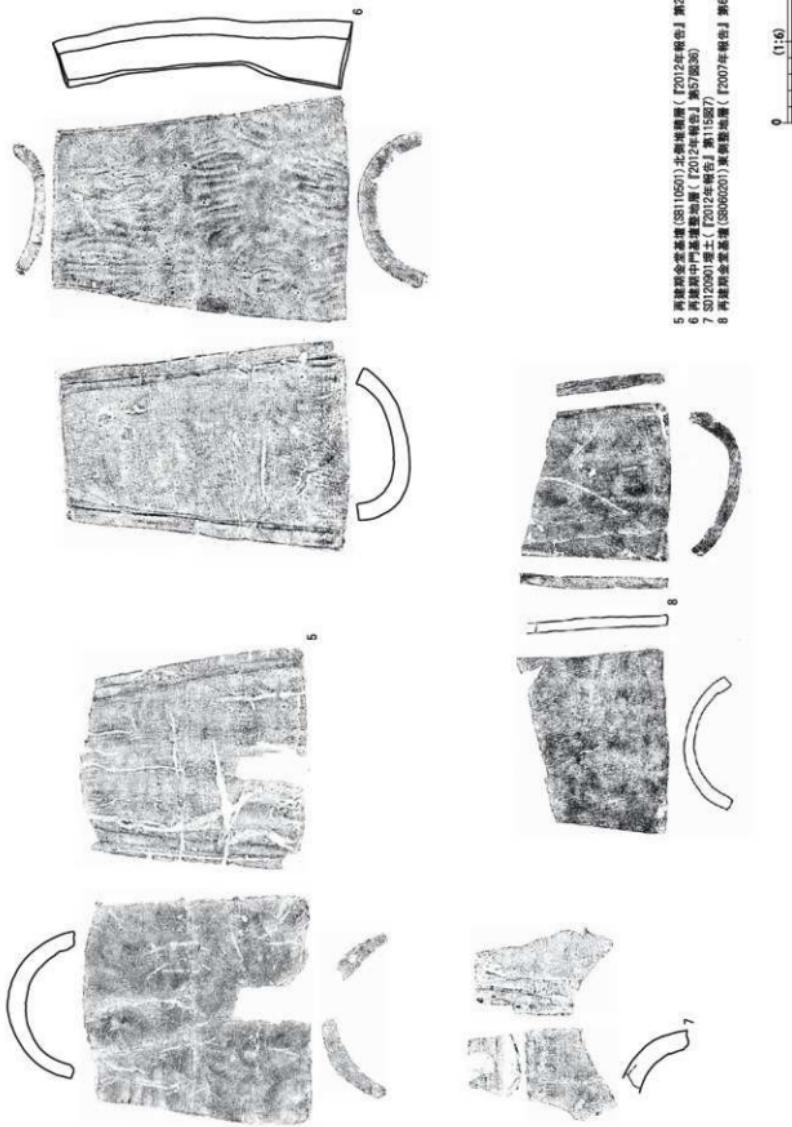
出土量の相対的な比率は丸瓦、平瓦とともにII型式が多く、特に丸瓦、平瓦ともに凸面の叩き目をナデ消すものが主体である。平瓦・丸瓦の出土量について、『2012年報告』では軒瓦I～III型式の量的多寡とほぼ同様の傾向があるものとして報告したが、軒瓦と同様、II型式が占める割合が高い。

第129图 奥道寺庵寺出土瓦类图(1)



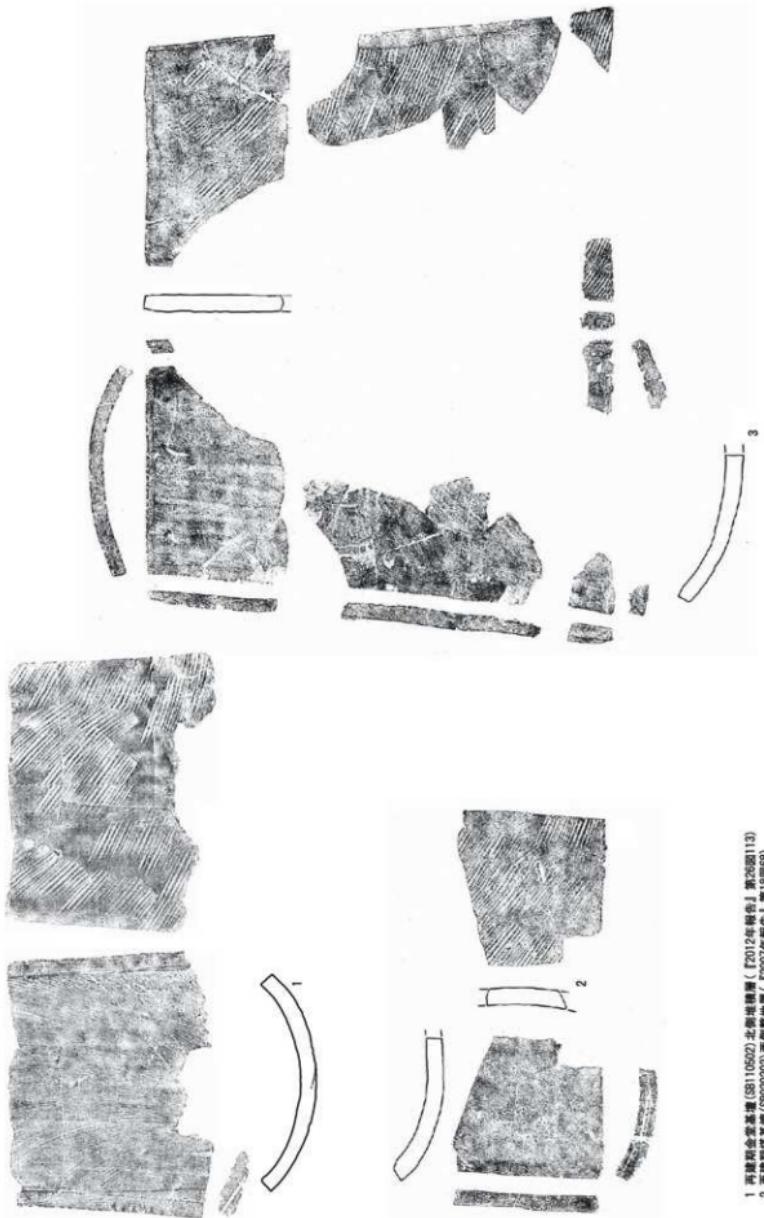
- 1 再施灰陶基座 (SB02020202) 西朝堂基座 (2007年報告) 第15852
- 2 再施灰陶基座 (SB100502) 東廊接座 (2012年報告) 第33987
- 3 再施灰陶基座 (SB0606201) 東廊地座 (2007年報告) 第66186260
- 4 再施灰陶基座 (SB0606201) 東廊地座 (2007年報告) 第658259

第130図 舞道寺廐寺出土丸瓦実測図(2)



0 20cm (1:6)

第131圖 興道寺院出土平瓦實測圖(1)



1. 丙號房金鑄地磚(SB110502)北側鋪地磚(2012年拍攝)第26圖113

2. 丙號房地基(SB202022)西側鋪地磚(2007年拍攝)第15圖68

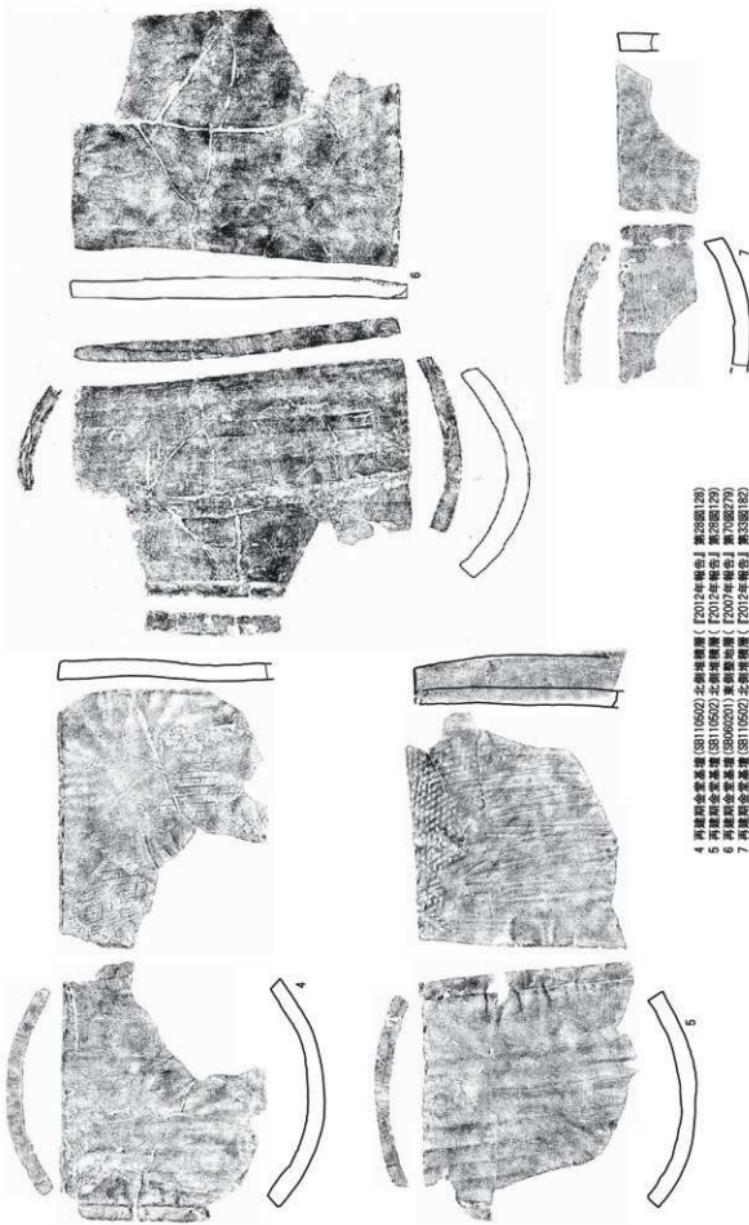
3. 丙號房金鑄地磚(SB060201)東側鋪地磚(2007年拍攝)第26圖70

第132圖 舟道寺廁寺出土平瓦及側瓦(2)

20cm

(1:1)

- 4 再施彩金堂基座 (S8110502) 北側地磚背面 (2012年報告 第28圖128)
5 再施彩金堂基座 (S8110502) 北側地磚背面 (2012年報告 第28圖129)
6 再施彩金堂基座 (S801060201) 東側地磚背面 (2007年報告 第70圖279)
7 再施彩金堂基座 (S8110502) 北側地磚背面 (2012年報告 第33圖182)



ただし、凸面叩きの使用原体の推移から考えると、I型式とII型式、II型式とIII型式において原体の共有が認められ、それぞれの型式間に時期的な断絶は認めがたいものと考えられる。

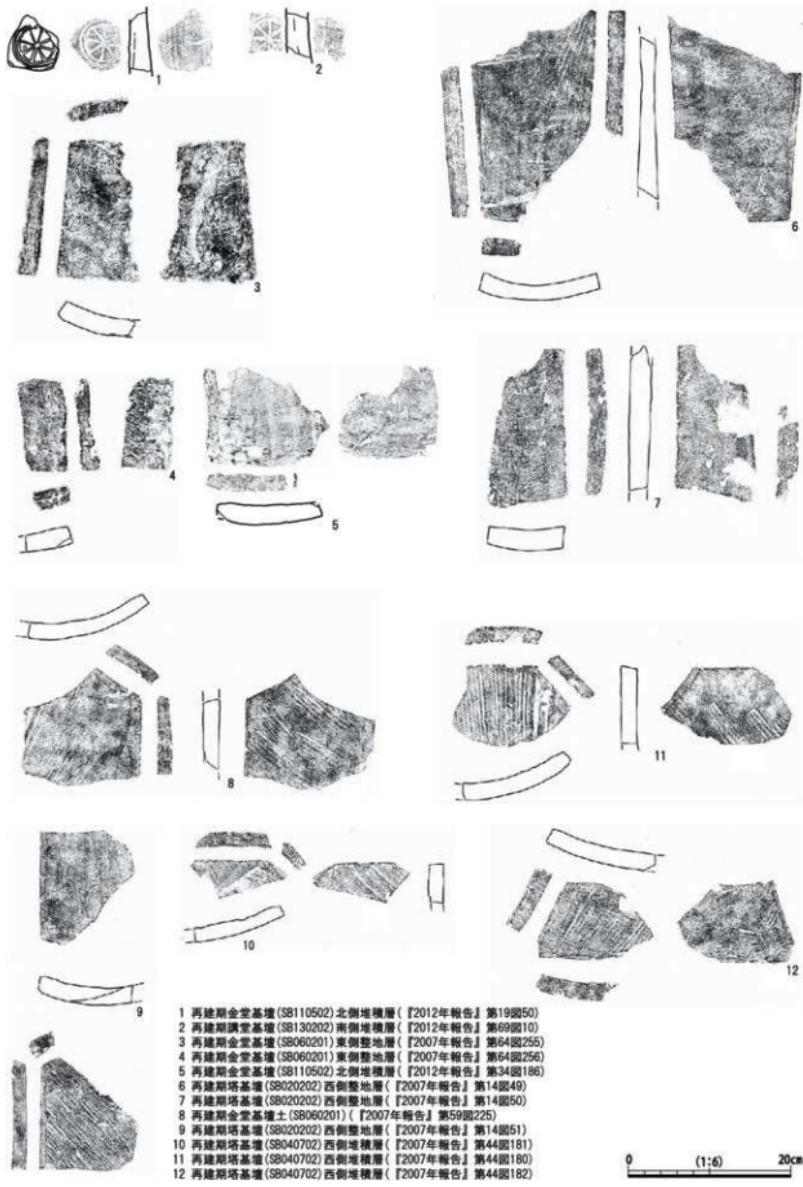
出土地点に関して顕著な偏りは見られないが、基本的に創建期の金堂・塔基壇の整地層に瓦は含まれず、創建期の講堂基壇に伴う整地層から瓦を含み始め、再建期の金堂・塔・中門基壇の整地層に多くの瓦が含まれるようになるが、軒瓦を含めた瓦の型式から各基壇(整地層)の前後関係を追及するのは困難である。軒瓦の傾向としては再建期の塔基壇の整地層に含まれる瓦が再建期の金堂基壇の整地層に含まれる瓦よりも後出的な傾向がありそうであるが、客観的なデータとして示すことができるほど有意な分析に基づくものではない。

第3項 瓦の使用時期

興道寺廃寺出土軒瓦、丸瓦・平瓦の消長から見て、8世紀前半、遅くとも8世紀中葉には瓦の生産を終えている可能性が高い。既報告にて触れているように、堂塔の周囲の再建期整地土には大ぶりな瓦が埋め殺されている状況がある一方で、再建期の金堂基壇などの基壇外装には部分的に軒平瓦III型式が使用されており、また基壇周囲から細片化した多くの瓦が出土している状況を考えれば、堂塔の建て替えに伴い、建物の屋根部材が一律的に瓦から植物素材に切り替わったとも考えにくく、部分的な瓦の使用は8世紀後半以後も続いたものと考えられる。

瓦の種別	成形・凸面・凹面調整	丸瓦・平瓦 I型式	丸瓦・平瓦 II型式	丸瓦・平瓦 III型式
軒平瓦 I型式	凸面平行叩き	普		
軒平瓦 II型式	凸面斜格子叩き		少	
軒平瓦 II型式	凸面ナデ消し		多	
軒平瓦 III型式	凸面繩叩き			多
軒平瓦 III型式	凸面ナデ消し			多
無段式丸瓦	粘土板桶巻作り	少		
	粘土板巻き付け作り	普	普	普
	凸面平行叩き	普	少	
	凸面正格子叩き	少		
	凸面ナデ消し	普	多	普
	凸面繩叩き			普
有段式丸瓦	成形台作り			普
	凸面ナデ消し			普
	凸面繩叩き			普
平瓦	粘土板桶巻作り	普	普	普
	一枚作り			
	凸面平行叩き	多		
	凸面正格子叩き	少	多	
	凸面斜格子叩き	少	多	
	凸面ナデ消し	少	多	多
	凸面繩叩き		少	多
	凹面布目ナデ消し	多		
	凹面布目(模骨痕)	少	多	普

第14表 丸瓦・平瓦の成形・凸面凹面調整の推移



- 1 再建期金堂基礎(SB110502)北側堆積層〔2012年報告〕第19図50
 2 再建期講堂基礎(SB130202)南側堆積層〔2012年報告〕第69図10
 3 再建期金堂基礎(SB060201)東側整地層〔2007年報告〕第64図25
 4 再建期金堂基礎(SB060201)東側整地層〔2007年報告〕第64図256
 5 再建期金堂基礎(SB110502)北側堆積層〔2012年報告〕第34図186
 6 再建期塔基礎(SB020202)西側整地層〔2007年報告〕第14図49
 7 再建期塔基礎(SB020202)西側整地層〔2007年報告〕第14図50
 8 再建期金堂基礎土〔SB060201〕〔2007年報告〕第59図25
 9 再建期塔基礎(SB020202)西側整地層〔2007年報告〕第14図51
 10 再建期塔基礎(SB040702)西側堆積層〔2007年報告〕第44図181
 11 再建期塔基礎(SB040702)西側堆積層〔2007年報告〕第44図180
 12 再建期塔基礎(SB040702)西側堆積層〔2007年報告〕第44図182

第133図 興道寺魔寺出土瓦片・隅落とし瓦・鶴尾尖突瓦

第3項 鶴尾（鬼板瓦）・熨斗瓦・隅落とし瓦

鶴尾または鬼板瓦の一部と考えられるもの、あるいは熨斗瓦や隅落とし平瓦といった道具瓦が若干出土している。

A. 鶴尾（鬼板瓦）

鶴尾または鬼板瓦の一部と考えられる資料が2点出土した。ともに外面には径3cmほどの八葉の蓮華文をモチーフとしたものと考えられる型押し文（スタンプ文）の押圧があり、内側の布目をナデ消したものである。鶴尾であれば蓮華文帯の一部、鬼板瓦であれば外縁の文様帯の一部であったものと考えられる。第133図1は再建期金堂基壇北側の瓦溜まりの堆積層から出土しており、同図2についても出土地点は講堂基壇に近いが、金堂基壇に伴うものと考えられることから金堂基壇に帰属するものと考えられる。

B. 熨斗瓦・隅落とし瓦

熨斗瓦は6点が出土。瓦の成形、調整は平瓦と共に通性が高いものと考えられ、凸面に平行叩きを施すものもあることから、平瓦I型式に平行する時期のものが認められる。5点中、凸面に平行叩きをもつ2点は再建期金堂基壇北側の整地層、再建期塔基壇西側の整地層から出土しており、寺院初期の段階に用いられていたものと考えられる。

隅落とし平瓦が6点出土している。凸面に平行叩きを施す初期段階のものと考えられるものは再建期塔基壇の整地面から出土している。いずれも凸面に平行叩きを施しており、全てが初期に伴う道具瓦と考えられる。

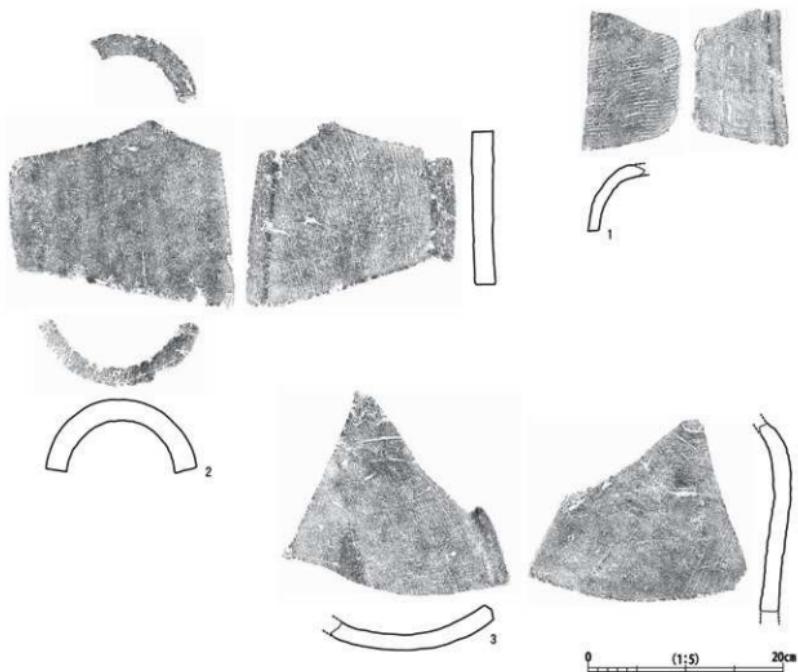
第4項 興道寺廃寺出土瓦の生産地

興道寺廃寺に瓦を供給した瓦窯の所在は明らかではないが、高善庵遺跡の付近に瓦窯の存在が想定されている。水野和雄氏は弥美小学校西分校（現在は廃校）、西保育所（現在は子育て支援センター）の付近に瓦窯の存在を指摘したが（水野1987）、その根拠資料として昭和12（1937）年に小字高善庵から出土したことを墨書きする瓦片4点が現存する。瓦片発見の経緯は不明であるが、その後、美浜町教育委員会に寄贈あるいは寄託されたようで、現在、美浜町教育委員会が資料を保管している。

高善庵遺跡は美浜町興道寺小字高善庵、高達などに所在する周知の埋蔵文化財包蔵地となっており、耳川流域左岸の雲谷山（標高786.6m）から派生する小支尾根先端（標高70.5m）の東斜面の裾部に立地し、遺跡付近から北に向けて河岸段丘面が大きく広がるため、獅子塚古墳、興道寺古墳群などの古墳群や、興道寺遺跡などの集落遺跡、興道寺廃寺などのように古墳時代後期から律令期の遺跡を遠望できる。高善庵遺跡から支尾根を挟んだ西斜面裾部には古墳時代後期の興道寺窯が所在する。

遺跡の北西縁部は日吉神社の他、かつて小学校などの建物が建ち、一部で土砂掘削が行われているなど旧地形が大きく変貌している。

高善庵出土とされる瓦は、丸瓦3点、平瓦1点であり、『2012年報告』にあたって高善庵遺跡の試掘調査結果を含めて資料紹介したが、本報告に際して再図示する。1は丸瓦。凸面に平行叩きを施す。暗灰色。2は隅落とし丸瓦。凸面は側縁に平行する強い縦ナデを施す。凹面には布目とともに糸切り痕を残す。広端、狭端の切断面、側面は未調整。灰色。凸面に「耳村興道寺高善庵出土 昭和十二年十月」と墨書きする。ほぼ完形。3は平瓦。凸面は側縁に平行する強い縦ナデを施す。凹面には一部、模骨痕を残す。焼け歪みが顕著である。凸面に「耳村興道寺高善庵 布目瓦」と墨書きする。青灰色。



第134図 高善庵遺跡出土瓦実測図

平成10（1998）年度に美浜町教育委員会が実施した分布調査で、現在の子育て支援センターの北側に広がる畑地（茶畑）から瓦片、底部に高台を有する須恵器杯片を若干採集し、山裾の畑地に瓦窯が所在する可能性が考えられたため、平成14（2002）年度に高善庵遺跡の試掘調査を行ったが、瓦窯を検出することはできなかった。

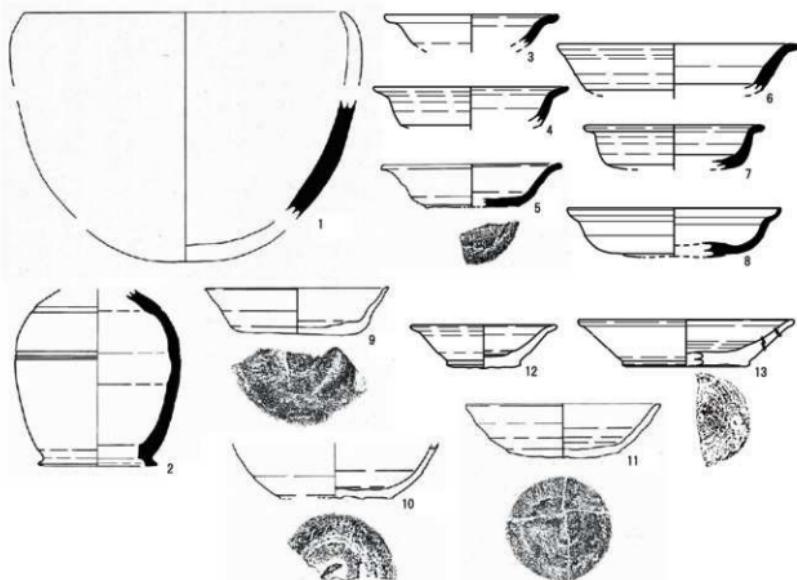
なお、資料紹介した高善庵出土瓦は製作技法、胎土が興道寺廃寺出土瓦と酷似し、また焼け歪んだ平瓦の存在は付近に興道寺廃寺に瓦を供給した瓦窯が存在する可能性を暗示しているものと考えられる。

第3節 寺院関係遺物

第1項 仏器模倣土器

仏器を模倣したと考えられる土器の出土はさほど多くない。鉄鉢形の須恵器と考えられるもの1点が再建期塔基壇西側の堆積層から出土した程度であるが、寺院北方の律令期集落からは8世紀に伴うと考えられる鉄鉢形須恵器、水瓶と考えられる土器などが出土している。律令期集落出土のものを含めても出土量は乏しいので、総じて仏器模倣の土器はあまりみられない状況である。

一方で、灯明に用いられた土器には、8世紀後半から9世紀前半にかけての須恵器杯・皿類と、土師器碗・皿類が一定程度出土しており、金堂基壇や塔基壇の周辺のみでなく、中門基壇の西側や塔基壇の東側など、寺域内から散在的に出土する傾向がある。須恵器皿は器高が浅く、口径が小さく、口縁端部を外反させて作るのが特徴的で、時期差に伴うと考えられる形態差が存在する。土師器碗は須恵器皿に比して口径が大きくなり、やや深みを帯びる。土師器皿は底部に糸切り痕をもつ後出的なものである。いずれも内外面や口縁部付近に煤が付着しており、全体的に黒みを帯びるものもある。基本的には寺院再建期に伴うもので、伽藍城、寺域における佛教活動に伴う土器と考えられる。



- 1 再建期塔基壇(SB020202)西側堆積層(『2007年報告』第12図35)
2 瓦礫文調査区合層(『興道寺遺跡』2003 第17図55)
3 再建期金堂基壇(SB100502)東側堆積層(『2012年報告』第38図1)
4 SK100802埋土(『2012年報告』第103図2)
5 再建期塔基壇(SB070301)北側堆積層(『2007年報告』第88図362)
6 SK100101埋土(『2012年報告』第84図12)
7 SD110101埋土(『2012年報告』第65図1)
8 SB100101埋土(『2012年報告』第84図1)
9 SK070201埋土(『2007年報告』第84図348)
10 再建期塔基壇(SB040702)西側堆積層(『2007年報告』第41図156)
11 再建期塔基壇(SB070301)北側堆積層(『2007年報告』第88図366)
12・13 創建期講堂基壇(SB120801)北側堆積層(『2012年報告』第72図8・9)

0 (1:3) 10cm

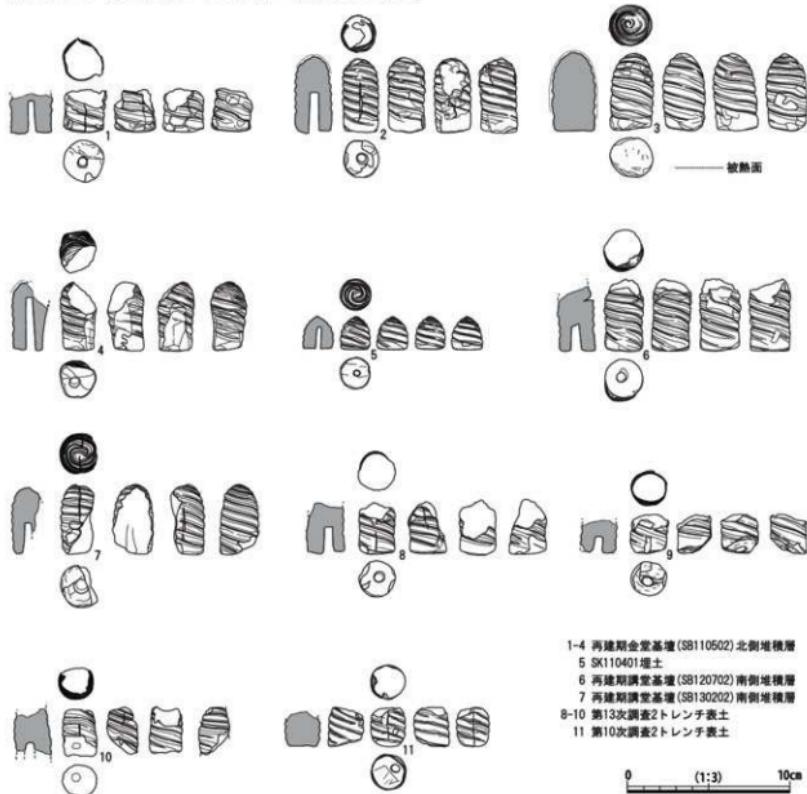
第135図 興道寺廃寺出土仏器模倣土器・灯明皿実測図 [一部、福井県埋蔵文化財調査センター2003から転載]

これらの土器の年代観は、寺院再建期の8世紀後半以降のものが多く、土器師椀は再建期塔基壇の堆積層に含まれるものがあるので、8世紀後半から9世紀に伴うものと考えられる。

第2項 塑像螺髮

計11点の塑像螺髮が出土した。螺髮は円錐形と砲弾形からなり、円錐形は再建期塔基壇の心礎抜き取り坑と考えられるSK110401埋土から1点が出土した。また、砲弾形は再建期金堂基壇北側の堆積層（表土を含む）を中心に10点が出土している。

いずれも型作りで、螺髮の側面の片側、もしくは両側に型の合わせ目が残るものがある。法量は円錐形のものが器高2.0cm、底面径1.8cm、砲弾形のものは器高の最大4.7cm、底面径は2.1~2.7cmと幅がある。1点を除いて底面には穿孔があるが、その位置、深さは不定である。底面を斜めに一段、ないしは二段にカットしたものもあり、また側面2か所に押さえナデを施したものもあるなど、塑像頭部への取り付けはその部位に応じて工夫がされていたようである。砲弾形の塑像2点には頂部から側面にかけて被熱痕跡があり、釉の付着も見られる。



第136図 興道寺廃寺出土塑像螺髮実測図

第3項 土壁

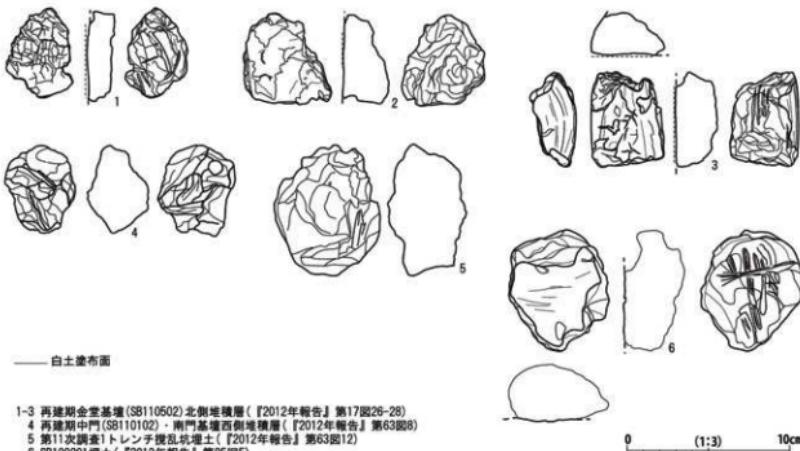
再建期金堂基壇北側の堆積層から3点、再建期中門基壇・南門基壇の西側の堆積層から1点、付近の搅乱坑から1点、塔基壇東側の竪穴建物跡SB100201 埋土から1点、計6点の土製遺物が出土した。いずれも建物部材の土壁と考えられるもので、再建期金堂基壇北側の堆積層出土の3点（第137図1～3）、塔基壇東側の竪穴建物跡SB100201出土の1点は平滑な面をもち、特に1～3は表面に白土が塗布されている。

この1～3については、金堂内部の壁面の一部、もしくは塑像の一部である可能性が高く、前者の場合、壁画の顔料が残っていることも考えられたことから、奈良大学文学部文化財学科の西山要一教授のご配慮により、第137図3の土壁の平坦面のうち、白土の上の黒色顔料が付着しているように見受けられる部分、白土が塗られた部分、白土が剥がれて土壁の素地が露出した部分に関して、平成22年4月15日に奈良大学において蛍光エックス線分析を行った。

分析測量点は11点で、黒色の部分が5点、白土の部分が3点、土壁の素地部分が3点という内訳である。黒色の部分と土壁素地の部分は検出元素に大きな差はなく、黒色部分から鉄が多く検出され、顔料として酸化鉄（ベンガラ）の可能性も考えられたが、土壁部分からも同様に鉄が多く検出されたため、積極的に顔料とは認めにくい結果であった。また、黒色部分から銅が全く検出されず、黒色部分に顔料として群青、緑青の使用は考えられない。

番号	出土地点	器形	器高 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	整形	螺旋		底面穿孔			底面削り	色調	備考
							方向	巻数	有無	径 (mm)	深 (mm)			
1	SB110502北側堆積層 第11次調査5トレンチ	砲弾	(27)	25	(14.9)	型	右巻	(4)	有	7	19	有?	淡灰	上部欠損、1箇所に型合わせ痕、底面全体を斜めに削り? 『2012年報告』第17回29
2	SB110502北側堆積層 第11次調査5トレンチ	砲弾	47	22	26.1	型	右巻	10	有	7	21	無	淡灰	丸形、頂部に被熱痕（袖付帯） 『2012年報告』第17回30
3	SB110502北側堆積層 第11次調査5トレンチ	砲弾	48	27	29.3	型	右巻	9	無	—	—	有	淡灰	丸形、頂部～側面に被熱痕跡、底面を斜めに2面に削り 『2012年報告』第17回31
4	表土 第11次調査5トレンチ	砲弾	(42)	23	(19.5)	型	右巻	9	有	7	32	有	淡灰	上部欠損、側面2面に削り、底面を斜めに削り 『2012年報告』第34回187
5	SK110401埋土 第11次調査4トレンチ	円錐	20	18	7.0	型	右巻	6	有	4	8	無	灰	丸形 『2012年報告』第52回35
6	SB110701南側堆積層 第12次調査7トレンチ	砲弾	(45)	23	(24.5)	型	右巻	(8)	有	6	14	無	淡灰	上部欠損、2箇所に型合わせ痕 『2012年報告』第68回4
7	SB130202南側堆積層 第13次調査2トレンチ	砲弾	(43)	—	(18.3)	型	右巻	10	有	6	(20)	—	黒褐色	上部・側面・底面欠損、2箇所に型合わせ痕 『2012年報告』第69回8
8	表土 第13次調査2トレンチ	砲弾	(24)	21	(16.5)	型	右巻	(4)	有	7	13	有	淡黒	上部欠損、2箇所に型合わせ痕、底面を斜めに削り 『2012年報告』第71回29
9	表土 第13次調査2トレンチ	砲弾	(44)	23	(12.5)	型	右巻	(2)	有	6	14	有	橙	上部・底面欠損、底面を斜めに2面削り 『2012年報告』第71回30
10	表土 第13次調査2トレンチ	砲弾	(29)	—	(12.8)	型	右巻	(6)	有	4	(7)	—	黄灰	上部・底面欠損、2箇所に型合わせ痕 『2012年報告』第71回31
11	表土 第10次調査2トレンチ	砲弾	(24)	21	(10.1)	型	右巻	(4)	有	4	6	有	淡灰	上部欠損、2箇所に型合わせ痕、底面全体を斜めに削り 『2012年報告』第85回8

第15表 興道寺廃寺出土塑像螺髮一覧表



第137図 興道寺庵寺出土土壁実測図

これらのことから、黒色部分が壁画顔料であると積極的に認める根拠は得られなかった。ちなみに法隆寺西院伽藍金堂壁画で使用されている白土から検出されている化学成分は珪酸アルミニウムであるが、今回分析した土壁の白土部分に突出したアルミニウムの検出は認められていないので、この土壁の平坦面に壁画が描かれていた可能性は低いものと考えられる。

第4節 金属遺物

第1項 銭貨

再建期中門基壇の西側の整地層を中心に奈良時代に鋳造された銭貨が14点出土した。いずれも銅銭で、銭種の構成は和同開珎3枚（第138図1・4・7）、萬年通寶4枚（同図3・5・8・10）、神功開寶6枚（同図2・6・9・11・12・14）、萬年通寶か神功開寶かいずれかに属するもの1枚（同図13）である（銭種不確定を含む）。総じて腐蝕が進み、遺存状況は悪い。

和同開珎は完形品の7で外縁外径23.1mm、外縁内径18.0mmを測る。萬年通寶は完形品の8で外縁外径26.2mm、外縁内径21.2mmを測る。神功開寶は、外縁外径25.0~26.1mm、外縁内径19.5~21.1mmを測る。

第2項 鉄釘・その他の金属製遺物と鍛冶関連遺物

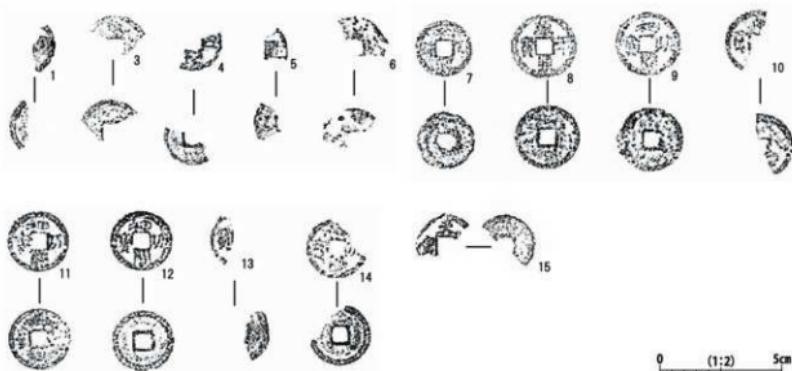
伽藍内外から散在的な金属製遺物の出土があるが、特に多いのが鉄釘である。特に再建期金堂基壇北側の堆積層からは鉄釘12点が出土している。現存長10~20cmの大型品が目立つ。それ以外にも環状の持ち手と考えられる鉄製品1点も出土しており、ともに金堂の建物部材であった可能性が高い。

塔基壇の東側で検出された竪穴建物跡SB100101（SB100201）は寺院造営の伴う工房的な施設と考え

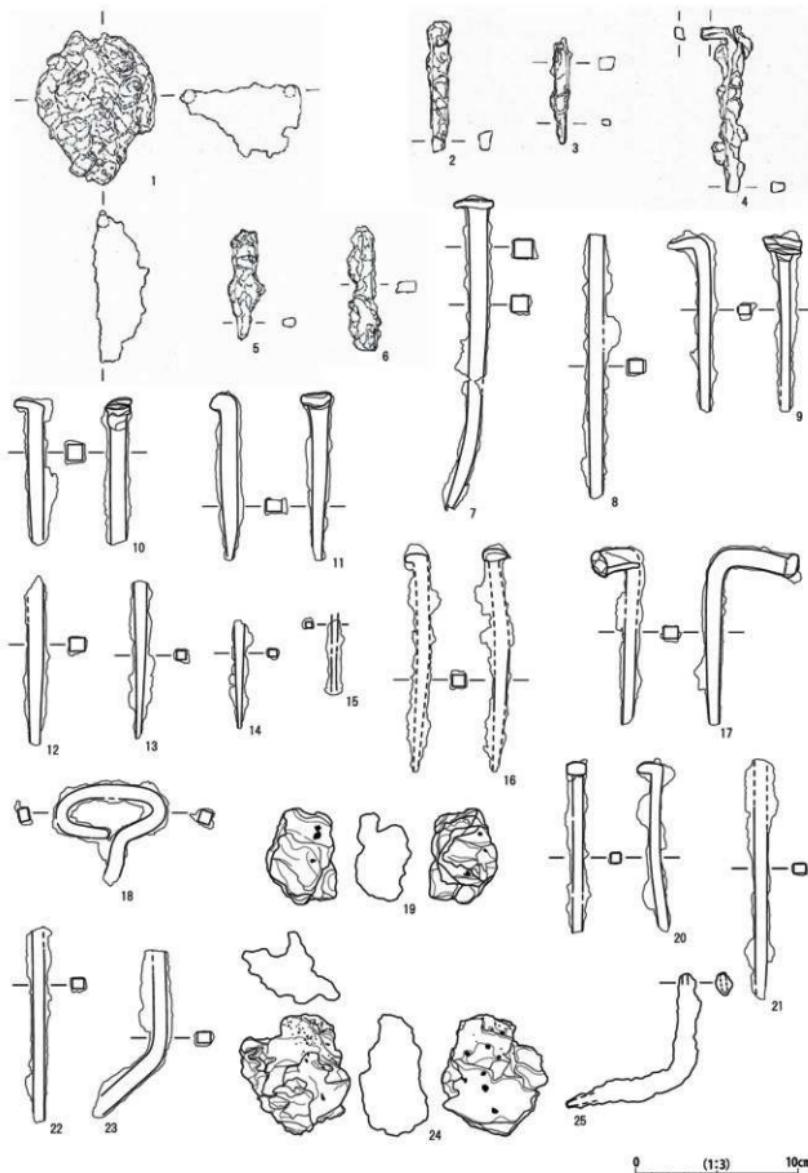
られ、8世紀前半の土器とともに、建物の南辺に沿って位置する焼土坑SK100104の埋土には鉄粉が含まれていたように、寺院造営に伴う小鍛治（鍛錬鍛治）が行われていた可能性がある。また、寺院北方の律令集落において8世紀に伴う鞆羽口、鉄滓などが出土しており、寺院周辺では潜在的な小鍛治が展開し、鉄製品を生産していた可能性もうかがえる。

番号	出土地点	銭名	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	内部外径 (mm)	内部内径 (mm)	外縁厚 (mm)	文字面厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	SB080301西辺基壇土 (P080302底面)	和同開珎	(24.6)	(20.2)	—	—	1.5	0.7	(0.7)	欠損「〇同〇〇」 『2007年報告』431
2	SB080301西辺基壇土 P080302最上面	神功開寶	—	—	—	5.8	1.2	0.8	(0.5)	欠損「〇〇開寶」 『2007年報告』432
3	SB080301西辺基壇土 P080303底面	萬年通寶	(26.2)	(22.2)	(7.3)	6.0	1.5	0.9	(0.7)	欠損「萬〇〇〇」か 『2007年報告』433
4	SB080301西辺基壇土 P080302・P080303検出面	和同開珎	(24.8)	(21.2)	—	(5.8)	1.3	0.8	(0.6)	欠損「〇同開〇」 『2007年報告』434
5	SB080301西辺基壇土 P080302・P080303検出面	萬年通寶	—	—	—	—	1.2	0.9	(0.4)	欠損「〇〇〇〇」 『2007年報告』435
6	SB080301西辺基壇土 P080302・P080303検出面	神功開寶	(27.2)	(24.0)	—	(5.2)	1.3	0.9	(0.8)	欠損「神〇〇〇」 『2007年報告』436
7	SB080301西辺基壇土	和同開珎	23.1	18.0	7.4	6.3	1.2	0.9	1.8	完形 『2007年報告』437
8	SB080301西辺基壇土	萬年通寶	26.2	21.2	8.0	6.0	1.5	1.0	2.8	完形 『2007年報告』438
9	SB080301西辺基壇土	神功開寶	26.1	21.1	7.9	6.0	1.1	0.7	1.8	完形 『2007年報告』439
10	SB080301西辺基壇土	萬年通寶	(27.4)	(22.2)	—	—	1.3	0.9	(0.7)	欠損「萬〇〇實」 『2007年報告』440
11	SB080301西辺基壇土	神功開寶	25.3	20.1	7.5	6.0	1.5	0.7	2.6	完形 『2007年報告』441
12	SB080301西辺基壇土	神功開寶	25.0	19.5	7.8	5.6	2.0	1.6	3.4	完形 『2007年報告』442
13	SB080301西辺基壇土	不明	(28.1)	(24.7)	—	5.2	1.3	0.6	(0.7)	欠損「〇〇實」 『2007年報告』443
14	SB080301北辺基壇土	神功開寶	25.1	21.0	7.8	6.3	1.3	1.1	(1.6)	一部欠損 『2007年報告』444
15	第10次調査2トレンチ 地山面	不明	(23.0)	—	—	—	—	0.9	—	欠損「天〇〇實」 『2012年報告』第85回

第16表 興道寺廃寺出土銭貨一覧表



第138図 興道寺廃寺出土銭貨拓影



第139図 興道寺廃寺出土金属製遺物実測図

番号	調査次数 調査区	遺構・層位	種別	法量 (cm)	残存部位	備考
1	第2次2tr	再建期塔基壇(SB020201) 西側堆積層	不明	現存長9.3×7.4、現存厚4.6、 296.0g	破片、鉄滓か	『2007年報告』第12回39
2	第6次1tr	SK060103埋土	鉄釘	現存長7.9、断面1.1×0.8	脚部	『2007年報告』第55回209
3	第6次1tr	SK060103埋土	鉄釘	現存長6.5、断面1.0×0.7	脚部	『2007年報告』第55回210
4	第6次1tr	P060103埋土	鉄釘 (折釘)	現存長10.1、断面0.8×0.6	頭部～脚部	『2007年報告』第55回215
5	第8次3tr	再建期中門基壇(SB080301) 堆積層	鉄釘	現存長6.8、断面0.7×0.6	脚部	『2007年報告』第100回406
6	第8次3tr	再建期中門基壇(SB080301) 堆積層	鉄釘	現存長7.6、断面1.2×0.7	脚部	『2007年報告』第100回407
7	第11次5tr	再建期金堂基壇(SB110501) 北側堆積層	鉄釘 (大釘)	現存長19.2、断面1.1×1.1	ほぼ完形	『2012年報告』第16回18
8	第11次5tr	再建期金堂基壇(SB110501) 北側堆積層	鉄釘	現存長16.2、断面0.8×0.9	基部	『2012年報告』第16回19
9	第11次5tr	再建期金堂基壇(SB110501) 北側堆積層	鉄釘 (折釘)	現存長10.8、断面0.6×0.8	頭部～基部	『2012年報告』第16回20
10	第11次5tr	再建期金堂基壇(SB110501) 北側堆積層	鉄釘 (大釘)	現存長8.7、断面0.9×0.9	頭部～基部	『2012年報告』第16回21
11	第11次5tr	再建期金堂基壇(SB110501) 北側堆積層	鉄釘	現存長10.2、断面0.7×0.9	頭部～基部	『2012年報告』第16回22
12	第11次5tr	再建期金堂基壇(SB110501) 北側堆積層	鉄釘	現存長10.5、断面0.8×0.9	基部	『2012年報告』第16回23
13	第11次5tr	再建期金堂基壇(SB110501) 北側堆積層	鉄釘	現存長9.6、断面0.5×0.6	脚部	『2012年報告』第16回24
14	第11次5tr	再建期金堂基壇(SB110501) 北側堆積層	鉄釘	現存長6.7、断面0.4×0.5	脚部	『2012年報告』第16回25
15	第9次1tr	再建期中門基壇(SB090101) 西側整地層(削剝部分)	鉄釘	現存長4.3、断面3.8×3.6	基部	『2012年報告』第59回6
16	第12次7tr	再建期講堂基壇(SB120702) 南側堆積層	鉄釘 (折釘)	現存長13.8、断面0.6×0.7	頭部～脚部	『2012年報告』第68回1
17	第12次7tr	再建期講堂基壇(SB120702) 南側堆積層	鉄釘 (折釘)	現存長10.8、断面0.7×0.9	頭部～脚部	『2012年報告』第68回2
18	第12次7tr	再建期講堂基壇(SB120702) 南側堆積層	鉄製品 (腰袋把手)	現存長6.0	環状部分完形	『2012年報告』第68回3
19	第13次2tr	再建期講堂基壇(SB130202) 南側堆積層	鉄滓	現存長6.0×4.1、現存厚3.2	破片	『2012年報告』第69回6
20	第13次2tr	再建期講堂基壇(SB130202) 南側堆積層	鉄釘	現存長10.4、断面0.6×0.6	頭部～基部	『2012年報告』第69回7
21	第11次2tr	再建期中門基壇北側地壇	鉄釘	現存長14.8、断面0.8×0.6	頸部欠損	『2012年報告』第77回4
22	第11次1tr	再建期南門基壇(SB111101) 堆積層	鉄釘	現存長11.9、断面0.6×0.8	基部	『2012年報告』第90回17
23	第11次1tr	再建期南門基壇(SB111101) 堆積層	鉄釘	現存長10.2、断面0.6×0.8	基部	『2012年報告』第90回18
24	第10次1tr	P101104埋土	銅幣	現存長7.4×6.4、現存厚3.8	破片	『2012年報告』第99回4
25	第9次8tr	SK090804埋土	鉄釘	断面1.2×0.3	基部	『2012年報告』第118回12

第17表 輿道寺魔寺出土金属製造物一覧表

第5節 自然遺物

第1項 花粉・胞子化石

第16次調査2トレンチにおいて寺域西限に伴うと考えられる南北溝が検出された。興道寺廃寺においては総じて乾燥地域で、水はけも良く、これまでに木製遺物の出土は全くないが、この溝は寺域内の排水も兼ねた基幹水路の機能も備えていたものと考えられたことから、古植生を復元する手掛かりを得ることを目的として、溝埋土の花粉分析を行った。花粉分析自体は外部の調査機関（株式会社イビソク、株式会社パレオ・ラボ）に委託の上、実施し、その成果を本節に収録するとともに、平成26年11月に愛知県埋蔵文化財センターが開催した考古学セミナー「あいちの考古学2015」においてポスター報告した（愛知県埋蔵文化財センター2015）。

分析にかかる試料は、調査時に溝埋土の底面に近いところから採取した。本書収録の第80図、土層断面図のうち、B-B'断面のSD160202の12、黒褐色土10YR3/2（径20cmまでの礫多く含む、地山土混じる）が試料No.1、13、黒褐色土10YR2/2が試料No.2、14、黒褐色粘質土10YR3/2が試料No.3である。3試料を検鏡した結果、検出された花粉は樹木花粉10、草本花粉10、シダ植物胞子2の計22である。いくつかの分類群の産出が確認できたが、花粉・胞子化石の残存度は乏しく、検出量も十分ではなかったため、分布図を示すことはできない。今回の花粉化石の結果から古植生について言及することは困難であるが、試料No.2で栽培植物のソバ属の産出が確認された。ソバは虫媒花で広範囲に花粉が散布しないと考えられるため、試料No.2の堆積時期にはこの溝周辺においてソバ栽培が行われていた可能性がある。

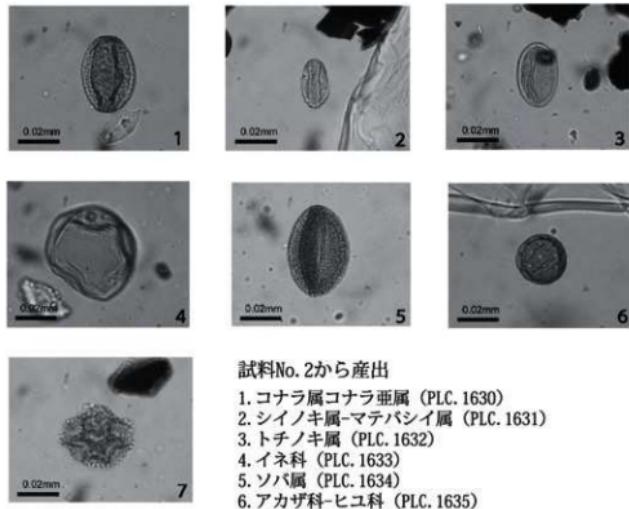


写真21 SD160202 埋土から検出された花粉化石

学名	和名	No. 1	No. 2	No. 3
樹木				
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属複維管束亞属	1	1	-
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	2	-	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	1	2	5
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	-	-
<i>Fagus</i>	ブナ属	-	1	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	2	2	2
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイノキ属一マテバシイ属	3	3	9
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属一ケヤキ属	1	-	-
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	2	2	4
<i>Styrax</i>	エゴノキ属	-	-	1
草本				
Gramineae	イネ科	5	20	26
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	-	-
Moraceae	クワ科	-	1	-
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	-	2	-
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科ヒユ科	2	3	1
Brassicaceae	アブラナ科	1	3	1
Rosaceae	バラ科	-	-	1
Apiaceae	セリ科	2	1	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	8	2	2
Liguliflorae	タンボボ亜科	2	2	3
シダ植物				
monolete type spore	単条溝胞子	9	11	5
trilete type spore	三条溝胞子	1	10	5
Arboreal pollen	樹木花粉	13	11	21
Nonarboreal pollen	草本花粉	21	34	34
Spores	シダ植物胞子	10	21	10
Total Pollen&Spores	花粉・胞子総数	44	66	65

第18表 SD160202 埋土検出花粉・胞子化石一覧

一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的な環境に堆積すると紫外線や土壤バクテリアなどによって分解され消失するため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくいとされる。そもそも今回の分析試料には花粉化石がほとんど含まれていなかったこともあり、堆積時あるいはその後の環境において常に乾燥した環境にさらされていたものと考えられる。

今回の花粉分析によって、ある程度の種類の樹木、草木の花粉が確認された。その量が少なかったのは、遺跡そのものが乾燥地帯で、その環境が比較的古くまでさかのぼることに起因するのであろう。興道寺廃寺の今後の史跡整備を考える上で参考にすべき古植生に関する基礎データを得ることができたと言える。

第6章 総括

第1節 興道寺廃寺の伽藍域と寺域

第1項 伽藍域と寺域の把握に関する経過

興道寺廃寺の伽藍に関して、『2007年報告』の段階では塔と金堂が東西に並び、その南方に中門が位置する可能性が高まった。ただし、金堂基壇の南辺と北辺の位置が不明であり、南面するものか、東面するものか、はつきりしなかったため、「法起寺式」あるいは「觀世音寺式」の伽藍配置を想定している。また、中門基壇の南北軸の方位が、金堂、塔基壇の方位と大きく異なり、中門の基壇積み土に瓦、銭貨が含まれることから伽藍の整備に複数の時期が存在した可能性を示唆した。中心伽藍の範囲は南北約70mの長さを想定したが、講堂基壇自体が未検出であった状況を考えれば、その具体的な根拠はない。また、この時には寺域の四至および規模について具体的に報告できなかった。

『2012年報告』の段階では、第19表、第140・141・144・145図に示すとおり、寺院創建期、再建期とも言うべき大きく2つの時期の伽藍域、寺域の様相を確認し、いわゆる「法起寺式」の伽藍配置をとることが判明した。それ以後、第16次調査に至るまで伽藍域、寺域に関する大きな変更はないので、『2012年報告』を骨子として一部、加筆修正を加えて、第4章の記述と一部重複するが、以下のとおり総括する。

第2項 寺院創建期の伽藍域、寺域

伽藍域に関しては、金堂、塔、講堂の各基壇、伽藍北限に伴う東西溝を検出した。金堂・塔基壇の南北軸の方位は座標北から6度西偏するが、建立時期が金堂、塔などから遅れるものと考えられる講堂基壇の南北軸の方位は座標北から10度西偏するものと考えられる。便宜上、前者に伴う時期を創建1期、後者に伴う時期を創建2期と呼称する。創建2期段階の伽藍域は中門基壇の推定位置と講堂基壇との中心間の距離で約51mとなる。東西で50m強の範囲と想定する。

創建期の建物基壇は標高24.0m前後の高さに基壇の基底部がある傾向にあり、この高さに設計GLのような基準がありそうである。また、特に金堂・塔基壇では、おそらく全体的な掘込地業による地山層の掘削が見られ、基壇部分を掘り残して基壇状とし、基壇縁辺の部分は溝の底面としてそのまま残し、基壇の外側は盛土による整地を施すといった構築上の特徴が認められる。

金堂基壇の規模は東西約16.8m、南北約13.8m。令小尺(1尺=0.300m前後)で東西56尺、南北46尺(以下、同じ)。再建期の基壇積み土に埋め殺された縁辺に外装の痕跡は認められないが、石積みを再建期に再利用したものと考えられる。基壇の縁辺は地山層を削り出して基壇の縁辺を造り出すように基壇の周囲に掘込地業を施し、基壇縁辺の部分をそのまま溝として残し、その外側に整地を施している。基壇積み土は地山面の上にかなり精緻な版築を施している。

塔基壇の規模は一辺12.0m、40尺。基壇の西側では金堂基壇と同様に地山層を削り出して基壇縁辺を造り、溝として残しながら外側に整地を施す。基壇の東側は溝を掘削することで基壇内外を区画するようである。外装は不明。

講堂基壇は東西約18.0m、南北約12.0m、東西60尺、南北40尺に復元できる。北側と東側は基壇縁辺付近に掘込地業を施した後、その底面から基壇積み土を盛土しながら、基壇縁辺をそのまま溝

とし、北側ではその外側に整地を施している。一方、基壇の南側ではおそらく地山面あるいは創建期金堂基壇北側の整地面の上に黄褐色系の良質な粘土、粘質土を用いて整地し、その上部に基壇の積み土を載せている。基壇西側でこの整地面に据えた西辺石積みの基底石と考えられるものを検出したが、これ以外に外装に関する情報はない。

金堂、講堂とともに礎石、据え付け掘り方ともに失われ、建物の構造は不明であるが、塔初層の柱間については中央間 3.0m、脇間 1.8m と想定する。

伽藍域の四至については推定中門基壇、講堂基壇の位置から南北辺を考えるしかないが、一連の調査において回廊状の施設が未検出である。講堂北辺から東に向かって延び、東の段丘崖に排水を行ったと考えられる溝 3 が排水溝に留まらず、伽藍内外を区画する施設として機能したものと考えると、創建期の伽藍区画施設は未発達であったものと考えられる。

このことは伽藍南限と東限の様相からもうかがうことができ、伽藍の南東隅部にあたる付近で中門基壇の推定方位に沿う L 字形に延びる柱穴列、あるいは南北方向に延びる柱穴列が存在する。伽藍の区画施設として、掘立柱塀の存在が想定されるが、やはり回廊状施設の存在は想定しがたい。

寺城南限に関して、南門基壇が未検出であるが、再建期南門基壇の下層から南北に並列する東西溝 2 条を検出し、溝間の地山面に盛土地業が施された様相が認められることから築地を伴う寺城南限施設の存在を想定する。溝の方位は金堂基壇の南北軸と直交する方位であり、創建 1 期に伴う溝と考えられる。一方、寺城北限は現地形の微地形観察でも確認できる地山面が落ち込む東西ライン付近に所在を想定する。この方位は講堂基壇の南北軸と大体直交することから創建 2 期に伴うものと考えられ、創建 2 期の段階の寺城として南北約 120m の範囲と考えられる。

講堂基壇から寺城北限付近までの範囲においては、講堂基壇の南北軸に大体沿う掘立柱建物跡 3 棟、柱穴列 1 基、区画痕跡 1 基などを検出しており、創建 2 期にかけて寺院北方施設の整備が進められたようである。塔基壇の東側、南東側で検出した掘立柱建物跡 1 棟、竪穴建物跡 2 棟の建物方位は創建 1 ~ 2 期の範囲内には収まるものの、そのいずれかに伴うものは断言できない。竪穴建物跡 4 出土遺物から考えて、創建期のいずれかの時期に伴うものである。近接する掘立柱建物跡 6 を含めて、寺院造営に伴う工房、あるいは管理施設が伽藍域に近在したあり方がうかがえる。

なお、興道寺廃寺の塔基壇に関しては、後述する再建期基壇も同様、塔身に対して基壇の規模が小さい一例として箱崎と久氏に論じられており、その中でも「興道寺廃寺の両塔の数値は、国分寺塔を含めても小さく、三手先組物を備えた塔を想定するには、塔身と基壇の規模が適切でない可能性がある。(中略)、心礎が検出されておらず、塔以外の 3 間堂の可能性を含めて検討すべきかもしれない。(後略)」と指摘されている(箱崎 2012)。創建期、再建期とともに基壇の遺存状況は良好ではなく、これ以上発掘調査で塔基壇の規模を追求するのは実質的に困難ではあるが、検出遺構の様相から判断しても現時点で認識している基壇の規模がさらに大きくなるものとして再評価できる余地は小さい。興道寺廃寺の伽藍の場合、金堂と塔、金堂と講堂においても軒の出が近い特徴があり、かなり窮屈な伽藍であったことが特徴の一つとして考えられる。

創建期塔基壇に関しては断片的な調査に留まり、箱崎氏の指摘を明確に否定できる根拠は乏しいが、それでも再建期基壇では塔心礎の抜き取り痕と考えられる土坑を検出しており、また金堂の東側に位置するなど伽藍配置の特性から見ても塔以外の建物も想定しにくく、塔と考えることが妥当である。興道寺廃寺では再建期の伽藍が初期伽藍を引き継いで成立していることを考えても、現段階で塔以外の、箱崎氏が指摘する 3 間堂の礎石建物の存在は想定していない。創建期においても塔であるものと想定しておきたいが、興道寺廃寺のあり方を考える上で、今後も検討を深める必要がある。



第140図 興道寺廃寺伽藍城・寺域造構平面模式図（縮尺1/500）

時期	建物(構体)	基準標高	基準外装	方位	標 高 (m)	備 考
創建 1 期 7世紀後半～ 8世紀前半 (第1四半期)	金 堂	規格 東西約16.8m、南北約13.8m 外装 方位 N-6° - W	基準標高24.35～24.4 東側整地面23.9、南西隅部修復面23.45～23.55 東側付近の地山面24.15 SD100401底面の地山面23.4		第10次調査 4・5 レンチ 第11次調査 5 レンチ	
創建 2 期 8世紀中葉(第2・3四半期)	塔	—	基準標高24.35～24.55 西辺整地面23.9～24.0 西辺底面23.9～24.1、東側整地面24.4 東側付近の地山面24.25、東側付近の地山面23.75、南西隅部付近の地山面23.5 SD100401底面の地山面23.1	—	第11次調査 1 レンチ	
再建 1 期 8世紀中葉(第2・3四半期)～ 8世紀後半(第3・4四半期)	中 門	不明	基準標高24.3、付近の地山面24.0 南面標高出面23.6	—	第8次調査 3 レンチ 第9次調査 2 レンチ 第11次調査 11 レンチ	
再建 2 期 9世紀後半～ 10世紀前半 (第3四半期)	寺 築物剥離構 講 堂	規格 東西約18.0m、南北約12.0m 外装 木材(木筋みるき) 方位 N-10° - W	基準標高24.35～24.8 東側整地面24.1、北辺整地面23.8 南西隅部付近の地山面24.1、北辺整地面23.85、北辺整地面23.85 東側付近の地山面24.1、北辺付近の地山面23.8～23.85	基準標高24.3、付近の地山面24.0 南面標高出面23.6	第11次調査 5・13 レンチ 第12次調査 7・8 レンチ 第13次調査 2 レンチ 第13次調査 3 レンチ	
再建 3 期 9世紀後半(第3四半期)～ 10世紀前半(第3四半期)	金 堂北頭構	—	基準標高24.3、付近の地山面24.6 地山面24.4～24.6 東側整地面24.4～24.6 南西隅部付近の整地面24.45 東側付近の地山面24.45～5、西辺付近の地山面23.95 南西隅部付近の地山面24.45	基準標高24.3、付近の地山面24.5 地山面24.4～24.5、東側整地面24.55、西辺整地面24.45 東側付近の地山面24.5、西辺付近の地山面23.95	第11次調査 4・4 レンチ 心礎块は施設の施設所、現天柱の礎石層 え付け施設三基、側柱の礎石層 え付け施設四基被出	
再建 4 期 10世紀後半(第4四半期)～ 11世紀前半(第4四半期)	南 門	規格 東西約7.2m、南北約9.5m 外装 方位 N-4° - E	基準標高24.3、付近の地山面24.0～24.4 地山面23.9～24.0、西側整地面23.75～23.9、南側整地面24.0～24.1 西側付近の地山面23.85～24.0 南方付近の地山面23.6～23.8、南西隅部整地面24.1～24.3	基準標高24.3、付近の地山面24.4～24.4 地山面23.85～24.0、西側整地面23.75～23.9、南側整地面24.0～24.1 西側付近の地山面23.6～23.8、東側付近の地山面24.6～24.7	第11次調査 1・11・12 レンチ 第12次調査 1～5 レンチ 第13次調査 1 レンチ	
再建 5 期 11世紀後半(第5四半期)～ 12世紀前半(第5四半期)	金 堂	規格 東西約16.8m、南北約14.1m 外装 方位 N-2° - E	基準標高24.0、24.2～35、24.45～34.5 北辺整地面4.1～24.2、北側整地面23.95～24.5 東側整地面4.1～24.2、北側整地面23.95～24.5 東側整地面4.0～24.1、西側整地面23.75～23.9 東側整地面4.0～24.1、南西隅部整地面23.6～23.65 東側付近の地山面23.65～23.75	基準標高24.0、24.2～35、24.45～34.5 北辺整地面4.1～24.2、北側整地面23.95～24.5 東側整地面4.1～24.2、北側整地面23.95～24.5 東側整地面4.0～24.1、西側整地面23.75～23.9 東側整地面4.0～24.1、南西隅部整地面23.6～23.65 東側付近の地山面23.65～23.75	第10次調査 4～6 レンチ 第11次調査 5・6 レンチ 第12次調査 1 レンチ	
再建 6 期 12世紀後半(第6四半期)～ 13世紀前半(第6四半期)	中 門	規格 東西約7.4m、南北約6.1m 外装 方位 N-2° - E	基準標高24.3、付近の地山面23.9～24.0 西側整地面23.5～23.65 西側付近の地山面23.6～23.8、北西隅部付近の地山面23.4～23.5 西側付近の地山面23.6～23.8、北西隅部付近の地山面23.9～24.0 北側付近の地山面24.0～24.35	基準標高24.3、付近の地山面23.9～24.0 西側整地面23.5～23.65 西側付近の地山面23.6～23.8、北西隅部付近の地山面23.4～23.5 西側付近の地山面23.6～23.8、北西隅部付近の地山面23.9～24.0 北側付近の地山面24.0～24.35	第9次調査 1・2 レンチ 第10次調査 1・2 レンチ 第11次調査 1 レンチ	
再建 7 期 13世紀後半(第7四半期)～ 14世紀前半(第7四半期)	寺 築物剥離構	—	基準標高24.3、付近の地山面23.9～24.4 南面標高23.65～23.85 南面標高23.8～23.5	基準標高24.3、付近の地山面23.9～24.4 南面標高23.65～23.85 南面標高23.8～23.5	第11次調査 4～6 レンチ 第12次調査 1 レンチ	
再建 8 期 14世紀後半(第8四半期)～ 15世紀前半(第8四半期)	講 堂	不明(創建期基礎の当時の改修か) 南西隅部整地面23.95～24.05	基準標高24.4、4 南西隅部整地面23.95～24.05	基準標高24.4、4 南西隅部整地面23.95～24.05	第11次調査 5 レンチ 第12次調査 1 レンチ 第13次調査 2 レンチ	

第19表 興福寺南宇基質建物一覧

第3項 寺院再建期の伽藍域、寺域

伽藍域に関しては、金堂、塔、中門、講堂の各基壇、寺域南限に伴う南門基壇、寺域北限に伴う東西溝と寺域西限に伴う南北溝を検出した。

金堂基壇は創建期の基壇をそのまま利用しながら北側と東側を若干拡張し、南側と西側を削平して造る。塔基壇は創建期の基壇の下部を埋め殺し、全体的に拡張して造る。講堂基壇は金堂基壇北辺階段に近接する部分の南辺の西側に造り直しの痕跡が見られる以外は創建期の基壇をそのまま基壇としている。中門基壇は創建期の推定基壇に伴うと考えられる掘込地業面の上に造る。南門基壇は創建期の2条の東西溝を埋めて造成しその上に造る。塔基壇の南北軸の方位は座標北から10度西偏し、南門基壇の南北軸の方位は4度西偏し、金堂・中門基壇の南北軸の方位は座標北から2度東偏するなど、複数の基壇造営時期があったことがうかがえる。前者を再建期1期、中者を再建2期、後者を再建3期と呼称する。再建2期段階の伽藍域は中門基壇と講堂基壇との中心間の距離で約51mと、創建期の南北規模と大差はない。東西の距離は約60mに復元できる。

再建期の建物基壇は金堂・塔・講堂付近は標高24.1~24.2m前後の高さに、中門・南門付近では標高24.0m付近に整地面が分布し、この上に基壇を盛土で構築する。創建期の基壇と重複する部分にはあまり改変を加えず、そのまま埋め殺して一部を追加し、一部を削平して造る傾向がある。金堂・中門・南門では外装に石積みを伴い、再建2期には確実に石積みを施している。

金堂基壇の規模は東西約18.0m、南北約14.1m、東西60尺、南北47尺、外装に石積みを伴う。南北中央に柱間一つ分の幅の階段が付設されていたものと考えられ、北面階段の幅2.4m、8尺、階段の出1.6m前後、5尺ほどに復元されることから、基壇の高さは1m弱（現存高は約0.2~0.3m）、金堂の建物の柱間は2.4m、8尺として、東西5間、南北4間、つまり東西12.0m、南北9.6m、東西40尺、南北32尺の平面規模が復元できる。

塔基壇の規模は一辺約15.3m、一辺51尺の規模に復元されるが、この範囲が基壇の縁辺となるものか、実際の基壇縁辺は中寄りに位置し、基壇を載せるための整地面の範囲を示すものかははつきりしない。創建期の地山層の削り出しによって造られた塔基壇の下部をそのまま残して、上にかさ上げするように基壇を造ったと考えられるが、基壇の検出面で礎石据え付け掘り方の底部を辛うじて検出した状況を考えれば、基壇自身は相応の削平を受けている。基壇検出面から心礎抜き取り坑、四天柱の礎石据え付け掘り方3基、側柱の礎石据え付け掘り方4基を検出し、その位置関係から柱間の長さは中央間3.3m、11尺、脇間3.0m、10尺に復元される。

講堂基壇は創建期基壇と同等規模と考えられる。創建期基壇の西辺を覆うように再建期基壇の西辺を造っており、再建期金堂基壇階段付近においては改変を受けて補修的な造営が行われ、創建期基壇の南西隅部付近には再建期基壇および整地面を覆う再建期整地層が分布しているものと考えられる。

中門基壇の規模は東西約7.4m、南北約6.2m、東西24~25尺、20~21尺、外装に石積みを伴い、基壇の南北軸の方位は金堂と同じくする。整地面の上に盛土を施し、基壇を構築する。基壇西辺と北辺で改変が見られるが、基壇の南辺では3段の石積みを残す。柱間は不明であるが、金堂に準じて2.4mとしても東西3間、南北2間の建物が収まるほどの基壇規模である。

中門と塔・金堂との位置関係を論じた菱田哲郎氏の研究によれば、寺院の中軸に中門を置くタイプが7世紀後半から8世紀に至るまで存在することが明らかにされており〔菱田2015〕、8世紀以後に見られるようになったというB型（中門から金堂を正面にして礼拝するタイプ）の位置関係を採用して中門を造り替えることをせず、8世紀後半以後の伽藍整備にあたっては初期伽藍の堂塔の場所を踏襲した状況がうかがえる。

また、再建3期によく金堂・中門の基壇が正方位を意識した方位を取るようになるが、国府、郡衙などの地方官衙では7世紀末から8世紀前葉にかけて正方位を採用することが指摘されており〔大橋2013〕、興道寺廃寺ではその意識がかなり遅れていることが特徴である。

伽藍域の四至については、中門基壇南西側で西に向かって延びる東西溝を1条検出しており、これが南面回廊の外側の雨落ち溝である可能性が考えられるが、塔基壇東側や講堂基壇東側、あるいは段丘崖付近での調査で回廊状の施設が未検出である以上、回廊が存在したとしても再建3期以後、寺院正面にあたる南面に限られる可能性が高い。

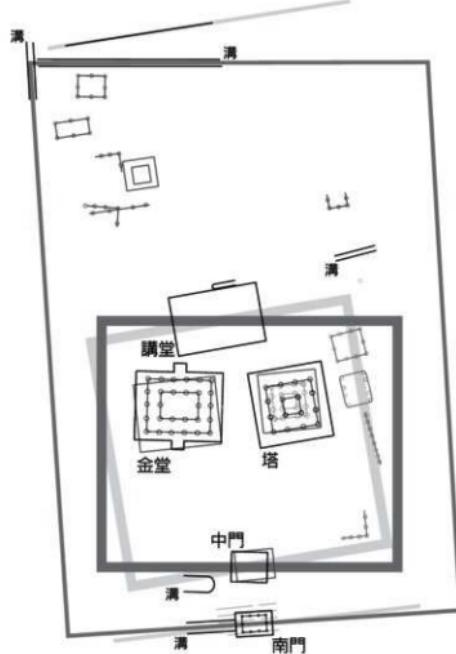
寺院地にあつたと想定される施設については、現時点では未確認である。食堂は7世紀後半の官大寺には存在が確認され、以後、ある程度の規模をもつ古代寺院には一般的に設置されたとされる〔吉川2010〕。興道寺廃寺においても、存在した可能性は低くないと考える。

寺域南限に関しては、南門基壇を検出したことでその位置が明らかとなつた。南門基壇の規模は東西約7.2m、南北約4.5m、東西24尺、南北15尺、金堂・中門基壇と同様に外装に石積みを伴うが、基壇の南北軸の方位は若干異なる。整地面の上に直接盛土によって石積みを伴う基壇を構築する。基壇の改変は著しく、基壇北東隅部に3段の石積みを残す程度で、元位置から離れた礎石状の平石が表土下で検出されている。柱間は不明であるが、金堂に準じて2.4mとしても東西2間、南北1間の建物が収まるほどの基壇規模である。

寺域北限については地山面を掘り込む東西溝付近に位置する。溝から北側の地山面に拳大ほどの自然縁が露頭する一方で、南側では粘土質の地山面となるように地山面に対して一定の改変が考えられることから、この部分に築地などの施設の所在を想定すれば、溝自体はその北側の雨落ち溝であったものと考えられる。溝の方位は金堂・中門基壇の南北軸と直交することから再建3期に伴うものと考えられ、再建3期の段階の寺域として西端付近で南北118mほど、東端付近で南北112m以前後の範囲と考えられる。

寺域西限については、ほとんどが道路上に位置する地山面を掘り込む南北溝付近に位置するものと考えられる。

この溝が所在するあたりから西に向かって地山面の標高が1.0m弱ほど低くなる様相が確認され、この南北溝の西側には西限を画する施設が所在し、さらに西側では地山面の標高が大きく低下し、寺域外となる可能性が高い。溝の方位は南門基壇の南北軸と並行する



第141図 興道寺廃寺伽藍模式図（縮尺1/1,000）

ことから再建2期に伴うものと考えられ、寺域北限に伴う東西溝に先行して造られた寺域内の排水を兼ねた基幹水路であったものと考えられる。寺域東西の範囲は、西限をこの溝の南北ラインのあたりとし、東限は地山面の微地形が変化するラインを想定して東西80mほどの寺域の範囲が復元できる。

創建期の掘立柱建物跡などを検出した講堂基壇から寺域北限までの範囲においては、金堂・中門基壇の南北軸の方位を志向した掘立柱建物跡1棟などを検出しており、寺院北方施設の整備がさらに進んだものと考えられる。

第4項 他の古代寺院遺跡との比較

興道寺廃寺の伽藍の特徴や規模を考える上で、興道寺廃寺と同じく日本海沿岸地域に所在し、伽藍の様相が明らかにされている古代寺院を概観し、若干の比較検討を行う。なお、取り上げる対象は北陸地方から山陰地方にかけてのいわゆる白鳳寺院、あるいは8世紀代に建立された寺院で、ある程度の伽藍配置が判明しているものとし、国分寺や山林寺院は含めない。また、掘立柱建物群で伽藍を構成するような寺院も対象としない^{註1}。

北陸地方の寺院で、伽藍の様相が判明しているものは少ない。

加賀の末松廃寺は7世紀第3四半期建立の寺院で、末松廃寺は塔と金堂が東西に並ぶ法起寺式伽藍配置である。伽藍の東限は掘立柱塀とされ、近年、区画溝が検出されている〔石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター2016〕。また、西と南は築地と考えられる土塁の痕跡が確認されており、寺域として東西78.4mの規模が復元されている〔文化庁2009〕。広坂廃寺は7世紀代までさかのぼる瓦も見られるが、奈良・平安期に伴う寺院で平城宮系の軒瓦が出土している。伽藍の様相は不明であるが、寺院中心施設の周囲を区画する遺構として溝と、平行する三列の柱穴列、柵が報告されている。伽藍域として一辺100mほど、寺域として東西150mほどの範囲が推定されている〔金沢市教育委員会2005〕。これ以外に、加賀・弓波廃寺で法起寺式伽藍配置が復元されているが、寺院の規模に関しては不明な点が多い〔小森1987〕。

能登の柳田シャコデ廃寺は出土瓦から白鳳期の創建が考えられており、8世紀後半以後、氣多神宮寺として転用された可能性も指摘される寺院である〔羽咋市教育委員会2010・中野2016〕。塔基壇の東西で柵列状の遺構が南北に延びており、さらに東側では古代に伴う掘立柱建物群が展開することから伽藍を区画する施設の一部である可能性も考えられている。伽藍域、寺域の規模は不明。

北陸地域では寺院全体の様相が分かる寺院が少ない中で、伽藍域、寺域を溝、柵列、築地などで区画したあり方がうかがえる。これらの中には掘立柱による回廊状施設が存在した可能性も考えられるが、明確に礎石を用いた回廊、あるいは雨落ち溝を伴う築地の検出例は見受けられない。興道寺廃寺の伽藍域、寺域を画する施設が現在のところ、溝しか確認されていない状況はこれらの古代寺院と様相を同じくしている。隣国の近江において、寺域を溝で画すると考えられる寺院の例として輕野塔ノ塚廃寺があり、塔跡と南に位置する南西門・中央門が検出されているが、幅2m弱の大溝が南西門の西側に取りつき、寺域の南西隅部を造り出している〔滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1979〕。また、宮井廃寺でも金堂、塔の南方で東西溝が検出されている〔小笠原2000〕。ただし、能登国分寺では明確な回廊、築地が検出されており、北陸の古代寺院の全てがそのような区画施設で構成されているわけではないことに注意する必要がある。

北近畿の丹後、但馬での古代寺院の様相は明らかではない一方で、山陰地方は古代寺院も多く、特に伯耆では多くの古代寺院の発掘調査が行われており、さまざまな伽藍の様相が確認されている。

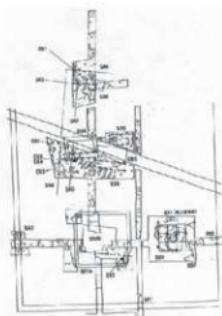
山陰で特異な伽藍配置をとる寺院に伯耆の柄本廃寺、上淀廃寺、出雲の来見廃寺などがあり、い

すれも2つの塔が造営されている。柄本廃寺は8世紀前半には建立された寺院で、金堂の南側と東側に2つの塔を配し、金堂の北西に近接して講堂を設けている。伽藍の西側、東側を画する施設として溝が検出され、東西約90mの伽藍域が想定されている。また、伽藍の西側で寺域を画するとする落段状の遺構が検出されている〔国府町教育委員会2003〕。上淀廃寺は7世紀後半の建立で、金堂の東側に2つの塔、西側に講堂を配する伽藍配置で、東西約160m、南北100m以上におよぶ広い寺域が明らかにされている〔淀江町教育委員会1995〕。来美廃寺は『出雲国風土記』記載の山代郷北新造院で、7世紀末の創建である。金堂の東西に塔を置き、金堂の南西側に講堂を配し、伽藍域や寺域を画する施設の様相は不明である〔島根県教育庁文化財課2007〕。

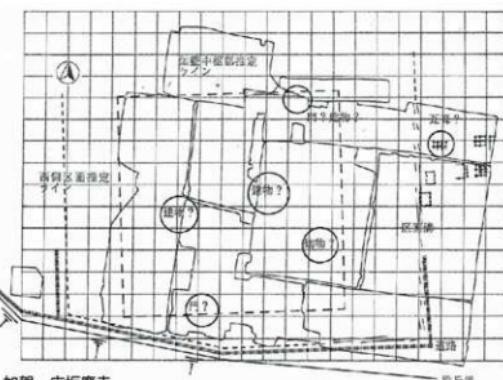
法起寺式伽藍配置をとる寺院として、伯耆の土師百井廃寺、大寺廃寺、岡益廃寺、大原廃寺、石見の下府廃寺があり、いずれも7世紀後半から末頃にかけて建立されている。土師百井廃寺は金堂、塔を囲み、中門と講堂とをつなぐ回廊をもち、伽藍域は東西60mほどの規模である。寺域として1町、108m四方の範囲が想定されている〔郡家町教育委員会1980〕。大寺廃寺は東面する伽藍をもち、金堂、塔、講堂、講堂に取りつく回廊をもつ。南北54mほどの伽藍規模である〔鳥取県教育委員会1967〕。岡益廃寺は金堂の北に講堂が位置し、回廊が講堂に取りつく。講堂が西に寄った法起寺式伽藍配置が復元されている〔鳥取県埋蔵文化財センター2000〕。大原廃寺は金堂の北に講堂を置き、東側に塔を配する。寺域として復元される規模は概ね80mほどの規模であるが、南北と西辺で方位の傾きが見られる〔倉吉市教育委員会1998〕。下府廃寺では塔と金堂が東西に並ぶが、講堂、回廊が存在しなかつた可能性が指摘されている〔浜田市教育委員会1993〕。

法起寺式以外の伽藍をもつものとして、伯耆の斎尾廃寺、大御堂廃寺などがある。斎尾廃寺は7世紀後半の建立と考えられ、金堂と塔が東西に並列する法隆寺式伽藍配置である。寺域を画する施設として、並行する2条の溝が北東隅部を造り出し、さらに外側には四辺を巡る一条の溝が検出され、東西160m、南北200m以上の寺域の範囲が想定されている〔東伯町教育委員会1990〕。大御堂廃寺は7世紀後半に建立され、塔と金堂が東西に並列し、金堂が東面する觀世音寺式伽藍配置で、北側では回廊が取りつく講堂や、僧房が確認されている。寺域を画する施設は築地で、東西135m、南北200～220mの寺域規模が復元されている〔倉吉市教育委員会2000〕。長門の長門深川廃寺は7世紀後半の建立で、南北に塔と金堂が並列する。伽藍を画する施設として一条の柵列が確認され、50m四方程度の伽藍域が想定されている。伽藍北方に展開する掘立柱建物群は寺院廃絶後の鎌倉期以後のものである〔長門市教育委員会1985〕。

山陰地方の古代寺院の様相を概観すると、複数塔を配する伽藍をもつ寺院もみられるが、法起寺式、法隆寺式といった地方寺院に一般的な伽藍をもつ寺院も一定数見られ、伽藍に回廊を備え、外郭施設として築地をもつような寺院はほとんど見受けられない。その中で、大御堂廃寺では同一の南北方位に伽藍建物、回廊、北側の礎石建物群が規格的に建ち並び、大寺廃寺、土師百井廃寺のように回廊まで整えた精緻な伽藍配置をもつあり方は際立っており、逆に伽藍建物とは異なる方位をもつ外郭施設をもつ斎尾廃寺、大原廃寺の例、あるいは伽藍建物自体に複数の方位をもつ柄本廃寺の例は、寺院造営にいくつかの時期があったことをうかがわせており、寺院造営、あるいは伽藍整備が長期に及ぶ場合、規格的な伽藍域、寺域の設定、精緻な伽藍配置を一貫して整えることは困難であった可能性が想定される。その結果が、伽藍を画する施設として柵列や地形の段落ちを設ける、あるいは寺域を画する施設として溝を巡らせていくものと考えられる。ただし、溝に関しては築地が後世に削りとられ、溝のみが現存している可能性もあり、溝のみで寺域を区画したとは言い切れない部分はある。

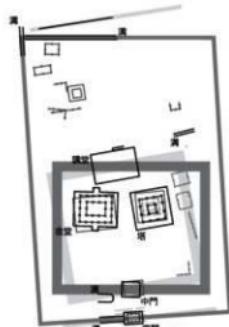


加賀・末松寺

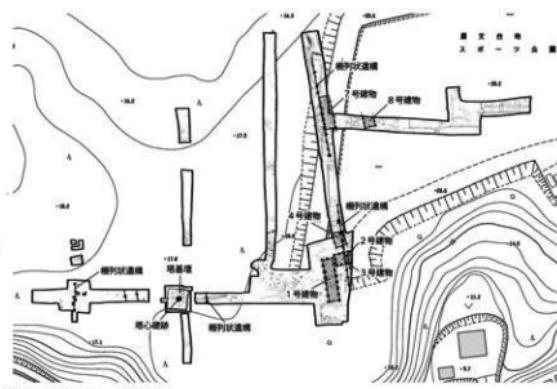


加賀・廣坂寺

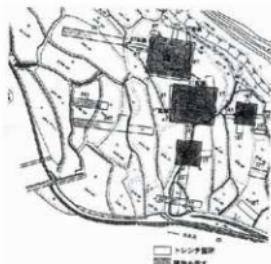
長丘里



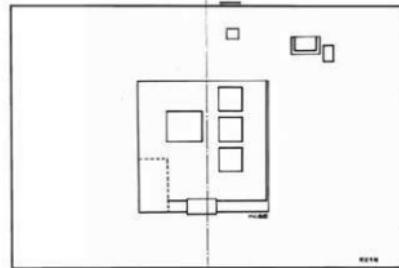
若狭・興道寺



能登・柳田シャコデ寺



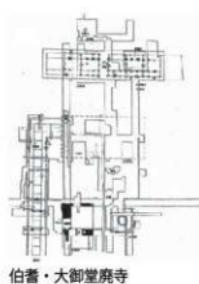
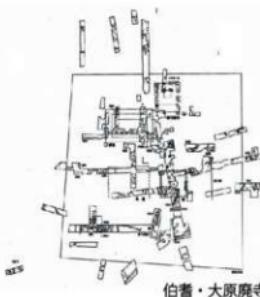
伯耆・朽木寺



伯耆・上淀寺

0 (1:2000) 100m

第142図 北陸地方・山陰地方の古代寺院伽藍配置図(1)
文化庁2009、金沢市教育委員会2005、羽咋市教育委員会提供、国府町教育委員会2003、淀江町教育委員会1995



伯耆・斎尾廃寺

0

(1:2000)

100m

第143図 北陸地方・山陰地方の古代寺院伽藍配置図(2)

倉吉市教育委員会 1999・2001、郡家町教育委員会 1980、島根県教育委員会 2002、東伯町教育委員会 1990、鳥取県教育委員会 1967、鳥取県埋蔵文化財センター 2000、長門市教育委員会 1985、浜田市教育委員会 1993

興道寺廃寺の伽藍で特徴的なことの一つに、金堂、塔、講堂が近接する一方で、中門が南にやや離れる点にある。日本海側の古代寺院と比較すると、中心建物が近接するものとして土師百井廃寺、斎尾廃寺で金堂、塔が、柄本廃寺では金堂と講堂が近接するなど、特異な例とはならない。伽藍規模としては、土師百井廃寺、長門深川廃寺と同等規模である。反面、中門基壇が南に離れる点については興道寺廃寺のみに見られる様相である。

第2節 興道寺廃寺の出土遺物

第1項 軒瓦の系譜と帰属年代

興道寺廃寺の軒瓦は、軒瓦Ⅰ型式：单弁八葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦、軒瓦Ⅱ型式：素弁十葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦、軒瓦Ⅲ型式：素弁九葉蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦の3型式からなる。

『2012年報告』までに、Ⅰ型式からⅢ型式へと変遷し、Ⅰ型式が7世紀後葉、Ⅱ型式が8世紀前葉、Ⅲ型式が8世紀中葉という年代が与えられた。第9調査以後、第16次調査までの出土資料を追加しても、軒瓦Ⅲ型式の年代観に関する限り以外、その内容に大きな変更はないことから、軒瓦Ⅰ～Ⅲ型式を軸に興道寺廃寺出土瓦の系譜と年代観を改めて提示する。

軒瓦Ⅰ型式は從前から指摘があるように山田寺式の範疇にある瓦である〔水野1987、中原2005、美浜町教育委員会2006〕。興道寺廃寺出土の山田寺式軒瓦の特徴は、軒丸瓦の瓦当径・中房径が小さく、重圓文縁の内側に段をもつこと、軒平瓦が曲線頭で、広端凸面に花弁型押し文をもつことである。瓦当文様の退化傾向、製作技法の差異から畿内中枢部に直接的な系譜は求められず、『2007年報告』で触れたように越前・深草廃寺の補修瓦である軒丸瓦IV型式や近江・大東遺跡出土のINa類軒丸瓦などと類似するなど、越前地方、近江地方に分布する山田寺式軒瓦との関係性が認められる。近江・三大寺廃寺出土の軒丸瓦A類が深草廃寺軒丸瓦のIV型式の改版であるという指摘を考慮して〔久保1993〕、興道寺廃寺軒瓦Ⅰ型式の導入にあたっては、越前、近江湖東・湖北の両地域からの影響を想定した〔美浜町教育委員会2006〕。

その後、湖東・湖北地域における山田寺式軒瓦の導入と展開が明らかにした北村圭弘氏は、湖東地域の山田寺式軒丸瓦は百濟大寺を祖型とし、7世紀第3四半期に曲線頭の重弧文軒平瓦を伴って楕津・四天王寺から近江・竹ヶ鼻廃寺に創建瓦としてもたらされ、7世紀後半に竹ヶ鼻廃寺から三大寺廃寺などに、さらに7世紀末葉には大東遺跡や新庄馬場遺跡、8世紀初頭には八島廃寺などへと、湖東周辺の古代寺院・瓦窯に拡散したことを見出した。三大寺廃寺の創建瓦をモデルとして7世紀末頃、8世紀前後に湖東地域に拡散した軒丸瓦と、興道寺廃寺出土の山田寺式軒丸瓦とが酷似することは、竹ヶ鼻廃寺を起点に拡散した湖東地域の山田寺式軒丸瓦がさらに北上し、一方では興道寺廃寺の創建瓦として、一方で深草廃寺の補修用瓦としてほぼ同時期に導入されたことを示している〔北村2007〕。『2007年報告』、『2012年報告』で示したように、興道寺廃寺出土の軒平瓦Ⅰ型式に関しても湖東地域に拡散した曲線頭の軒平瓦からの系譜が迫り、7世紀後葉～末葉に三大寺廃寺周辺からもたらされた可能性が高い。

この背景として、6世紀前半の雜体大王擁立に関わった越前、近江、尾張、美濃、そして若狭それぞれの地域における個別的、伝統的な地域間交流が寺院建立期の7世紀後半まで残存していた実態が考えられる。竹ヶ鼻廃寺系列の山田寺式軒丸瓦が湖東から尾張、越前、そして若狭へともたらされた

ことと重複する現象である。なお、軒平瓦Ⅰ型式の凸面に見られる花弁型押し文は湖東地域には見られない技法で、興道寺廃寺において創出されたものか、まったく異なる他地域から工人が招来しているものか、その系譜は不明である。美濃の厚見寺跡、各務廃寺、柄山窯跡、天狗谷窯跡で同様に花弁型押し瓦が出土しているが、その文様構成とは大きく隔たっており、興道寺廃寺との直接的な関係は不明である。

軒瓦Ⅱ型式に関して、『2007年報告』では軒瓦Ⅰ型式からの技術的な連続性ではなく、異なる工人集団によって導入されたものとして報告した。ただし、丸瓦Ⅰ型式とⅡ型式の凸面の平行叩き調整と共に叩き具の使用が見られ、ある一時期に同一の窯場で生産された可能性も考えられることを『2012年報告』で追記した。また、平瓦に関しても正格子叩き、斜格子叩き調整がⅠ型式、Ⅱ型式の間で共有している状況が認められるので、その蓋然性は高いものと考えられる。

丸瓦、平瓦を見る限り、Ⅱ型式の瓦は大量生産されたものと考えられ、実際に軒瓦の出土比ではⅡ型式が多く、軒丸瓦の瓦当の範傷の状況から見ても、ある程度長期的な生産が行われたものと考えられることから、創建期の寺院の主要建物に葺かれた瓦と考えられる。その場合、Ⅰ型式の瓦とⅡ型式の瓦、それぞれを生産した瓦工との間にどのような関係性があったのかはつきりしないが、叩き具を共有していること、凹面・凸面の調整に差異が存在しながらも基本的な成形は共通性が高いことを考えると、Ⅰ型式の瓦を作る瓦工がやや先行して存在し、ある時期に同じ窯場を共有しながら系譜の違うⅡ型式の瓦を造る瓦工にスライドしていった状況が考えられる。

軒丸瓦のⅡ型式は、丸瓦部の広端凹面に瓦当を直接はめ込んで、丸瓦の広端面をそのまま瓦当上半の外縁とした瓦当側面接合技法で作られていることが特徴である。『2007年報告』の中で周辺の湖西地域、近江・大宝寺跡出土の軒丸瓦Ⅳ類型式と類似し、また大宝寺跡の直線彎軒平瓦Ⅰ型式A種が興道寺廃寺軒平瓦Ⅱ型式とやはり類似するなど同じ影響下での導入の可能性を指摘した〔美浜町教育委員会 2006〕。軒丸瓦に関しては、瓦当側面接合技法を提倡される大脇潔氏に出土瓦を実見いただいたことがある^{註2}、興道寺廃寺のこの種の瓦には技法のフレが存在するものもあり、必ずしも全てのⅡ型式の軒丸瓦が瓦当側面接合技法によるものではないという指摘を受けている。

軒瓦Ⅲ型式は、『2007年報告』において宮都系の文様であるものの畿内中枢部との直接的な関係を見いだせないものとして報告した。以後、石田由紀子氏に軒瓦Ⅲ型式を実見していただいた際、倫前寺、本薬師寺出土瓦に系譜が求められる可能性を示唆され、軒平瓦に関しては平城宮式664IAb型式との共通性を指摘されている^{註3}。

なお、遠敷郡の中核的な寺院となる太興寺廃寺、あるいは神願寺(若狭神宮寺跡)では平城宮式6225型式の軒丸瓦が出土しており、中央政府との直接的な関係が想定され、三方郡と遠敷郡の実態を反映していることを菱田哲郎氏が論じた〔美浜町教育委員会 2006〕。太興寺廃寺に関しては、平城宮式の軒瓦が出土することなどから、氏寺として創建された寺院が8世紀中葉以後に若狭国分寺として転用されたという水野和雄氏らの見解が重視されているが、地域の中枢的な古代寺院には国分寺・国分尼寺に先行して補修用瓦として平城宮式軒瓦がもたらされている例が各地で認められるこを梶原義実氏が指摘している〔梶原 2001・2006・2010・2016〕。

興道寺廃寺Ⅲ型式の軒瓦の出土量は一定量を占めており、創建2期の講堂建立前後の時期から再建1期の塔の再建に伴う時期に屋根瓦として使用されたものと想定される。

第2項 丸瓦・平瓦

『2007年報告』において、無段式丸瓦と平瓦にはそれぞれ3型式があり、その製作技法や年代、出土量は軒瓦Ⅰ～Ⅲ型式と対応することを報告した。『2012年報告』において有段式丸瓦を追加する形で報告を行った。本報告では、若狭国内の古代寺院出土丸瓦、平瓦の様相を概観し、簡単に興道寺廃寺出土の丸瓦・平瓦の位置づけを行う。

若狭において、ある程度まとまった古代瓦が出土しているのは、遠敷郡の太興寺廃寺、下夕中廃寺、若狭神宮寺関連遺跡、そして興道寺廃寺である。

太興寺廃寺では紀寺式の雷文を配する複弁七葉蓮華文軒丸瓦と平城宮系の複弁の軒丸瓦があり、前者が7世紀後半、後者は8世紀中葉に位置づけられる。丸瓦、平瓦ともに基本的には2種あり、軒瓦と対応する。丸瓦は無段式のものが古く、平城宮系の軒瓦に伴うものは有段式。平瓦も桶巻作りのものと一枚作りのものとで新旧が分かれ、若狭における一枚作り成形の初現が太興寺廃寺となる。

下夕中廃寺の丸瓦は無段式と有段式と2種があるが、平瓦は桶巻作りで側縁の凸面側を面取り状に大きくケズリ取る、若狭では他に例を見ない特徴的な平瓦の1種がある。時期的には7世紀後葉から8世紀前葉に伴うものと考えられる。

若狭神宮寺関連遺跡（神願寺、若狭神宮寺跡）出土瓦として、平城宮式6225型式の複弁八葉蓮華文軒丸瓦がある。丸瓦部との接合式である可能性が高く、6225型式の中でも古相の瓦である。丸瓦、平瓦ともに2種あり、古手のものは複弁八葉蓮華文軒丸瓦と対応し、平瓦は一枚作り成形で、太興寺廃寺出土の新相の平瓦との関係性がうかがえる。若狭神宮寺関連遺跡出土の新相の平瓦は8世紀後半以後の国府関連遺跡と考えられる西縄手下遺跡出土の瓦と同一のものである。

若狭では8世紀中葉の段階に平城宮系軒瓦の移入を契機として瓦生産が集約的になったものと考えられ、特に遠敷郡においては太興寺廃寺と若狭神宮寺関連遺跡、あるいは若狭神宮寺関連遺跡と西縄手下遺跡といったように、それぞれで共通的な瓦がもたらされており、この現象が顕著である。平瓦に関しては、この段階で一枚作り成形が導入されている。一方で、それ以前の7世紀後葉から8世紀前葉においては、遺跡間での瓦の相関性は認められず、軒瓦を含めて寺院それぞれで多様な瓦を導入しており、それぞれにおいて個別の瓦工が関与している可能性が高い〔松葉2015〕。

興道寺廃寺出土瓦はいずれも8世紀前葉の時期に収まる可能性が高く、少なくとも一枚作り成形の平瓦が見られないことから考えても、遠敷郡に見られる8世紀中葉の瓦生産の画期までは瓦生産を終えている可能性は高い。遠敷郡出土の8世紀前葉までの瓦と比較しても叩き調整、側面調整等に共通的な要素は認められず、興道寺廃寺内で完結した複数段階の瓦生産が見られるなど、若狭における白鳳期から奈良時代前半までの瓦生産の様相を端的に表している。

第3項 土器

寺院前身集落に伴うと考えられる古墳時代後期の須恵器、土師器、製塙土器の出土が比較的多く、寺院存続段階の土器はあまり多くない。前者は寺院の整地層などに埋め殺されていることが多いので、必然的に出土量が増えることに対して、後者は遺構深度が浅いことに起因するものと考えられる。9世紀以後の土器には灯明用のものを一定程度含んでいる。

仏器模倣土器、墨書き土器、施釉陶器の出土はごく僅少であり、陶硯などの出土は見られない。

寺院建立以前、古墳時代後期に伴う須恵器、土師器、製塙土器が金堂基壇、中門基壇の周囲の整地層、堆積層などから比較的多く出土し、寺院が興道寺遺跡の範囲と重複していることからも古墳時代後期の集落が寺院建立に際して整理されたことを『2007年報告』で報告した。出土遺物が分布するこ

とから古墳時代後期集落が存在する可能性を指摘したものであったが、それ以後、第16次調査に至るまで伽藍城の内外で複数の竪穴建物跡、掘立柱建物跡を検出し、6世紀前半から7世紀前葉、TK10～TK209型式並行期に伴う須恵器、土師器、製塙土器の分布と重複する状況を確認した。特に出土量が多いのは再建期中門基壇西側の堆積層、あるいは再建期整地層に含まれるもので、TK10～TK209型式並行期の土器が一定量出土している。『2012年報告』で示したように円筒埴輪片の出土は集落構成集団と獅子塚古墳、興道寺古墳群被葬者層との直接的な関係を示唆するものと考えられる。

7世紀後葉から8世紀前半にかけての土器は、出土量は多くないが、須恵器杯類、土師器杯・皿・碗・甕類などがある。須恵器・土師器の食膳具、土師器煮炊具などであるが、その構成は十分ではなく、一括性に欠ける。寺域の北寄りから寺域北限付近にかけてのエリアから出土する傾向があり、特に寺域北限からさらに北方にかけてが顕著である。寺院建立や寺院経営に関わる雑舎施設に伴うものと考えられ、寺院の北方、北西方の竪穴建物群・掘立柱建物群からなる律令期集落においては、7世紀後葉から8世紀前半における須恵器食膳具、土師器食膳具・煮炊具を備えることから、寺院北方には広く潜在的な寺院関連施設が展開していたものと推察される。

8世紀後半から9世紀前半にかけての土器は、灯明に使用されたものを含み、須恵器杯・皿類と土師器碗・皿類の出土が若干ある程度である。9世紀後半から10世紀前半については、若干の須恵器、土師器が出土した程度で、寺院再建期の土器の出土は低調である。

なお、寺院の廃絶に伴う「耳」墨書の須恵器蓋は再建期塔基壇南西隅部の整地面の直上から出土したもので、正位の状態で出土した。寺院廃絶に關係する祭祀行為に伴う土器であることを評価し、寺院の廃絶年代は9世紀末葉から10世紀前葉にかけての時期と考えられる。

第4項 塑像

塑像は螺髪が11点出土した。螺髪は円錐形と砲弾形からなり、前者は再建期塔基壇の心礎抜き取り坑と考えられるSK110401埋土から法量が器高2.0cm、底面径1.8cmのもの1点が出土し、後者は再建期金堂基壇北側の堆積層（表土を含む）を中心に、器高最大4.7cm、底面径2.1～2.7cmのものが10点出土した。

亀田修一氏により、SK110401埋土出土の円錐形の螺髪は8世紀前半のもので、丈六、もしくは半丈六の塑像に伴い、創建期の金堂基壇の本尊如来仏が再建期に塔本塑像として移された可能性があること、再建期金堂基壇北側堆積層出土の砲弾形の螺髪は8世紀後半以後のもので、丈六の塑像に伴い、再建期の金堂基壇の本尊如来仏に伴う螺髪であったものとして評価されている〔亀田2012、美浜町教育委員会2012〕。

砲弾形の螺髪の一部に被熱痕が残るものが認められるが、塑像そのものが被災したものかははつきりしない。塑像そのものの出土がないことや、土壁状の遺物の出土も低調で、基壇に火災の痕跡が見受けられないことから、金堂そのものが焼失した可能性は低いものと考えられる。

再建期金堂基壇の北側の瓦溜まりなどから土壁状の遺物が出土している。白土を被せる平滑な面をもつが、金堂内部の壁面を構成していたとしても壁面の存在は認められない。塑像の一部である可能性も残るが、どの部位に該当するものかはつきりしない。

第5項 金属製品・鍛冶関連遺物

再建期金堂基壇北側の堆積層から鉄釘12点が出土した。大型品が多いのが特徴であるが、興道寺廃寺北方の律令期集落において轆羽口、鉄滓などが出土しており、寺院に付随する工房施設で小鍛冶が

行われ、鉄製品を生産していたものと考えられる。

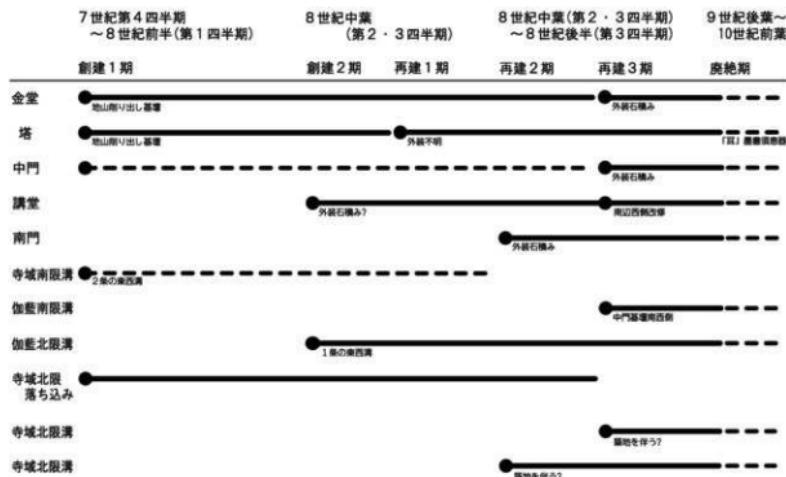
福井県内の7~12世紀に伴う集落、寺院、窯跡等の遺跡で建築具としての鉄釘の出土は限られており、若狭の神願寺、越前の向山大塩遺跡、野々宮廃寺、大谷寺遺跡、明寺山廃寺から8~11世紀の鉄釘が出土するに留まるなど、古代寺院もしくは寺院関連遺跡に集中する傾向がある。大谷寺遺跡、明寺山廃寺に加えて、三峯寺跡、浅見金道口遺跡では小鐵治関連遺物も出土しており、寺院に工房を備えた雑舎施設が存在したことがうかがえる〔松葉2011〕。

錢貨は再建期中門基壇の西側の整地層を中心に14点が出土した。奈良時代铸造の和同開珎、萬年通寶、神功開寶の3種である。榎村寛之氏は、文献史料に見られる西大寺西塔における萬年通寶、神功開寶の埋納事例や、賀茂神社鳥居における和同開珎、萬年通寶、神功開寶の3種の出土事例などから興道寺廃寺出土錢貨を中門における地鎮に伴うものと評価した〔榎村2007〕。中門基壇に伴うもの以外、これまでの調査で全く古代錢貨が出土していないことから、中門で見られた地鎮行為が興道寺廃寺で普遍的に行なわれたものとは考えにくく、中門再建に伴って限定的に行なわれたものと考えられる。

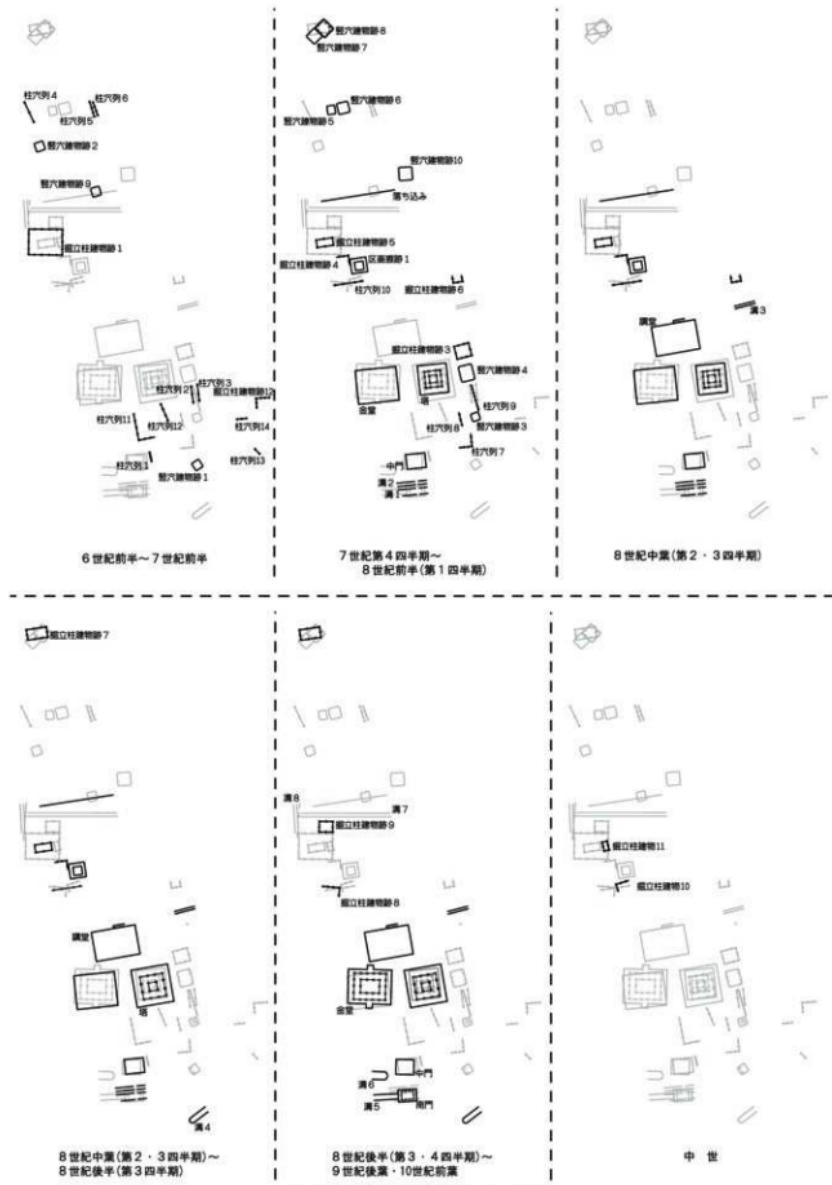
第3節 興道寺廃寺の変遷

第1項 寺院建立前夜の様相

『2007年報告』では、古墳時代後期の段階には段丘の東縁微高地に集落（興道寺遺跡）が、西縁微高地には群集墳（興道寺古墳群）が展開し、その後、集落が整理され、7世紀後葉に興道寺廃寺が建立されたという変遷を素描した。興道寺廃寺の一連の調査で、6世紀から7世紀前半にかけての掘立柱建物跡、竪穴建物跡、柱穴列などの遺構群を検出したことは、上記の古墳時代後期集落の様相の一端をうかがうことができ、副次的な成果となった。



第144図 興道寺廃寺遺構消長模式図



第145図 興道寺寺境遺構変遷模式図

前述のとおり、6世紀前半、TK10型式並行期の掘立柱建物跡1は大型の掘立柱建物跡であり、付近の集落などではほとんど例を見ない大きな柱穴（柱掘り方）をもつもので、時期的にも獅子塚古墳、興道寺古墳群、興道寺窯などと並行する時期であることから、耳川流域の在地首長層に伴う居館跡である可能性が一早く指摘された〔美浜町教育委員会 2011〕。

6世紀後半から7世紀前半、TK43～TK209型式併行期においては後の寺院伽藍域の南東側、寺域外北方のあたりで掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡3棟、柱穴列10基を検出した。上面に寺院遺構が分布するために未検出であるだけで、実際にはこの時期の遺構がさらに広がりをもつものと考えられるが、現段階では集落構成の全体像を把握するには至っていない。傾向としては、後の伽藍域の南側と寺域外北方に遺構が分布しており、竪穴建物跡が多く、柱穴列も少なからず見られることから、これらの柱穴のうち、ある程度は掘立柱建物跡を構成する可能性もある。ただし、柱穴列の中には『2012年報告』で掘立柱建物2と報告し、今回の報告にあたって柱穴列（柱穴列11）と評価を改めた区画施設を構成するものもあり、集落構成としては本格的な寺院前身集落であったと言える。

これらの集落遺構はTK209型式併行期までの時期であるため、検出遺構を見る限りでは寺院造営までに着手するまでの間、一定の空白期間があったように見受けられるが、第15次調査5トレンチ、SB150501で須恵器杯G蓋の破片が出土しているなど、寺院建立期までをつなぐ建物遺構が潜在的に存在している可能性も十分に考えられる。

第2項 寺院創建期の様相

『2007年報告』では出土軒瓦に基づき、軒瓦I型式が興道寺廃寺の創建期に直結する山田寺式の軒瓦であることから、天武・持統朝の仏教政策と連動して7世紀第4四半期の寺院造営に着手し、量的に多くなり伽藍全体の整備期に伴うと考えられる軒瓦II型式が軒瓦I型式より後出するものの、さほど大きな時期差は考えにくいことから、8世紀初頭に初期伽藍の完成をみたものと想定した。

現段階では一堂で寺院を構成するような施設が存在したものかについては不明であり、特に『2012年報告』で存在を示した掘立柱建物2がTK209型式併行期までの時期の掘立柱建物と考えられたことから、初期伽藍成立前に、そのような施設として機能した建物跡である可能性も想定されたが、以後の調査で柱穴列であることが判明したため、寺院建立前の集落の一部を捨宅寺院として使用したような施設があったとする根拠を失っている状況である。ただし、そうは言っても本格的な前身集落が存在したことは事実であり、一堂で寺院を構成したような段階があった可能性を全て失ったものではない。

造営の着手は軒瓦I型式の年代である7世紀第4四半期を想定し、金堂、塔、（中門）の完成からなる初期整備の時期を、創建1期の8世紀前葉と考える。

『2007年報告』では軒瓦III型式を実年代で770年、780年頃の年代となる金堂、中門の改修期に伴うものとして8世紀でも後寄りの時期のものとして捉えたが、『2012年報告』では8世紀中葉、創建2期に講堂の建立に伴って軒瓦III型式が導入されたものと想定した。現時点ではもう少しさかのばらせて考えることができる余地があり、8世紀第2四半期から8世紀中葉あたりの時期に軒瓦III型式を捉えておきたいが、8世紀中葉の段階には同方位を志向した初期伽藍が一通り整い、寺域北方にも掘立柱建物を設けていたものと考えられる。

第3項 寺院再建期の様相

再建期は3期からなり、再建1期はほぼ同場所で塔を造り替えるもので、講堂基壇の南北軸の方位

とほぼ合致し、講堂の建立から間もない時期、8世紀中葉の再建、再整備が考えられる。再建2期は創建期の寺域南限に相当する溝を埋め、その上に南門を建立する。この時期には寺域西限に伴う南北溝が設けられている。再建3期は正方位を意識して金堂、中門を造り替えるものである。南門基壇と金堂・中門基壇はいずれも基壇外装に石積みを伴い、中門から南門にかけての西側には同質の整地層が広がっているなど、再建2期と再建3期との間には大きな時期差は考えにくい。この時期には寺域北限に伴う東西溝が造られており、寺院の四至についても区画施設を設けることで確定した段階と考えられる。中門基壇西側の整地層に萬年通寶、神功開寶が含まれることを考慮すれば、8世紀後半の中でも8世紀第3～4四半期の再建時期が考えられる。

第4項 寺院廃絶期の様相

建物基壇の周辺から出土する9世紀後半から10世紀前半にかけての須恵器、土師器があり、9世紀末葉から10世紀前葉の所産と考えられる須恵器蓋は再建期塔基壇南西隅部の整地面の廃絶期の祭祀に伴って出土したものであることから、実質的な廃絶の時期を示しているものと考えられる。

『2007年報告』において、小林裕季氏が基壇周囲の堆積層出土土器の年代から9世紀後半以後の衰退、10世紀以後の廃絶を示唆したが、このことを裏付けることとなった。

第4節 興道寺廃寺の成立と存続の背景

第1項 耳川流域における古墳時代後期の様相

興道寺廃寺の建立は、6世紀以後の耳川下流域左岸における遺跡展開にその素地を見出せる。特に耳川左岸の河岸段丘では6世紀前半から7世紀前半にかけて集落形成と造墓活動が継続し、山麓では須恵器生産、海浜部では土器製塩が行われ、海上祭祀も見られるなど、この時期の在地首長層の活動が小平野内で完結して認められることが大きな特徴となっている。

6世紀前半の集落形成を見ると、興道寺遺跡における初期建物としてTK10型式併行期の掘立柱建物跡1棟が出現する。桁行4間以上、梁間4間の大規模建物であり、在地首長層の居館跡である可能性も指摘されている〔美浜町教育委員会2011〕。藤ノ木遺跡ではMT15型式併行期の堅穴建物跡1棟があり、近傍の獅子塚古墳とはほぼ同時期であることから、両者の関係性がうかがえる〔美浜町教育委員会2003〕。

この時期の生産活動としては、興道寺遺跡の南方の山麓で興道寺窯1基が6世紀前葉、MT15型式併行期に開窯し〔入江2009〕、生産された須恵器、埴輪は獅子塚古墳、興道寺古墳群に供給されている。また、海浜部の早瀬遺跡では6世紀前半に伴う土器製塩が行われている〔美浜町教育委員会2003〕。早瀬遺跡出土の製塩土器は、興道寺窯出土須恵器や、律令期に伴うものではあるが興道寺遺跡出土製塩土器と同様の胎土（鉱物）属性を示すなど、製塩土器が興道寺遺跡周辺から海浜部の早瀬遺跡に持ち込まれて組織的な土器製塩が行われた可能性が想定されている。

造墓活動は、獅子塚古墳が6世紀前葉、MT15型式併行期に築造され、また興道寺遺跡の西方、興道寺古墳群ではTK47～MT15型式併行期以後に古墳群の形成が始まる。これらの古墳は山麓などではなく、平野部の河岸段丘面に展開することが特徴で、興道寺遺跡や藤ノ木遺跡などの集落と近接して造られていている。獅子塚古墳は耳川流域で唯一の前方後円墳であり、流域における盟主墳と考えられる。獅子塚古墳の副葬遺物には興道寺窯産の須恵器が多くあり、特に興道寺窯で焼成された角杯形須恵器が複

数、石室内に収められている。また、須恵器の装飾付台付壺（子持壺）や鹿角装の鉄劍・刀子があり、若狭地方でもこの時期の在地首長墳からの出土に限られるような副葬遺物を備えているなど、被葬者層が在地首長層としての性格を帯び、地域開発に関与した人物であったことがうかがえる。

松原遺跡の下層から出土した土製模造品には、鏡、管玉、勾玉、船、劍、短甲などがあり、5世紀後半、TK23型式並行期の須恵器を模した土師器甕も出土している。時期的に考えれば、獅子塚古墳被葬者層の管掌下で軍事的行動を伴う海上祭祀が開始され、それぞれの土製模造品に複数型式が認められることから祭祀が継続したことが網谷克彦氏によって指摘されている〔網谷 2009〕。

6世紀後半から7世紀前半にかけては、興道寺遺跡でTK43～TK209型式並行期の堅穴建物跡、掘立柱建物跡、柱穴列の建物群などが複数展開する。方位からみて複数時期の建物などが存在したものと考えられ、継続的な集落形成が進んだものと考えられる。この段階は、興道寺古墳群でも造墓活動が継続しており、TK43～TK209型式並行期に伴う古墳が複数存在する。また、興道寺窯の灰原出土須恵器にはTK43型式併行期のものが含まれ、また閉窯期の床面直上の須恵器群はTK209型式併行期のもので占められるなど、興道寺遺跡での集落形成、興道寺古墳群での造墓活動、興道寺窯での窯業生産が終期まで連動して展開している。

7世紀前半、TK209～TK217型式併行期には松原遺跡で土器製塩が始まり、8世紀前半まで継続する。若狭西部の岡津遺跡や宮留遺跡などといったこの時期から操業を開始する本格的な土器製塩遺跡に共通する製塩炉、製塩土器が認められる。興道寺遺跡などでは7世紀中葉以後、寺院の北方に展開する7世紀後葉、8世紀初頭から始まる律令期集落までの間をつなぐ集落形成が低調であり、前述のとおり断片的に堅穴建物跡が検出されるに留まるが、松原遺跡での土器製塩の様相を見ると、同時期の集落が近傍に潜在する可能性は少なからずある。

以上のことより、古墳時代後期、6世紀から7世紀前半の耳川下流域、特に左岸段丘域においては、流域を支配領域とした在地首長層の動態の痕跡が色濃く残っており、後に興道寺廃寺が建立される素地は既に養われていたものと評価できる。

第2項 耳川流域の郷里と氏族

令制下の若狭国郷里については、『倭名類聚抄』により10世紀段階の郷名が知られている。『和名類聚抄』国郡部第十一 若狭国（名古屋市博本）に基づいて遠敷郡、大飯郡、三方郡の郷名を挙げると、

遠敷郡（府） 遠敷 丹生 玉置 安賀 野里 志麻 神戸

大飯一 大飯 佐父 木津 阿遠

三方一 能登 弥美 余戸 三方 駅家

となる。三方郡は能登、弥美、三方の3郷、駅家の1駅、1余戸であるが、この3郷のうち、若狭町能登野が遺称地と考えられる能登郷は旧三方町の西部域に、中世段階の三方郷が旧三方町域にあることから三方郷が旧三方町の東部域に、弥美郷は耳川や式内弥美神社の「ミミ」という遺称に関連して耳川下流域にそれぞれ所在を比定することが一般的である。余戸郷の所在を敦賀半島西岸から美浜町東部域に充てる意見は比較的多く〔美浜町教育委員会2011〕、駅家郷は『延喜式』兵部式81 北陸道条駅伝馬条に記載の弥美駅に関連する可能性が高いことから、駅路に沿って弥美郷の中に独立的に存在していたものと考えられている〔芝田2005、森田2010など〕。ただし、これについては郡内に存在したとされる葦田駅が廃絶後に駅家郷として再編されたとする中大輔氏の指摘がある〔中2014〕。



第146図 若狭国郷里推定図 [吉永 2013を一部改変]

郷名	名代・子代	屯倉	中央豪族系	職業部民	渡来系	地方豪族系
能登	私部首 竹田部首	三家人	粟田公 粟田 (郡) 中臣	海部		
弥美	壬生部		物部 丸部	土師	秦勝 奏曰佐	別君
三方	生部					
駅家		三家人				
竹田	竹田部首	三家人	粟田	海部	黄文	別〔〕 口田別君

第20表 木簡にみえる三方郡の氏族名 [吉永 2013]

一方、『和名類聚抄』以前、7世紀後葉～8世紀の郷里名に関しては藤原京跡、平城京跡、平城宮跡などの出土木簡の記銘に見ることができ、三方（三形）郡の五十戸、里、郷として能登（乃止）、弥美（耳・美々）、余部、三方（三形）、駅家、竹田（竹田部）がある。また、里（コサト）として能登郷に忌波里、弥美郷に中村里、竹田郷に丸部里、坂本里が所在したことが知られている〔芝田 2005、森田 2010、吉永 2013など〕。

竹田里・郷の所在は、その下位の里である丸部里が、式内和迩部神社が鎮座するとされる美

評・郡名	五十戸・里・郷名	里（コサト）名
三方 (三形)	能登 (乃止)	忌波
	弥美 (耳・美々)	中村
	余戸	
	三方（三形）	
	駅家	
	竹田 (竹田部)	坂本 丸部
〔〕（不明）	口〔額カ〕田	

第21表 三方郡における古代郷里名 [吉永 2013]

浜町佐柿付近の所在が考えられているので、耳川下流域の右岸域とする意見もあるが、郷である以上、敦賀半島西岸を含む一定の面積を占めるエリアを想定しておく必要もある。里である中村里、丸部里、坂本里の所在に関する手掛かりはない。

ちなみに、木簡に記録がある三方郡の氏族名、部民名として、能登郷は私部首、竹田部首、三家人、栗田公、栗田（部）、中臣、海部が、弥美郷は壬生部、物部、丸部、土師、秦勝、秦日佐、別君が、三方郷は生部が、駿家郷は三家人、竹田郷は竹田部首、三家人、栗田、海部、黄文、別〔〕、口田別君が数え上げられており、性格別に分類がされている〔市 2011、吉永 2013・2014〕。

発掘調査された古代遺跡の様相から三方郡の五十戸・里・郷のあり方をうかがうと、田名遺跡、角谷遺跡などで硯、墨書き器、木簡などの識字層の存在を示す遺物や、畜串・人形の木製祭祀具、錢貨などの官衙的な遺物が出土している。これらの遺跡は郡家推定地から離れ、旧三方湖畔に所在する。一般集落とは考えにくい律令期の里・郷に伴うような官衙施設が郡家から離れて存在した可能性、とりわけ郡家のいろいろな機能を郡内各地の里・郷などに分散させた結果である可能性も指摘されており〔美浜町教育委員会 2006、松葉 2009 など〕、興道寺遺跡など耳川流域の律令期遺跡を考える上で示唆的である。

第3項 古墳時代後期の在地首長層と耳別氏

『2007年報告』では、興道寺廃寺の建立氏族として6世紀における耳川流域の在地首長層（獅子塚古墳、興道寺古墳群被葬者層）の後裔集団が想定されるが、従前から指摘されるような耳別氏といふ個別具体的な寺院建立氏族に関しては不明であるものとして報告した。

興道寺廃寺は若狭国三方郡弥美（耳、美々）郷に所在する古代寺院であり、その建立氏族として、『古事記』開化天皇段にも記述が見える若狭之耳別、つまり耳別氏を充てる意見が從来から根強い。日子坐王の系譜上では日子坐王の子にあたる室毘古王が若狭之耳別の祖であることが記されており、巨大な日子坐王系譜の一端に室毘古王が位置付けられている〔栄原 2011〕。

これ以外の耳別氏に関する史料として、都城出土木簡に弥美郷の別氏の記録がある以外に、『古事記』繼体天皇段に耳王の名が見える。近年、栄原永遠男氏によって注目された新史料であり、耳王は繼体大王と三尾君加多夫の娘、あるいは妹の倭比売との子として系譜づけられ、耳王の母方である三尾氏は湖西、旧高島郡を中心とする地域の氏族であり、耳別氏が繼体の子の耳王を養育した氏族であった可能性も推測されている。日子坐王は大和王権の大王と婚姻関係を結び、大和、山背、近江、若狭、越前と勢力を伸張したとされる丸庭臣につながるものとされているが、6世紀以後の耳別氏の動向としては、新王統の繼体天皇とつながることで勢力を保っていったものと考えられている〔栄原 2011〕。

興道寺廃寺の建立氏族を考える場合、やはり直接的には在地首長層にあたる獅子塚古墳や興道寺古墳群などの被葬者層の後裔集団を考えることが妥当であると思われるが、この後裔集団を耳別氏に充てることについては、状況的には大過ないものと考えられる。

第4項 興道寺廃寺の檀越と知識

興道寺廃寺の建立氏族に関する内容でもあるが、檀越、知識についてもこれまで若干の議論がある。栄原永遠男氏は『西琳寺縁起』、『多度神宮寺資財帳』などの検討から寺院の造営、管理経営に複数の氏族が関わっていることを明らかにし、興道寺廃寺の寺院規模から考えて、ほとんど史料に見られない耳別氏といふ在地氏族のみだけで寺院を維持したのではなく、複数氏族が関与しながら知識とし

て寺院が維持運営されていった状況を想定し、都城出土木簡の検討を通じて、8世紀前葉に別氏が弥美郷以外にも存在し、三方郡ではある程度の地域的広がりをもった氏族である一方で、耳別氏と同様に和珥氏族として、弥美郷の丸部、栗田、竹田部里の栗田、和尔部、能登里（郷）の栗田が所在することから、和珥系の氏族集団、あるいは別氏系の豪族集団を核にした、知識的な関係の広がりの中で寺院が維持されていたものと位置づけた〔柴原 2011a・2011 b〕。

これに対しては、竹内亮氏の異論もある。『日本書紀』の紀伊国名草郡の寺院を例に擅越が継続的に寺院に建立、維持に関わっていることを指摘し、興道寺廃寺の場合、墨書須恵器が示すように郷名寺院「耳寺」であったとすれば、その擅越は耳別氏となり、知識の範囲については評・郡、あるいは郷に留まり、知識の範囲を限定的に捉える必要性を示した〔竹内 2016〕。

竹内氏の指摘に従って考えれば、興道寺廃寺の擅越は耳別氏ということになる。ただし、別氏は弥美郷以外にも分布し、特に耳川流域において隆盛を誇った耳別氏のあり方を考えれば、興道寺廃寺の創建にあたっては、耳別氏を中心をなし、在地の氏族集団による寺院建立があった状況がうかがえる。後に興道寺廃寺が再建を経て維持されていった背景には、このような氏族集団が知識として寺院に関わり続けたものと考えられる。三方郡で興道寺廃寺以外に白鳳期から奈良時代までさかのぼる寺院はなく、郡で仏教の中心的な役割を果たし、在地氏族にとっても求心的な施設であったものと考えたい。

第5項 興道寺廃寺の建立背景

仏教公伝以後、本格的な伽藍配置をもつ最古の寺院として、588年に造営が始まった法興寺、つまり飛鳥寺があるが、『日本書紀』推古2年に「皇太子と大臣とに詔して、三宝を興隆せしむ。是の時に、諸臣連等、各君親の恩の為に、競ひて仏舎を造る。即ち是を寺と謂ふ。」とあるように、畿内を中心として捨宅寺院としての寺院造営が活発化する。この段階では、各地での寺院造営も低調であり、北陸では越前国丹生郡においてようやく7世紀前半に深草廃寺が建立された状況である。

それ以後、寺院の建立が各地に広がっていく契機となったものとして、乙巳の変があり、蘇我氏の滅亡後、『日本書紀』大化元年（645）8月「凡そ天皇より伴造に至るまでに造る所の寺、營むこと能はずは、朕皆助け作らむ。」とあるように、各地の国造や伴造に対して寺院造営奨励のための詔勅（法興隆詔）が発布されている。

列島各地に寺院造営が進んでいく段階の7世紀後半には、『日本書紀』天武14年（685）3月に「諸国家毎に仏舎を作りて、乃ち仏像と經を置きて、礼拝供養せよ。」という記事に見るように、諸国の家が評家（後の郡家）を指すものか、豪族居宅を指すものはともかくとして、諸国の在地氏族に対してさらに造寺活動を奨励していく状況が読み取れる。

7世紀中葉以後、地方寺院が増えていった背景として、唐の力を背景に朝鮮半島で新羅の脅威が増すという外交上の切実な背景もあり、中央政府が仏教によって安寧を図るという現実的な政策目的が強まった。仁王經や金光明最勝王經などの護國經典の読誦が盛んとなり、天武9年（680）に初めて金光明最勝王經を宮中・諸寺で読み、持統8年（694）には各國ごとにそれを配布し、毎年正月上弦に読むことを規定するなど、諸国の寺院にこれらの護國經典を読ませたという記事が以後の8世紀にかけていくつも見られるようになる。また、推古32年（624）、寺院46寺、僧816人、尼僧569人を数えたといいう寺院の所在、僧尼・資財などの一齊調査（『日本書紀』）のうち、持統6年（692）、天下の諸寺を計ったところ545寺を数えたといい、『扶桑略記』、わずか68年の間に寺院数が十倍以上に増え、列島各地に寺院建立ラッシュとも言える地方寺院の建立が進められた背景には、中央政府による古代寺院建立の奨励があった。

西暦	和暦	記事
538	宣化3	仏教公伝『上宮聖德法王帝説』『元興寺伽藍縁起並流記資財帳』
552	欽明13	仏教公伝、仏像の礼拝を群臣に問う。
587	用明2	仏教に帰依することを群臣に問う。物部氏と蘇我氏が対立し、蘇我氏が勝つ。
588	崇峻元	百濟から舍利・僧・造寺工・瓦博士等が来日。法興寺(飛鳥寺)造営着手。
594	推古2	三宝(仏・法・僧)興隆詔。
596	推古4	法興寺(飛鳥寺)完成。蘇我馬子の子善徳を寺司とする。 高句麗僧慧慈・百濟僧慧聰が法興寺に住む。
624	推古32	寺院数46ヶ寺、僧816人、僧尼569人。
639	舒明11	大宮(百濟宮)大寺(百濟大寺)造営の詔。
642	皇極元	祈雨のため南庭に菩薩像と四天王像を置いて大雲經を読ませる。 百濟大寺と飛鳥板蓋宮の造営のために百姓を徵発する。
645	大化元	蘇我本宗家滅亡(乙巳の変)。
648	大化4	十師を定め、恵妙を百濟寺の寺主とする。国造・伴造の造寺を奨励する。
649	大化5	左大臣阿倍内麻呂が天王寺に仏像4体(四天王像)を寄進。
659	齐明5	阿倍左大臣死去。蘇我倉山田石川麻呂が山田寺で自害。
660	齐明6	出雲国造に神宮を修嚴させる。
670	天智9	仁王般若会をおこなう。
673	天武2	御井のほとりで諸神の座を敷き、幣帛を班ける。
676	天武5	四方の大解除。用物を国造らが輸す。
677	天武6	四方の国(諸國)に金光明經・仁王經を説かせる。
679	天武8	高市大寺を改めて大官大寺と号する。(『大安寺縁起并流記資財帳』)
680	天武9	諸寺の名を定める。
681	天武10	官寺の數を制限し、飛鳥寺を特に官寺の例に入れる。
685	天武14	京内24寺に布などを施す。金光明經を宮中および諸寺で説かせる。
692	持統6	畿内・諸国の天社・地社の神宮を修理させる。諸神祇に幣帛を頒ける。
693	持統7	諸神祇を百國(諸國)で講じさせる。
694	持統8	金光明經を諸国におき、毎年正月に読ませる。
701	大宝元	僧尼令を大安寺で説かせる。
702	大宝2	大幣を班けるために諸国国造らを入京させる。
716	靈龜2	畿内・七道諸寺に幣帛を頒ける。
721	靈龜5	寺院併合令を発する(寺院の荒廃を防ぐために敷寺を合併させる。諸国の寺家について財物・田園などを検査させる。)
725	神龜2	諸国の諸神祇について、国司長官が幣帛を執り、清掃、歳事。
728	神龜5	七道諸国に寺院を清掃し、金光明經・最勝王經を説かせる。
729	天平元	金光明經(最勝王經)を諸国に10巻ずつ頒下する。
735	天平7	仁王經を朝堂と諸国で講ずる。
737	天平9	寺院の併合をやめさせる。
738	天平10	大宰府管内諸国の寺院に金剛般若經を説かせる。
740	天平12	諸国に転写する。
741	天平13	國ごとに法華經10部を写し、七重塔を建てさせる。
749	天平勝宝元	國分寺建立の詔。
756	天平勝宝8	諸寺の畠田の面積を定める。定額寺は百町となる
783	延歴2	灌頂幡が26ヶ国に配布される。
820	弘仁11	定額寺等の新設や寺領の拡大を禁止する。
838	承和5	近江国の大定額寺国昌寺を国分光明寺とする。
841	承和8	天下の定額寺堂舎、仏像経論、神社を修理させる。
859	貞觀元	諸国定額寺荒廃につき、諸国に堂舎、仏像経論を修理させる。

第22表 仏教政策史年表(菱田2011を加筆)

一方で、古代寺院は国家安寧を願う場であり、新たな宗教による祖先信仰や共同体の結束強化という目的をもつと同時に、寺院建立氏族の勢威を示す装置となった。在地の豪族にとって新しい技術を導入し、支配してきた在地社会に荘厳な塔を出現させ、相応の権力と財力を示す絶好の機会であつた。すなわち中央政権に帰順し、国家機構の末端に連なることを在地社会と民衆に瓦葺き寺院という可視的な構造物で表したこと、その支配を強固にしたものと考えられる。古代寺院は、地域社会における豪族の権力、権勢などのパロメータとしての役割を果たし、その所在から地域内部の権力構造を読み解くことができる、地域社会の「紳士録」と評されるゆえんでもあった〔菱田 2006〕。

このように中央政府による奨励や援助、つまり強力な働きかけとともに、在地社会における思惑が存在し、さらには地方寺院の造寺には教化僧—檀越—知識という典型的な知識の構造が7世紀には存在し、知識結集のための社会的求心力として檀越自体がもつ力があり、評督などの公権力に起因するものではないことが竹内亮氏によって指摘されている〔竹内 2012〕、在地社会における寺院造営には複雑な事情が絡み合っているものと推察される。

北陸地方における地方寺院の建立が進められたのは、まさにこの7世紀後半の時期で若狭でも遠敷郡の太興寺廃寺とともに興道寺廃寺の建立が開始された時期にあたる。まさに7世紀末葉に545寺が数えられたうちの一つに興道寺廃寺が該当するものと考えられる。

7世紀後半に見られた活発な寺院造営に対して、いわゆる寺院併合令によって一定の歯止めがかかるようになる。『続日本紀』巻2年（716）5月の記事によれば、寺院数が拡大していく中で寺院の荒廃を防ぐため、あるいは名ばかりで実態がない荒廃寺院を淘汰するために、数寺を合併させ、諸国の寺家について財物、田園などを検査させることで寺院の整理を行ったことが記されている。実態のない寺院に対しては厳しく対処することがこの命令の趣旨であり、その後に存続していく寺院は保護されていくこととなった。近江を例として、白鳳寺院のうち8世紀前葉から中葉にかけて合併して造った寺院、また援助する寺院に平城宮系の軒瓦がもたらされたことを菱田氏が指摘している〔菱田 2006・2011など〕。また、須田勉氏は東国における古代寺院の消長を検討し、7世紀代に創建された多くの寺院が8世紀前半の造営の継続や補修に対する痕跡が認められることを明らかにし、いわゆる寺院併合令との関係を説いている〔須田 2013〕。

若狭の白鳳寺院で、寺院併合令を乗り越えて後まで存続した寺院として、若狭二郡の中心的寺院である太興寺廃寺と興道寺廃寺が挙げられ、太興寺廃寺では平城宮系の瓦がもたらされており、また興道寺廃寺においても8世紀中葉には講堂の造営を迎える、さらに8世紀後半以後に大規模な寺院再建、伽藍整備を進めていった状況が判明している。

第6項 興道寺廃寺の存続背景

興道寺廃寺における8世紀中葉から後半にかけての時期を中心とした大規模な再建、伽藍整備について、その背景を明らかにすることは難しいが、初期（創建期）の講堂が創建期の金堂・塔と建物軸の南北を概ね合わせて再建期の直前に建立され、追って塔がほぼ同じ南北軸で再建され、追って金堂と中門が正方位を意識した南北軸で石積み基壇を伴って再建されていることを前提とすれば、かなり連続的な堂塔の建て替え、変遷がうかがえる。

古代寺院の造営において、全ての寺院が同時期に一齊に全ての伽藍が整えられたというより、長期間において順次、段階的に堂塔が整備されていった状況が指摘されており〔亀田 2005〕、文献史料の検討からも同様の指摘が行われている〔佐藤 2002〕。興道寺廃寺の伽藍整備、堂塔の建て替えに関しても古代寺院の造営においてよく見られる現象の一つと解される。8世紀中葉から9世紀前半にか

けての若狭においては、太興寺廃寺における平城宮系軒瓦の導入、神順寺の建立、伽藍整備、国分寺の伽藍造営など、活発な寺院展開が認められ、そのような造寺の流れが興道寺廃寺の伽藍整備、再建を促していることも考えられる〔美浜町教育委員会 2016〕。

ただし、何をもって伽藍整備、寺院再建に向かったのかといった本質的な議論が十分になされたことはない。一つとしては、郡領ポストの減少に伴う氏族間の争いに求める門井直哉氏の見解がある〔門井 2011・2016、美浜町教育委員会 2011〕。『和名類聚抄』記載の三方郡の能登郷、三方郷、弥美郷、駿家郷、余部郷、都城出土木簡記載の竹田郷の中で、特殊な郷である駿家郷、余部郷を除いた能登郷、三方郷、弥美郷、竹田郷の4郷について、奈良期の実在したであったであろう竹田郷が後に消滅もしくは郷の再編によって3郷に減少したことにより、三方郡が下郡から最小規模の小郡となつたことに伴い、郡司の定員が下郡の大領1名、少領1名、主帳1名の3名から、小郡の定員が大領、少領が郡領に一括されて1名分のポストが減少したため、そのポストを巡る在地の氏族間の争いが生じ、興道寺廃寺が8世紀以後も造営され続けていく背景になったという見解である。古代寺院に在地氏族の権勢、勢力を誇示する側面があったとすれば、この耳川流域の氏族が自らの勢い、あるいは郡司としての正当性をアピールするために寺院の造営を続けていったという評価である。

興道寺廃寺が8世紀後半以後も存続していくという寺院の性格に関して、いわゆる定額寺的な位置づけが可能かどうかという観点から議論が行われている。天平勝宝元年(749)以後に史料に現れるいわゆる寺格としての定額寺と興道寺廃寺との関連についての議論である。このことについては、菱田哲郎氏の考察に詳しいため、以下に箇条書きで概述する〔菱田 2011〕。

・遠敷郡の太興寺廃寺は平城宮系の軒丸瓦が出土するなど定額寺として相応しい。ただし、平城宮式の瓦が出土しないことから定額寺ではなかったとは言えず、定額寺の中で瓦葺きでなかった例として広隆寺がある。再建後の広隆寺が柿葺きであることが知られている。

・興道寺廃寺の場合、修理の段階に瓦を使用していないが、基壇の位置や形を変えている。他の寺院の場合、修理があったことを瓦で類推することが多いが、興道寺廃寺ではむしろ瓦葺きにしない修理を施していた可能性も高く、このような寺院も定額寺になっている可能性が高いのではないか。

・平安期の文献史料には多くの定額寺が現れるが、大概の場合、地名もしくは氏族名による寺名と法号からなる寺名をもつ。定額寺となる寺院はこの2種の寺名をもつことが一般的である。興道寺廃寺が定額寺であれば、1つの寺名は氏族名であり、地名でもあるように耳寺であったことがほぼ確実で、郡名から三方寺、あるいは遺跡の小字名から觀音寺という寺名であった可能性もあるが、「耳」墨書き土器の出土で耳寺の可能性が高まった。

法号については、最も相応しいと考えられるものとして文字通り、興道寺である。興道寺はむしろ中世以降の別の寺院を指していることが芝田寿朗氏によって指摘されているが、中世寺院のみが興道寺という寺名であったと考える必要はなく、播磨量興寺のように鎌倉期に古代の寺院を再興する、あるいは寺院の由緒を引き継ぐという寺院が現れる現象もある。『若狭国惣田数帳』に見られる寺院として、天台宗無動寺領として、遠敷郡の中心的寺院で確実に定額寺になつたと考えられる太興寺もあるが、おそらく太興寺は郡名をもつ遠敷寺という寺名であるとともに、法号は太興寺であった可能性も高いのではないか。例えば「興」という文字は古代寺院によく使われており、興道寺や太興寺という名前が古代寺院まで遡る可能性は捨てがたく、中世寺院である興道寺が、同地域にあった元々の寺名を引き継ぐこともあったのではないかと思われる。

・奈良時代中頃以降も存続していく寺院が定額寺の典型となるが、興道寺廃寺は決して盡亀2年の寺院併合令で廃止される寺ではない。盡亀年間には金堂、塔が完成していたものと考えられるが、その

後に創建伽藍を変更して再度、金堂や塔などを建て直しており、再建の時期は再建の中門基壇下に神功開寶が埋め込まれているので、760年代より少し後であり、そのような時期に大規模な改修を行っていることは興道寺廃寺が寺院として存続していた証と考えられる。定額寺となり、後に存続していく寺院は経営のための施設をもつことが一般的であるが、興道寺廃寺の中心の施設は分かってきた一方で、寺院の北側、講堂以北にかなり広い空間がある中で、いくつかの掘立柱建物跡が確認されている。講堂北側の雜舍群は講堂と同じ向きであり、再建時以前の建物群である可能性も十分あるのではないか。寺院の中心施設が整備された後、寺院の経営が本格化する段階に寺域の北側にさまざまな建物が建てられるようになるが、興道寺廃寺の寺域北側で確認されているいくつかの建物群については、古墳時代の前身遺構は別にして、興道寺廃寺が再建され本格的な経営がされている時期の施設として相応しいものになるのではないかと予測される。

興道寺廃寺が定額寺であった可能性を論じた菱田氏の指摘に対しては、現実的な理解として竹内亮氏、梶原義実氏が追認しており〔美浜町教育委員会 2016〕、遠敷郡の太興寺廃寺と三方郡の興道寺廃寺、二郡の代表的寺院が定額寺として組み込まれていく状況が考えられる。

第5節 興道寺廃寺をとりまく景観

第1項 三方郡家の所在と興道寺廃寺

孝徳期の全国的な立評の動きの中で、7世紀後半には三方立評がなされたものと考えられるが、三方立評の時期を示す直接的な史料はない。ただし、木簡における国郡郷里の表記に関して、天武10年(681)頃までは国一評—五十戸の構成であったことが知られており〔市2009〕、現在、確認できる若狭国最古の紀年銘木簡に持統元年(687)、「若佐小丹評木津ア五十戸」があり、紀年銘そのものの記載はないが、これ以外にも飛鳥京跡出土木簡に「三形評三形五十戸」、藤原宮跡出土木簡に「口口評耳五十戸」の記載が見られるなど、7世紀第4四半期には三方評が立評していたものと考えられている。

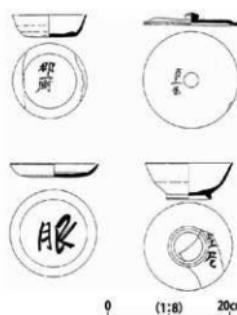
大宝元年(701)、若狭国は遠敷郡、三方郡の2郡から始まったが、『日本後紀』天長二年七月辛亥条に「若狭国の遠敷を割きて、大飯郡を建つ。」とあるように、天長2年(825)に遠敷郡西部から大飯郡が分立した。『延喜式』民部式上4、北陸道条には、「北陸道 若狭国 中 遠敷・大飯・三方を管す。右、近国と為す。」とあり、3郡で1国を構成したが、それでも数少ない郡で一国を構成していることには変わりない。

三方郡家の所在地に関しては、城縄手遺跡（若狭町三方）が郡家所在地として有力視されてきた。近辺に古代祭祀との関わりが想定される「郡神」、あるいは式内三方神社の旧社地があったと伝えが残る「館藏」などの小字地名が遺存し、「郡厨」「郡」「三方」などと墨書きされた8世紀末葉から9世紀前半の所産と考えられる須恵器杯・杯蓋の存在から、その頃の郡家が城縄手遺跡付近に所在する可能性が大きいとされてきた〔美浜町教育委員会 2006など〕。

一方で、初期郡家の所在を耳川下流域の興道寺廃寺周辺に求める新たな見解が近年、提起されている。その根拠を整理すると、①興道寺廃寺が7世紀後半までさかのぼる郡内唯一の白鳳寺院で、後に本格的な伽藍を備えた寺院として整備されており、付近に郡領氏族の存在が考えられること、②興道寺廃寺の南西に郡家に関わると思われる「下屋敷」という小字地名が遺存すること、③興道寺廃寺建立前夜、6世紀～7世紀前半までの耳川流域と鯉川流域とを比較して、古墳の築造と土器製塙の活動に関して耳川流域に優位性、先進性が認められ、耳川流域を本拠とした在地氏族がそのまま郡領とな

った可能性が考えられること、④城縄手遺跡所在説の根拠となっている出土墨書須恵器の年代が9世紀前後に降るなど、初期郡家が当初からこの地にあったとは断定できず、後の郡家の移動を想定する必要があること、⑤付近の興道寺遺跡検出構造は官衙施設として評価できないが、遺跡出土土器の組成が国府関連遺跡と目される西縄手下遺跡と共に、特に土師器食膳具の中に畿内から直接的にもち込まれたとみられる一群が存在することから遺跡周辺に官衙の存在が考えられるなどである。これらの見解に対して、郡名となった三方という地名は若狭町三方に見られ、三方地域にその所在を考える方が妥当であるという反論も示されているなど、郡家の所在比定に関する議論において決着を見ているとは言い難い〔美浜町教育委員会2006、美浜町教育委員会2011など〕。

興道寺魔寺が、いわゆる郡寺、郡衙周辺寺院としての性格を帯びた寺院であった可能性は、三方郡家の所在とも関わるため不明と言わざるを得ない。耳川下流域で郡衙施設が検出されがあれば、その可能性も議論されるべきである。



第147図 城縄手下遺跡出土須恵器実測図
〔田辺2006〕

- 1 国分遺跡・西縄手下遺跡（国府推定地）
- 2 船縄手遺跡（三方郡家推定地）
- 3 興道寺遺跡（郡衙施設在り可能性）
- 4 市越遺跡
- 5 田名遺跡
- 6 角谷遺跡
- 7 道敷郡家推定地（道敷町）
- 8 敦賀市（道敷不附）
- 9 日間前遺跡（高崎高崎郡家か）
- 10 若狭郡分寺跡
- 11 神願寺（若狭神宮寺）
- 12 若狭神社
- 13 大興寺魔寺
- 14 下夕中廢寺
- 15 興道寺魔寺
- 16 旗廟院
- 17 氷比神宮寺
- 18 日置前魔寺
- 19 大伴魔寺
- 20 愛光院（敦賀市近畿にある）
- 21 松原駅
- 22 弥美駅（木野山駅跡による）
- 23 鮎田駅（若狭町相田）
- 24 五瀬駅（若狭町三宅町による）
- 25 木崎遺跡（敦賀、越前界）
- 26 弘野野南海道遺跡（高崎郡家近畿側として想定）
- 27 気木津推定地
- 28 末野宮跡
- 29 和同遺跡



第148図 若狭国における古代遺跡分布図（縮尺1/600,000）

第2項 古代若狭の交通路と興道寺廃寺

若狭国の駅路復元に関しては、近江国高島郡・越前国敦賀郡・若狭国の三地域を三角形に結ぶルートが明らかにされているが、『日本紀略』延暦14年7月辛卯条・閏7月辛亥条の「左兵衛佐橘入居を遣はし、近江・若狭両国の駅路を検せしむ。駅路を廃す。」という延暦14年(795)、中央政府が使者に近江・若狭両国の駅路を調べさせた後に駅路を廃したという記述をもとに、これ以前は近江国高島郡から北進して若狭国に入り、さらに越前国へと続く道が本路として機能していたと考える、つまり初期駅路は近江国高島郡⇒若狭国⇒越前国敦賀郡へと至るルートを想定する意見が現時点で主流を占めている。8世紀段階は、『延喜式』記載の弥美駅、濃飯駅の間に、平城宮出土木簡に記載の玉置、葦田、野（後の濃飯か）の駅があり、『日本紀略』延暦14年の駅路検閲と駅路廃止の記事があることから、北陸道として近江から若狭を経由して越前へと至ったとする駅路が本路として機能していた状況がうかがえる。ただし、近江一越前間のルートに関しては藤原仲麻呂の乱の際には直接、近江から越前国に向かっているように、9世紀以後に比して一段と複線的な交通路の存在が考えられる〔中2014〕。

かつては、初期駅路の整備段階から近江国高島郡から越前国松原駅へと至り、さらに加賀国以北へと向かう道と、西に進んで若狭国へと入る道（若狭支路）とに枝分かれするとする『延喜式』記載の弥美駅、濃飯駅の順の記述にそのまま従う見解も見受けられたが、『日本紀略』延暦14年の記事から考えれば、9世紀以後の本路としてこのルートが用いられたものと考えられる。松原駅から弥美駅、濃飯駅へと至る駅間が広くなることに対しては海上交通が併用された可能性が指摘される一方で、『延喜式』主税式上116 諸国運漕功貨條の記述に「若狭國陸路。〈駢別稻十束五把〉海路。〈自勝野津至大津船貨。米石別一升。挾抄功四斗。水手三斗。但挾抄一人。水手四人漕米五十石。〉（後略）」とあるように、若狭国から物資を運ぶ際に近江国への勝野津を経由していることから9世紀代にも若狭と近江間のルートが、物流の道として機能している。奈良時代末期の全国的な駅家の統廃合を経て、人々の交通路を利用して駅路と支路が存在したことが読み取れる〔中2014〕。



第149図 若狭国周辺の交通路 [芝田2003]

若狭国内における駅家の所在、盛衰については、歴史地理学を中心とした重厚な先行研究があるが、平成25年10月に行なった美浜町歴史フォーラム「古代若狭の交通、往来、地域社会」では文献史学、考古学、歴史地理学の観点から議論を行なっており、若狭の駅路と駅家に関するさまざまな問題を整理し、現時点での見解を提示した〔美浜町教育委員会 2014〕。とりわけ近年、8世紀段階の玉置駅を若狭町三宅付近に想定し、近江国高島郡の郡家近接駅から水坂峠を越え、約16kmで若狭町三宅付近の玉置駅へと至り、西に進めば国府などの官衙群を通過して約10kmで小浜市木崎付近、濃飯（野）駅へと至り、逆に玉置駅から東に進めば、それぞれ約10kmで葦田駅、弥美駅、さらに10km強で越前国松原駅へと至る、近江・若狭間の自然な駅間距離を馬場基氏が示しており〔馬場 2007〕、これを踏まえて中氏は木簡に見られる「三家人」を例に駅家とミヤケとの関係性に着目し、若狭町三宅が駅家の関係地名である可能性を指摘するとともに、全国的にも駅家が交通の分岐点に置かれる場合が多いことから、玉置駅の所在を若狭町三宅に想定する新たな見解を提示している〔中 2014〕。

興道寺廃寺と近接駅である弥美駅、北陸道との関係において不明な点は多いが、第1章で概述したように北陸道が興道寺廃寺の北方を通過しようとも、南方を通過しようとも、北陸道から離れて所在している点が特徴として挙げられる。北陸道そのものが近江から若狭に入り、越前に抜けるルートであれ、近江から越前に入り、支路として若狭に入るルートであれ、それらが副線的に存在していたとしても、この事実は変わらず、もし興道寺廃寺の北方を北陸道が通過していた場合、まさに寺院の背面を眺望する形で北陸道の往来があったこととなる。

第3項 興道寺廃寺周辺の古代景観

有吉重藏氏の指摘にあるように（有吉 2014）、『額田寺伽藍並条理図』の共同研究によって寺領（田畠、岡、林、原）、道・冠木門、墳墓、河川、水路、池など、氏寺級の寺院景観の一端が明らかにされている。実際に興道寺廃寺においてどのような景観が広がっていたのか、その全てを明らかにすることは困難であるが、既往の調査を元に明らかとなった点を概述する。

まず興道寺廃寺の立地に関して、河岸段丘のうち、より一段と標高が高い微高地に寺院が所在することを指摘できる。近江の古代寺院の立地を検討した梶原義実氏の研究に従えば、①官衙・官道隣接型、②水運型、③聖域型、④眺望型、⑤開発拠点型、⑥山林寺院、⑦村落内寺院という立地分類が示されているが〔梶原 2011〕、そのような視点から若狭の古代寺院を概観した場合、主要官道に隣接し、仏教を国家が管理統制し、国家仏教の拠点として仏教儀式を行なったとされる①のパターンは太興寺廃寺、下夕中廃寺が該当する。また、「俗界」とは隔絶し、聖域としての意識が強い立地という③のパターンは神願寺（若狭神宮寺跡）が当てはまり、一方または複数方向を広く見渡せる場所を選んで造営されたとされる④のパターンは興道寺廃寺が該当しよう。若狭の場合、古代寺院の数そのものが少ないということもあり、類型化は困難であるが、興道寺廃寺の場合、寺院の北側または南側を東西に通過していたと考えられる北陸道に対するアクセス性が低い一方で、逆に周囲からの眺望を意識し、また寺院からの眺望も意識した立地となっていることが特徴となっている。

古代寺院と交通との関係性について菱田氏が論じているが〔菱田 2013〕、おそらく遠敷郡（遠敷・小丹生評）の郡衙施設と近接して所在したものと考えられる太興寺廃寺、郡境に所在する下夕中廃寺、まさに耳川流域の中心地に所在する興道寺廃寺、それぞれの寺院の立地が若狭の古代交通、あるいは往来と密接に関わっている点を評価する必要がある。

これまでの興道寺廃寺の調査を踏まえ、寺院の建立以前、創建期、再建期、廃絶期の各時代の様相が明らかになりつつある中で、興道寺廃寺そのものの規模については、西琳寺、多度神宮寺、近長谷

寺などの資財帳に見られる堂塔の構成との対比による栄原永遠男氏の指摘があり〔栄原 2011〕、伽藍域については創建期、再建期ともに西琳寺、多度神宮寺と比べてさほど遜色がなく、同等の規模の寺院であり、地方豪族が閲与した寺院として他の寺院と比べて遜色がない規模をもっている寺院であつたものと評価されている。

このことを元に興道寺廃寺の造営に伴う開発を考えると、創建期においては地山層の削り出しで基壇を作り、地山面から溝、土坑などの遺構を掘り込むなど、地山面に対する働きかけを行っていることに対して、再建期においては特に伽藍城の西側を中心に創建期の建物基壇や整地面を覆うように再建期の整地を施し、整地面が広がっていることが特徴として挙げられる。再建期の建物基壇はこの整地面の上に構築されており、伽藍城においては創建期と比べて全体的に標高が一段高くなる。

この再建期の整地層は南門基壇からさらに南に広がっていることが特徴的で、少なくとも南門から南に約 25m は広がることが確認されている。南門の前面、つまり寺院の正面には寺院に至るまでの道路や、幢幡などを立て掛けた広場状の空間が広がっていたことが想定されるが、寺域外にあるにも関わらず、さらに南方に整地を施す様相は、寺院へのアクセス道、空間整備に留まらない寺院再建期の地域開発の一端がうかがうことができる。

一方で、興道寺廃寺の周辺における古代景観に関してはまだ不明な点も多いが、興道寺廃寺の北側を中心とする穴窓建物を中心とした施設が潜在的に分布する様相が明らかになりつつある。『2012 年報告』にて指摘したように、興道寺廃寺の北方から北西方に小鍛冶を作らう律令期の集落が広がっている一端を示しているであろう。当然、小鍛冶のみに留まらない、寺院の維持、経営のための施設である可能性は高く、今回、南北溝 SD160202 埋土を花粉分析することで、8 世紀後半以後の寺院再建期には寺城北西隅部付近に田畠があった可能性が新たに浮上するなど、寺院景観を復元する上で新たなデータを蓄積した。古代寺院の経営にあたって寺田や園地からの収穫物が充てられたものと考えられるが、興道寺廃寺でイネ科に加えてソバ属の花粉が得られたことは、寺院経営に伴う計画的な植物栽培が展開していた可能性も考えられ、長期間に及んだ興道寺廃寺の寺院経営を考える上で重要な成果であったと思われる。

寺院は地域の核ともなるランドマークであり、この周辺には官衙を含めたさまざまな施設、交通路、瓦窯、集落拠点などがあったものと考えられるが、しかし、瓦窯、官衙施設、交通路の様相は未だ不明であり、さらなる調査研究の蓄積が必要である。

第4項 興道寺廃寺と周辺社寺との関係

三方郡における古代仏教信仰に関する遺跡として、現時点で白鳳期から奈良時代までさかのぼる古代寺院は興道寺廃寺のみであり、若狭町三方に所在する臥龍院では昭和 8 年(1933)に境内地(庫裏)から古代の丸瓦、平瓦、博などが出土するなど古代寺院の存在も考えられるが、時期的には後出し、平安期以後に伴う可能性が高いと考えられる〔美浜町教育委員会 2006 など〕。

古代神祇祭祀の場となった三方郡の式内について、「延喜式」神祇、神名帳によれば、三方郡 19 座(大 1 座、小 18 座)が記されている。美浜町に関係する 11 座は大社の宇波西神社を除いていずれも小社で、須可麻神社、伊牟移神社、丹生神社、織田神社(佐田・北田)、和爾部神社、佐支神社、高那弥神社、仁布神社、木野神社、弥美神社がある〔芝田 2005 など〕。その中で、興道寺廃寺の時期までさかのぼるとされるものも存在する。

若狭国では神頤寺が神仏習合の寺院として建立され、文献史上では氣比神宮寺などと同様、初期神

宮寺の例として知られており、8世紀後半段階の塔基壇が検出されるなど若狭神宮寺としての実態が知られている。遠敷郡においては多田寺・木造薬師如来立像などに見るように、奈良時代の作とされる仏像を安置する現存寺院もみられ〔芝田 2013〕、遺跡として残る古代寺院以上に古代に成立した社寺があつたものと考えられる。興道寺廃寺の場合、弥美神社が奈良時代に成立していたかははっきりしないが、耳別氏などの建立氏族による神祇祭祀が存在していたものとすれば、興道寺廃寺と対となるような神社が存在した可能性もある。

第5項 天台系寺院、興道寺

興道寺廃寺の廃絶以後の様相について、大正12年にまとめられた『耳村誌（稿）』第六章 沿革、興道寺の項をひくと、「耳西郷に接すれども独立の一区劃をなせり。園林寺文書永享十一年馬の註文に近村の地名を挙げて、八村、山東、興道寺、西郷とあり。以て知るべし。莊名を有せざりしなるべけれども、純然ため莊の組織をなせるなり。文永二年惣田数帳に天台四王院領興道寺十二町、地頭得宗領公文御家人和久里又太郎伝領之とあり。得宗領とは鎌倉幕府の執権北条氏の家督なり。天台四王院は比叡山にあり。」とある。この記述の根拠となった文永2年（1265）、国衙作成の土地台帳の案文である「若狭国惣田数帳」〔『東寺百合文書』〕に「天台宗四王院 興道寺十二町」の記述がある。鎌倉期の段階には、天台宗四王院領の興道寺十二町、つまり比叡山四王院所有の興道寺の田園が12町あるという記述が興道寺という名の初出で、これ以後、中世にかけての寺院として興道寺が定着していくようである。天台宗四王院の平安時代初期には天台宗興道寺が創建されていた可能性が示唆される。

正中2年（1325）、「承領法親王附属状」〔『三千院文書』〕の「若狭国興道寺」の記述からすれば、中世寺院としての天台宗興道寺が14世紀にも存続していることとなり、広義で山西郷の領域に含まれる興道寺という所領単位としての地名が13世紀中葉の文献に莊郷としてそのまま収録されている背景と考えられる。ちなみに、天台宗興道寺の消長は天文6年（1537）、「梶井門跡目録」〔『三千院文書』〕中、「一 若狭国興道寺証文之事 当時守護押領」の記述から、この時期には寺院の存続が困難となり、中世末には廃絶したものと推測されている〔美浜町教育委員会 2006〕。

興道寺廃寺と天台系中世寺院、興道寺との連続性は明らかではない。少なくとも興道寺廃寺の一連の調査では、その場所での中世寺院への移行は認められず、寺院が10世紀以後には廃絶し、塔基壇面において確認されている13世紀後半の溝の存在から考えて、かつて古代寺院が存在したという認識も低くなっていたものと考えられる。興道寺廃寺があつた場所には天台系中世寺院の興道寺があつた可能性は低く、芝田寿朗氏は現存する淨土真宗、妙壽寺の付近に興道寺の所在を想定しているが、分布調査における採集土器の年代から考えても、興道寺廃寺の律令集落が平安時代以後に興道寺廃寺の南方へと全体的に移動している可能性が高く、天台宗興道寺の成立と連動する動きを示していることも考えられる。

天台宗の興道寺が平安時代初期に創建されていたとすれば、興道寺廃寺との連続性が問題となるが、現時点では不明と言わざるを得ない。ただし、興道寺廃寺とは異なる場所で天台宗興道寺が成立した可能性は十分にあり、興道寺廃寺の衰退と天台宗興道寺の成立がリンクするとすれば、興道寺廃寺が法号として備えていた寺名の興道寺を、そのまま天台系寺院が引き継いだ状況は大いにあり得る。

第6節　まとめ

第1項　遺構・遺物の遺存状況

『2012年報告』の内容と重複するが、改めて概述する。興道寺廃寺で検出された遺構のうち、創建期の伽藍に関するものについては総じて再建期の遺構下にあり、建物基壇などは下部が現存する可能性もあるが、再建期に一定の改変を受けているものと考えられる。再建期の遺構に関するものは、例えば建物基壇などは表土直下で検出され、基壇そのものも例えば金堂では全体の2/3以上が削平を受けて失われており、また下部の1/3ほどが現存するに留まっているように一定程度の改変が認められる。また、基壇周囲の堆積層に含まれる瓦もかなりの改変を受けて細片化し、2次の移動があったことを考えれば、総じて遺構の遺存状況が低いような印象がある。

ただし、『2007年報告』で「遺構が存在する深度が極めて浅いにも関わらず寺院構成遺構が良好に現存する」と述べたように、遺存状況が悪いながらも幸うして平面と土層断面で建物基壇を認識でき、一定の遺物が出土していることを考えれば、既に受けている遺構に対する一定の削平、改変も将来的な遺跡保存、環境整備に対する障害になるものではないものと考えられる。これ以上の遺構、遺物の損壊を招かない保護措置が必要であるが、遺跡の現況が水田、畑地であり、地中に深い掘削を伴わない耕作であれば、当面の遺跡保存に関して切迫した課題は感じられない。

伽藍域以外では、例えば伽藍の南側では表土下に近世以後の堆積層が分布し、また北側においては地山面までが深く、表土下、数10cmほどの厚い堆積層に覆われていることから、総じて遺構の遺存状況は良好である。

第2項　調査の成果と課題

興道寺廃寺第16次調査を終えた現時点での通りこれまでの調査を総括する。

まず、伽藍地(伽藍地)について、『2012年報告』でも示したように寺院そのものに創建、再建とも言うべき大きく分けて2時期の寺院造営が存在することが判明している。前後の時代を含めた通史を概観すれば、6世紀から7世紀前半にかけての在地首長層の集落形成、7世紀第4四半期から8世紀前葉の金堂、塔、(中門)の建立からなる寺院の創建(創建1期)、8世紀中葉の講堂の建立(創建2期)、8世紀中葉の塔の建て替え(再建1期)、8世紀後半の南門の建立(再建2期)、金堂・中門の建て替え(再建3期)、9世紀末葉～10世紀前葉の寺院廃絶といった変遷を確認できる。

伽藍地においては、それぞれの堂塔の基壇の方位、基壇の規模、基壇の構築方法のあり方もおおむね判明し、8世紀中葉の段階には金堂、塔、講堂が整い、8世紀後半以後、金堂、塔、中門において基壇の造り替えを伴う建て替えがあった変遷が明らかとなつた。伽藍の大体の規模も判明し、日本海側で伽藍の様相が知られる寺院と比較しても金堂、塔、講堂が近接するいくつかと事例と共に通する一方で、中門が南に離れて位置することは興道寺廃寺の特徴の一つとなつてゐる。

寺域(寺院地)に関しては、直近の調査が寺域確認を目的とした調査であったこともあり、既報告からさらに新しい知見を加えることができた。南門については『2012年報告』の段階で既に報告されており、寺域北限に伴うと考えられる東西溝も部分的に確認されていたので、寺域の南北規模はおおむね判明していたが、寺域東限に伴うと考えられる地山面の微起伏、西限に伴うと考えられる南北溝を新たに検出したことで特に再建期の寺域規模がおおむね判明した。日本海側の古代寺院においても寺域の規模、寺域を画する施設の構造も多様で、単純に興道寺廃寺と比較することも難しいが、長期間に及ぶ造営があった寺院においては寺域の平面構成が総じて企画性に乏しく、方形でありながらも崩

れて不定形なプランなものも見られ、これらとの共通性がうかがえそうである。興道寺廃寺を含め、寺域を画する施設として溝のみが検出されている事例もいくつかあるが、これについては既に削平を受けている築地の存在も考えられよう。

興道寺廃寺の伽藍地、寺院地の様相を日本海側の古代寺院に位置づけることは困難であるが、寺院の平面構造、建物構造を見ても決して貧相ではなく、また長期間に及ぶ寺院の造営、維持が図られたことは、興道寺廃寺の大きな特徴の一つであると言える。

興道寺廃寺では出土瓦の遺存状況が決して恵まれたものではないが、それでも軒瓦、丸瓦・平瓦の様相は明らかとなっている。瓦は8世紀中葉の時期までに収まるもので、寺院の存続に比して比較的早くに塔堂の屋根部材がはじて瓦から植物素材へと変わっている可能性が高い。とかく降雪が多い地域の古代寺院では建物の屋根が瓦葺きであることが少ないと指摘されるところであるが、興道寺廃寺でも瓦の全面的な使用が初期伽藍に限定されることが特筆される。また、瓦以外の出土遺物としては塑像螺髪があり、再建期の金堂には丈六級の塑像如来仏が本尊として安置され、本格的な仏教活動が行われていたことが改めて評価される。

寺院付属施設としては、伽藍地の北側に複数時期からなる掘立柱建物群が展開し、さらに寺域北限のラインからさらに北方では堅穴建物などが分布する様相が確認されている。いわゆる雑舎群などの寺院経営に伴う施設である可能性が高い建物群である。寺院建立の前段階であるが、6世紀から7世紀前半の掘立柱建物、堅穴建物からなる建物が後の寺域の範囲に分布することを確認している。大規模な掘立柱建物は在地小首長層の居館である可能性も想定されるが、捨宅寺院としてのあり方を示しているとは言い切れない。ただし、寺院建立の直前に面的な古墳時代後期集落が展開していることも事実であり、寺院建立氏族の動向を探る上でも評価されよう。興道寺廃寺では、寺院そのものだけでなく、関連施設が潜在的に広がっており、今後、調査が進めば一段と全体像が明らかになるものと期待される。

第3項 興道寺廃寺に関する今後の保存と活用

幸いにも興道寺廃寺においては、差し迫った開発事業は及んでいないが、逆に土地所有者の高齢化に伴い耕作の休止が目立つようになっている。遺跡の荒廃化につながる予兆はないが、土地所有者の理解を得ながら、速やかに遺跡の保存活用の措置を図る必要がある。しかし、将来的に保護すべきと考えられる範囲の30~40%の土地については未相続地となっており、史跡指定を進めるにあたっては、特に指定同意に関して相当の事務量が発生するものと見込まれる。

また、土地所有者の高齢化を考えると、史跡指定の措置が図られた場合、速やかに保存管理計画を策定し、史跡の保存と活用のための具体的な方法を検討していくとともに、隨時、土地の買い上げを行なながら遺跡の保存と活用の保存を図る必要がある。現時点での遺跡の保存と活用に関する具体的な内容を示すことはできないが、近年、ARを活用した遺跡の活用事例が増加しており、さまざまな事例を検討していく必要があろう。

第4項 おわりに

平成14年度に興道寺廃寺第1次調査に着手し、第16次調査までに十数年の期間を費やした。遺構、遺物の様相が全く不明の中で始められた調査は当初、手探りの連続であり、また調査担当者の未熟さもあって調査を進めるにあたって多くの困難があった。

当初、これほどの長期間に及ぶ調査は想定していなかったが、調査が進むにつれ、古代寺院として

の具体的な姿が明らかになつていった。これはひとえに文化庁、福井県教育委員会を始め、関係機関のご理解、ご指導の賜物であり、また学術的な評価や調査判断、遺跡の価値づけに関しては絶えず興道寺廃寺等調査指導委員会委員の皆さまのご指導、ご助言を賜つた。また、興道寺廃寺と並行して進められた美浜町歴史フォーラムは12回の開催において、講師を務めていただき、あるいは来場いただいた気概の若き研究者、内外の学識者の皆さまからは多くのご教示、ご助言を賜ることができた。そして、土地所有者の方々を始めとした地元の興道寺区の皆さま、発掘調査や出土品整理に従事された皆さまのご協力、ご尽力がなければ、調査を実施することすら叶わなかつた。改めて関係各位に感謝を申し述べたい。

今回の総括報告が興道寺廃寺のこれまでの調査を漏れなく報告し、また遺跡に対して適切な評価を行っているか心許ないが、地域住民の皆さまはもとより歴史爱好者、研究者など内外の関係各位に興道寺廃寺が未永く保存され、また広く活用されることを切に願うものである。

〔脚注〕

- 註1 このような寺院の例として、長見寺廃寺址がある。検出遺構は掘立柱建物で占められる一方で、豊富な軒瓦、山陰型鷲尾が出土していることが特徴的である。
- 註2 平成25年9月8日に開催された古代寺院史研究会第26回例会（若狭例会）の際に興道寺廃寺出土瓦を実見していただき、コメントをいただいた。
- 註3 平成25年10月に奈良文化財研究所で行われた文化財担当者専門研修「古代・中世瓦調査過程」に参加の折、興道寺廃寺の概要について報告した際に瓦を実見していただき、コメントをいただいた。

〔引用・参考文献〕

- 網谷克彦・森川昌和「44 今市遺跡」『福井県史』資料編13 考古 1986 福井県
網谷克彦「松原遺跡の調査」『敦賀論叢 敦賀女子短期大学紀要』第10号 1995 敦賀女子短期大学
網谷克彦「第一部 考古編 第二章 美浜の纏文時代」『わかさ美浜町誌』第六巻 挖る・使う 2009a 美浜町
網谷克彦「福井県美浜町松原遺跡の土製模造品 一古墳時代後期の地域首長祭祀の一様相一」『敦賀論叢』第23号 2009b 敦賀短期大学
有吉重藏「国分寺と都市計画」『季刊考古学』第129号 2014 雄山閣
石井左近「芳春寺山経塚」『文化財調査報告』第2集 1952 石井左近
石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター「平成27年度発掘報告会 いしかわを掘る」 2016
市大樹「荷札木簡からみた「国一評一五十戸」制」『古代地方行政単位の成立と在地社会』 2009 独立行政法人奈良文化財研究所
市大樹「興道寺廃寺と周辺社会を舞台とした人々」『美浜町歴史シンポジウム記録集5 ここまで分かった! 興道寺廃寺 ~興道寺廃寺をとりまく地域、風景、人々~』 美浜町教育委員会編 2011
今津町史編集委員会編『今津町史』第1巻 古代・中世 1997
今津町史編集委員会編『今津町史』第4巻 資料 2003
入江文敏・森川昌和「獅子塚古墳」『探訪 日本の古墳(東日本編)』 1981 有斐閣
入江文敏「福井県一若狭地方」『古代学研究』105号 1984 古代学研究会
入江文敏「口背湖遺跡・興道寺窯跡・獅子塚古墳」『福井県史』資料編13 考古 1986a 福井県
入江文敏「若狭における古墳時代土器製塙についての覚え書き」『わかさのうみー紀要Iー』 1986b 福井県立若狭歴史民俗資料館
入江文敏「若狭地方における首長墓の動態」『福井県史』考古編 1986c 福井県
入江文敏「興道寺窯址」『福井県史』考古編 1986d 福井県
入江文敏「古墳時代土器製塙の分期と首長墓の動向 一主体部・副葬品の分析を通じてー」『横田健一先生吉希記念 文化史論叢(上)』 1987a 創元社

- 入江文敏「古墳時代土器製塩の画期と首長墓の動向」『横田健一先生古稀記念文化史論叢（上）』 1987 b 創元社
- 入江文敏「角杯形土器小考」『網干善教先生華甲記念考古学論集』 1988 網干善教先生華甲記念会
- 入江文敏「獅子塚古墳」『前方後円墳集成 中部編』 1992 山川出版社
- 入江文敏「北陸地方における最後の前方後円墳」『石川考古学研究会々誌』第 49 号 2006 石川考古学研究会
- 入江文敏「越前・若狭における製鉄遺跡の現況」森浩一先生尊寿記念論文集『古代学研究』第 180 号 2008 a 古代学研究会
- 入江文敏「若狭・越地域における古墳時代の実相」『古墳時代の実像』 2008 b 吉川弘文館
- 入江文敏「第一部 考古編 第四章 美浜の古墳時代」『わかさ美浜町誌』第六巻 捜る・使う 2009 美浜町
- 上田三平『越前及若狭地方の史蹟』 1974 歴史図書社
- 上田三平『福井県史蹟勝跡調査報告』第一冊 1922 福井県内務部
- 上原真人「第三章 資材帳が語る大安寺の不動産 二 寺院地外の食封・罷田・蔭地・庄がもたらしたもの』『古代寺院の資産と経営 一寺院資材帳の考古学』 2014 すいれん舎
- 宇野隆夫「北陸古代手工業生産の成立と変容 ～日本手工业史における意義をめぐって～」『日本史研究』330 号 1990 日本史研究会
- 宇野隆夫「律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として』 1991 桂書房
- 宇野隆夫「越における律令の生産構造の展開」『越と古代の北陸 古代王權と交流3』 1996 名著出版
- 近江の古代寺院刊行会『近江の古代寺院』 1989
- 榎村寛之「律令国家の祭祀と銭貨」『美浜町歴史シンポジウム記録集4 興道寺廃寺と古代銭貨 ～古代若狭の錢とマツリ～』 美浜町教育委員会編 2009
- 大橋信弥「本文編一、仏法の初め、茲より作れりー仏教の伝来と展開ー」『仏法の初め、茲より作れりー古墳から古代寺院へー』 2007 滋賀県立安土城考古博物館
- 大橋泰夫「地方官術と方位」『技術と交流の考古学』岡内三辰編 2013 同成社
- 大野康弘「第一部 考古編 第六章 わかさ美浜の城館跡」『わかさ美浜町誌』第六巻 捜る・使う 2009 美浜町
- 大森宏「第七章 若越の文学と仏教 第二節 古代の寺院 三 若狭の初期寺院』『福井県史』通史編1 原始・古代 1992 福井県
- 大森宏・森川昌和「福井県（若狭）」『日本土器製塩研究』 1994 青木書店
- 岡村秀典・菱田哲郎・高橋克壽「滋賀県雪野寺跡発掘調査の概要」『塑像出土古代寺院の総合的研究』 京都大学文学部考古学研究室 1992
- 小笠原好彦「第二部 近江の地域社会 七 日野川流域の白鳳寺院」
- 大脇潔「『瓦一瓦会』瓦当側面接合技法 一SR 技法一の軒丸瓦について」『三宅雄一氏・東鳥取小学校・東鳥取公民館寄贈瓦報告書』 2007 阪南市教育委員会
- 梶原義実「国分寺造営期の瓦供給体制 一西海道諸国の例からー」『考古学雑誌』第 86 卷第 1 号 梶原義実 2001 日本考古学会
- 梶原義実「山陽道・山陰道における平城宮系瓦の展開」『考古学研究』52 卷 1 号 2005 考古学研究会
- 梶原義実「瓦当文様の受容に関する一考察」『考古学研究』第 53 卷 3 号 2006 考古学研究会
- 梶原義実「手工業生産からみた奈良・平安期の地方社会」『名古屋大学文学部研究論集』158 2007 名古屋大学文学部
- 梶原義実「国分寺瓦の研究 一考古学からみた律令期生産組織の地方的展開ー」 2010 名古屋大学出版会
- 梶原義実「古代寺院の選地に関する考察 一近江地域を題材としてー」『考古学雑誌』第 95 卷第 4 号 梶原義実 2011 日本考古学会
- 梶原義実「瓦からみた北陸道の古代寺院」『美浜町歴史シンポジウム記録集 10 再論、若狭の古代寺院 ～遠敷郡の古代寺院 そして興道寺廃寺～』 美浜町教育委員会編 2016
- 加藤克郎「古代北陸道と出土銭貨」『美浜町歴史シンポジウム記録集4 興道寺廃寺と古代銭貨 ～古代若狭の錢とマツリ～』 美浜町教育委員会編 2009
- 門井直哉「評領域の成立基盤と編成過程」『人文地理』50 (1) 1998 人文地理学会
- 門井直哉「律令時代の郡家立地に関する一考察」『史林』第 83 卷 1 号 2000 史学研究会
- 門井直哉「興道寺廃寺から見た交通路」『美浜町歴史シンポジウム記録集 5 ここまで分かった！興道寺廃寺 ～興道寺廃寺をとりまく地域、風景、人々～』 美浜町教育委員会編 2011
- 門井直哉「領域からみた若狭国と三方郡のはじまり」『美浜町歴史シンポジウム記録集 7 若狭国と三方郡のはじまり

- ～若狭の古代社会のあり方から考える～』 美浜町教育委員会編 2013
- 門井直哉「若狭周辺における交通路の変遷」『美浜町歴史シンポジウム記録集8 古代若狭の交通、往来、地域社会』 美浜町教育委員会編 2014
- 門井直哉「興道寺廃寺からみた若狭国三方郡」『美浜町歴史シンポジウム記録集10 再論、若狭の古代寺院 ～遠敷郡の古代寺院、そして興道寺廃寺～』 美浜町教育委員会編 2016
- 金沢市教育委員会『石川県金沢市広坂廃寺（1丁目）II（古代・中世編、測量図編2）』 2005
- 亀田菜穂子「塑像と古代寺院」『網干善教先生華甲記念考古学論集』 1988 網干善教先生華甲記念会
- 亀田修一・亀田菜穂子「塑像と埴仮」『季刊考古学』34 1991 雄山閣出版
- 亀田修一・亀田菜穂子「塑像螺髮に関する観書」『網干善教先生古稀記念考古学論集』下巻 1998 網干善教先生古稀記念会
- 亀田修一「地方寺院の伽藍配置と造営過程」『飛鳥文化財論叢』 2005 納谷守幸氏追悼論文集刊行会
- 亀田修一「考古学からみた古代寺院と興道寺廃寺出土塑像」『美浜町歴史シンポジウム記録集6 『美浜町歴史シンポジウム記録集6 古代耳川流域に造仏師がやってきた！～興道寺廃寺出土塑像をめぐって～』 美浜町教育委員会編 2012
- 河原典史「わかさ美浜町におけるレクリエーションの変容 一海水浴から郷土食を活かした地域振興へ～」『観光の地理学』 立命館大学地理学教室編 2015 図書出版文理閣
- 岸本雅敏「古代国家と塩の流通」『古代の論点3 都市と工業と流通』 1998 小学館
- 岸本雅敏「特論 塩」『列島の古代史 ひと・もの・こと2 暮らしと生業』 2006 岩波書店
- 北村圭弘「6 近江の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究II 一山田寺式軒瓦の成立と展開ー』 2005 古代瓦研究会
- 北村圭弘「本文編二、律令国家の形成と地方寺院－近江を舞台として－」『仏法の初め、茲より作れり－古墳から古代寺院へ－』 2007 滋賀県立安土城考古博物館
- 北村安裕「日本古代における寺領の歴史的展開 一筑前国觀世音寺領把伎野を例として－」『歴史学研究』No.909 歴史学研究会 2013
- 北村安裕「『寺田』の成立 一大和国弘福寺を例として－」『史学雑誌』第121編3号 史学会 2015
- 櫛木謙周「第四章 律令制下の若越 第三節 都につながる北陸道 一 官道の役割」『福井県史』通史編1 原始・古代 1992 福井県
- 葛原秀雄「高島郡からみた北陸道と若狭との物流」『美浜町歴史シンポジウム記録集7 古代若狭の交通、往来、地域社会』 美浜町教育委員会編 2014
- 久保智康「北陸南西部における軒瓦の需要と伝播 一越前地方を中心として－」『古代』第97号 1993 早稲田大学考古学学会
- 久保智康「地方古代寺院の成立と展開 ～北陸そして若狭の古代寺院への視点～」『美浜町歴史シンポジウム記録集3 倉吉市教育委員会『史跡大原廃寺発掘調査報告書』』 1999
- 倉吉市教育委員会『史跡大御堂廃寺跡発掘調査報告書』 2001
- 郡家町教育委員会『土師百井廃寺跡発掘調査報告書II』 1980
- 興道寺廃寺と興道寺遺跡 ～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』 美浜町教育委員会編 2006
- 国府町教育委員会『史跡 楠本廃寺塔跡II・鳥取藩主池田家墓所』 2003
- 小森秀三「資料編・石川 4.弓削寺跡」『北陸の古代寺院 その源流と古瓦』北陸古瓦研究会編 1987 桂書房
- 小山靖憲「第六章 若越中世社会の形成 第三節 若越の莊園公領と地域社会 一 若越の中世の郡郷制」『福井県史』通史編1 原始・古代 1992 福井県
- 近藤康司「第八章 考古学からみた知識」『行基と知識集団の考古学』 2014 清文堂出版
- 榮原永遠男『日本古代錢貨流通史の研究』 1993 塙書房
- 榮原永遠男「古代錢貨と律令社会の人々」『美浜町歴史シンポジウム記録集4 興道寺廃寺と古代錢貨 ～古代若狭の錢とマツリ～』 美浜町教育委員会編 2009
- 榮原永遠男「史跡土塔の文字瓦の歴史的意義」『堺の宝 土塔の文字瓦』第二回史跡土塔講演会録 堀市 2011 a
- 榮原永遠男「興道寺廃寺の規模と関係氏族」『美浜町歴史シンポジウム記録集5 ここまで分かった！興道寺廃寺 ～興道寺廃寺をとりまく地域、風景、人々～』 美浜町教育委員会編 2011 b
- 榮原永遠男「日本古代錢貨研究」 2011c 清文堂出版
- 佐藤信「II 宮都の古代史 6 古代宮都と寺院 四 寺院の機能」『出土史料の古代史』 東京大学出版会 2002

- 滋賀県教育委員会『は場整備関係遺跡発掘調査報告VI-4』『第1章 愛知郡秦荘町軽野塔ノ塚遺跡』 1979
- 滋賀県教育委員会『一般国道161号線（西大津バイパス）建設に伴う穴太穴遺跡発掘調査報告書IV』 2001
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『大伴廃寺遺跡 今津警察官待機宿舎新築工事に伴う発掘調査報告書』 2004
- 芝田寿朗「野里と古代丹後道 一野里の所在とその周辺の古代寺院についてー」『紀要』第7号 1998 福井県立若狭歴史民俗資料館
- 芝田寿朗「第三章 古代街道と若狭」『福井県歴史の道調査報告書第3集 丹後街道II・周山街道』 福井県教育委員会 2003
- 芝田寿朗「序章 わかさ美浜の寺社の変遷 第二節 美浜の古代寺院と寺社の記録 一 美浜町の古代文化 二 美浜町の古代郷と式内社」『わかさ美浜町誌』第3巻 押む・描く 2005 美浜町
- 芝田寿朗「興道寺廃寺のその後」『美浜町歴史シンポジウム記録集3 興道寺廃寺と興道寺遺跡～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』 美浜町教育委員会編 2006
- 芝田寿朗「若狭多田寺 一地域から見た諸尊造立の背景ー」『若狭・多田寺の名宝』 龍谷大学・龍谷ミュージアム・朝日新聞社編 高野山真言宗石叟山多田寺 2013
- 島根県教育委員会『来美廃寺 「山代郷新造院」推定地発掘調査報告書』 2002
- 島根県教育庁文化財課『山城郷北新造院跡 出雲國山代郡遺跡群北新造院跡（来美廃寺）発掘調査報告書』 2007
- 杉山大晋「若狭国遠敷郡における官衙・集落遺跡」『条里制・古代都市研究』第24号 2009 条里制・古代都市研究会
杉山大晋「若狭の官衙・寺院などからみた交通と在地社会」『美浜町歴史シンポジウム記録集7 古代若狭の交通、往来、地域社会』 美浜町教育委員会編 2014
- 鈴木景二「都鄙間交通と在地秩序 一奈良・平安初期の仏教を素材としてー」『日本史研究』379 1994 日本史研究会
鈴木景二『「角鹿（教賀）の塩」再考』『美浜町歴史シンポジウム記録集7 若狭国と三方郡のはじまり～若狭の古代社会のあり方から考える～』 美浜町教育委員会編 2013
- 鈴木正信「豪族からみた若狭国と三方郡のはじまり」『美浜町歴史シンポジウム記録集7 若狭国と三方郡のはじまり～若狭の古代社会のあり方から考える～』 美浜町教育委員会編 2013
- 須田勉「第五章 寺院併合令と地方寺院の造営」『日本古代の寺院・官衙造営 一長屋王政権の国家構想ー』 2013 吉川弘文館
- 須原洋二「八世紀の郡司制度と在地」史学雑誌第105編第7号 1996 財団法人史学会
- 閑市教育委員会『国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺跡 講堂跡発掘調査 平成9・10年度』 2009
- 高島市教育委員会『日置前廃寺 瓦溜まりの調査』 2005 高島市教育委員会
- 高島市教育委員会『弘部野南海道遺跡 一南極地区的調査ー』 2010
- 高橋美久二「都と地方間の交通路政策」『国立歴史民俗博物館研究報告第134号 律令国家転換期の王權と都市（論考編）』 2007 国立歴史民俗博物館
- 高橋美久二「弥美駅家と古代の道」『平成12年度生涯学習講座 ふるさとむかしよもやま話レジュメ』 2000 美浜町教育委員会
- 高山市教育委員会『三仏寺廃寺発掘調査報告書』 2003
- 竹内亮「五十戸と知識寺院 ——鳥坂寺出土鎧書瓦の解釈からー」『季刊古代文化』第60卷第4号 2009 財団法人古代学会
- 竹内亮「古代の造寺と社会」『日本史研究』595号 2012 日本史研究会
- 竹内亮「地方の古代寺院と社会集団」『美浜町歴史シンポジウム記録集10 再論、若狭の古代寺院～遠敷郡の古代寺院、そして興道寺廃寺～』 美浜町教育委員会編 2016
- 武田久二「美浜町興道寺観音畠出土布目瓦について」『三方郡ふるさと昔話』 1976 関西電力株式会社美浜発電所
館野和己・櫛木謙周「第四章 律令制下の若越 第一節 地方のしくみと役人 二 若越の郷（里）」『福井県史』通史編1 原始・古代 1993 福井県
- 館野和己『日本古代の交通と社会』 1998 塙書房
- 館野和己「若狭・越前の塩と販」『日本海域歴史大系第1巻 古代篇I』 2005 小林昌二・小嶋芳孝編 清文堂
たつの市立埋蔵文化財センター編 『特別展「西播磨の古代寺院と蓬華文帶鶴尾」』 2007
- 田中完一・大森宏「二 各説 (六) 三方郡」『福井県史』資料編16下 条里復元図 1992 福井県
- 田中完一「第四章 律令制下の若越 第四節 開発と土地管理 四 嶺南地方の条里」『福井県史』通史編1 原始・

- 古代 1992 福井県
田辺常博「古代三方郡の寺院と集落そして生産遺跡」『美浜町歴史シンポジウム記録集3 興道寺廃寺と興道寺遺跡～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』 美浜町教育委員会編 2006
- 谷崎仁美「重弧紋軒平瓦の二大様相 一七世紀の寺院における瓦の需要とその背景ー」『ヒストリア』第247号 2014 大阪歴史学会
- 玉村幸一「若狭・越前の古代銭貨と出土遺跡」『美浜町歴史シンポジウム記録集4 興道寺廃寺と古代銭貨～古代若狭の錢とマツリ～』 美浜町教育委員会編 2009
- 寺島典人「塑像 一断片を中心にー」『月刊文化財』No.512 2006 大津市歴史博物館
- 寺島典人「大津市内の塑像について」『大津市歴史博物館研究紀要14』 2007 大津市歴史博物館
- 寺島典人「古代鮫の世界～興道寺廃寺出土塑像をめぐって～」『美浜町歴史シンポジウム記録集6 古代耳川流域に造形師がやってきた！～興道寺廃寺出土塑像をめぐって～』 美浜町教育委員会編 2012
- 東伯町教育委員会『斎尾庵寺跡範囲確認調査報告書』1990
- 鳥取県教育委員会『大寺廃寺発掘調査報告書 国道180号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告II』1967
- 鳥取県埋蔵文化財センター『岡益庵寺』2000
- 鳥取県立博物館『鳥取県立博物館所蔵古代寺院関係資料集』 2003
- 外岡慎一郎「第一章 美浜の山、里、川、海、湖をめぐる歴史 9 中世の荘園I 10 荘園の世界II 35 荘園の世界I 36 荘園の世界II」『わかさ美浜町誌』第一巻 ふりかえる美浜 2010年 美浜町
- 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅) 西津地域の地質』2002
- 独立行政法人奈良文化財研究所編『駅家と在地社会』 2004
- 独立行政法人奈良文化財研究所編『地方官衙と寺院 一郡衙周辺寺院を中心として』 研究報告資料 2005
- 独立行政法人奈良文化財研究所編『在地社会と仏教』 2006
- 独立行政法人奈良文化財研究所編『古代地方行政単位の成立と在地社会』 2009
- 中大輔「文献史料からみた古代若狭の交通路と駅家」『美浜町歴史シンポジウム記録集7 古代若狭の交通、往来、地域社会』 美浜町教育委員会編 2014
- 中司照世・美浜町教育委員会『帝釈寺古墳群調査概要』『若狭歴民だより』第2号 1993 福井県立若狭歴史民俗資料館
- 中原義史「11 北陸の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究II 一山田寺式軒瓦の成立と展開ー』 2005 古代瓦研究会編 奈良文化財研究所
- 中原義史「7 若狭出土の平城宮式軒丸瓦 6225型式」『第14回シンポジウム 8世紀の瓦づくりIII 一平城宮式軒瓦の展開I 6225-6663系』発表要旨 2014 古代瓦研究会編 奈良文化財研究所
- 中町教育委員会『多哥寺遺跡2 1980～1982年発掘調査報告書』奈良大学文学部考古学研究室編 1997
- 中村浩「福井県美浜町所在獅子塚古墳出土須恵器について」『MUSEUM』No.500 1993 東京国立博物館
- 永江寿夫「若狭地方の出土埴輪について」『古代文化』第571号 2008 財團法人古代學協会
- 奈良国立博物館編『飛鳥白鳳の古瓦』 1970
- 長門市教育委員会『長門深川廃寺III』 1985
- 仁科章「福井県製塙土器、漁ろう具出土遺跡」『海の生産用具』第19回研究集会追加資料 1986 埋蔵文化財研究会
- 仁科章「第一部 考古編 第三章 美浜の弥生時代」『わかさ美浜町誌』第六巻 掘る・使う 2009 美浜町
- 羽咋市教育委員会『寺家遺跡発掘調査報告書総括編』2010
- 箱崎和久「古代寺院の塔基壇」『文化財論叢』IV 2012 奈良文化財研究所
- 箱崎和久「国分寺と在地寺院の塔」『季刊考古学』第129号 2014 雄山閣
- 初村武寛・福山博章「資料二 獅子塚古墳出土の金属製品」『わかさ美浜町誌』第六巻 掘る・使う 2009 美浜町
- 島中清隆「南伊夜山銅鐸出土地」『第17回福井県発掘調査報告会資料 平成13年度に発掘調査された遺跡』 2002 福井県教育厅埋蔵文化財調査センター
- 浜田市教育委員会『下府廃寺跡 一平成元年度～平成4年度市内遺跡発掘調査概報ー』 1993
- 林部均「東日本出土の畿内土器」『考古学雑誌』第72号1号 1986 日本考古学会
- 馬場基「木簡に見る若狭と奈良」『掘り出された古代の高浜～平城京跡出土木簡からー』 2002 高浜町郷土資料館
- 馬場基「都城出土木簡が語る若狭の塩」『美浜町歴史シンポジウム記録集3 興道寺廃寺と興道寺遺跡～古代若狭の

- テラとムラそしてシオ～』 美浜町教育委員会編 2006
- 馬場基『古代の道と若狭の駅家』 2007 福井県立若狭歴史民俗資料館
- 菱田哲郎「III 考古学からみた古代社会の変容」『日本の時代史 5 平安京』 2002 吉川真司編 吉川弘文館
- 菱田哲郎「古代日本における仏教の普及」『考古学研究』第 52 卷 3 号 2005 考古学研究会
- 菱田哲郎「古代寺院と在地社会」『美浜町歴史シンポジウム記録集 3 興道寺廃寺と興道寺遺跡 ～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』 美浜町教育委員会編 2006
- 菱田哲郎『学術選書 25 諸文明の起源 14 古代日本国家形成の考古学』 2007 京都大学学術出版会
- 菱田哲郎「興道寺廃寺から見た寺院経営」『美浜町歴史シンポジウム記録集 5 ここまで分かった！興道寺廃寺 ～興道寺廃寺をとりまく地域、風景、人々～』 美浜町教育委員会編 2011
- 菱田哲郎「古代寺院と地域社会 ～交通機能を中心に～」『古代寺院と律令体制下の京都府 ～なぜそこに寺はあるのか～』 2013 京都府埋蔵文化財研究会
- 菱田哲郎「考古学からみた日本古代の仏教伽藍」『国際シンポジウム 日韓佛教寺院の伽藍と機能』 2015 京都府立大学文学部・古代寺院史研究会
- 飛騨市教育委員会『杉崎廃寺 2』 2012
- 廣嶋一良「72 寄戸遺跡」『福井県史』資料編 13 考古 1986 福井県
- 福井県教育委員会『重要遺跡緊急確認調査報告（I）』 1978
- 福井県教育委員会『重要遺跡緊急確認調査報告（II）』 1978
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『興道寺遺跡 一県営ふるさと農道緊急整備事業に伴う調査一』 2003
- 福井県埋蔵文化財調査センター『南伊夜山銅鐸出土地』 2005
- 福井県埋蔵文化財調査センター『芳春寺山中世墓群』 2006
- 福井県立若狭歴史民俗資料館『塩 一生涯の歴史三千年』 1989
- 福井県窯業誌刊行会『福井県窯業誌』 1983
- 古川登『福井県嶺南地方の埴輪』『六呂瀬山古墳群』 1988 福井県教育委員会
- 文化庁『史跡末松廃寺跡』 2009
- 本郷真綾『律令国家仏教の研究』 2005 法藏館
- 北陸古瓦研究会『北陸の古代寺院 その源流と古瓦』 1987
- 真柄甚松「第 4 章 北陸道 第 2 節 若狭国」『日本古代の交通路』II 1978 藤岡謙二編 大明堂
- 松葉竜司『第一部 考古編 第五章 美浜の古代社会に生きた人々』『わかさ美浜町誌』第六巻 捜る・使う 2009 美浜町
- 松葉竜司『シンポジウム III 古代社会の生業をめぐる諸問題 福井県の古代生業』『一般社団法人日本考古学協会 2011 年度桜木大会 研究発表資料集』 2011 日本考古学協会 2011 年度桜木大会実行委員会
- 松葉竜司『若狭湾沿岸地域における土器製塙と塩の流通』『第 16 回古代官衙・集落研究会報告書 塩の生産・流通と官衙・集落』 奈良文化財研究所 2013
- 松葉竜司『古代若狭の交通、往来、地域社会をめぐる課題』『美浜町歴史シンポジウム記録集 7 古代若狭の交通、往来、地域社会』 美浜町教育委員会編 2014
- 松葉竜司（共著）『第三談 塩・鉄、丹後国「國產品」の生産と流通』『丹後国遷政』与謝野町教育委員会 2015
- 松葉竜司『古代若狭の塩の生産と流通をめぐって』『美浜町歴史シンポジウム記録集 9 若狭の塩、再考 ～古代若狭の塩の生産と流通をめぐって～』 美浜町教育委員会編 2015
- 松葉竜司『若狭国遠敷郡における律令期の瓦生産 ～丸瓦・平瓦を中心に～』『館報 平成 25 年度』 福井県立若狭歴史民俗資料館 2015
- 松葉竜司『遠敷郡の古代寺院と興道寺廃寺』『美浜町歴史シンポジウム記録集 10 再論、若狭の古代寺院 ～遠敷郡の古代寺院、そして興道寺廃寺～』 美浜町教育委員会編 2016
- 三方町教育委員会『田名遺跡』 1988
- 三方町教育委員会『角谷遺跡 仏浦遺跡 江縄遺跡 牛屋遺跡』 1991
- 三方町教育委員会『市港遺跡・北寺遺跡』 1992
- 水野和雄『若狭周辺の古代寺院と出土瓦』『美浜町歴史シンポジウム記録集 3 興道寺廃寺と興道寺遺跡 ～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』 美浜町教育委員会編 2006
- 美浜町教育委員会『興道寺窯跡発掘調査概報』 1978

- 美浜町教育委員会『興道寺遺跡』 1998
- 美浜町教育委員会『平成10年度興道寺範囲確認試掘調査報告書』 1999
- 美浜町教育委員会『興道寺古墳群 県営中山間地域総合整備事業美方地区に伴う発掘調査報告書』 2002
- 美浜町教育委員会『美浜町内遺跡発掘調査報告書I』 2003
- 美浜町教育委員会『美浜町歴史シンポジウム記録集1 美浜出土銅鐸が語る～銅鐸と生きた人々の暮らし～』 2004
- 美浜町教育委員会『歴史シンポジウム記録集3 興道寺廃寺と興道寺遺跡～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』 2006
- 美浜町教育委員会『美浜町内遺跡発掘調査報告書II』 2007
- 美浜町教育委員会『歴史シンポジウム記録集4 興道寺廃寺と古代銭貨～古代若狭の錢とマツリ～』 2009
- 美浜町教育委員会『美浜町歴史シンポジウム記録集5 ここまで分かった！興道寺廃寺～興道寺廃寺をとりまく地域、風景、人々～』 2011a
- 美浜町教育委員会『国吉城址史跡調査報告書I』 2011b
- 美浜町教育委員会『美浜町歴史シンポジウム記録集6 古代耳川流域に造仏師がやってきた！～興道寺廃寺出土塑像をめぐって～』 2012
- 美浜町教育委員会『美浜町歴史シンポジウム記録集7 若狭国と三方郡のはじまり～若狭の古代社会のあり方から考える～』 2013
- 美浜町教育委員会『美浜町歴史シンポジウム記録集8 古代若狭の交通、往来、地域社会』 2014
- 美浜町教育委員会『美浜町歴史シンポジウム記録集9 若狭の塩、再考～古代若狭の塩の生産と流通をめぐって～』 2014
- 美浜町教育委員会『美浜町歴史シンポジウム記録集10 再論、若狭の古代寺院～遠敷郡の古代寺院そして興道寺廃寺～』 2015
- 美浜文化叢書刊行会『美浜文化叢書9 耳村誌』 2014
- 三舟隆之『日本古代地方寺院の成立』 2003 吉弘文館
- 三舟隆之『寺と新造院』『図説古代出雲と風土記世界』灌音能之編 1998 河出書房新社
- 望月精司『第5章 日本海地域の古代土器生産』『日本海域歴史大系』第2巻 古代篇II 2006 清文堂
- 森川昌和「若狭地方における製塙土器編年のまとめ」『福井県史』資料編13 考古編 1986 福井県
- 森下智惠『福井県』『古墳時代の海人集団を再検討する』資料集第I 分冊 2007 埋蔵文化財研究会・第56回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 森田悌「第二章 美浜の山、里、川、海、湖をめぐる歴史 5 人々の氏姓と郡領氏 6 律令時代の交通」『わかさ美浜町誌』第一巻 ふりかえる美浜 2010 美浜町
- 柳沢菜々『文献史料からみた古代若狭の生産』『美浜町歴史シンポジウム記録集9 若狭の塩、再考～古代若狭の塩の生産と流通をめぐって～』 美浜町教育委員会編 2015
- 山口充「美浜町内出土の後期弥生式土器と土器師」『福井考古学会会誌』第2号 1984 福井考古学会
- 山中草『焼き塩の貢納と消費』『日本古代都城の研究』 1997 柏書房
- 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』1994 塙書房
- 吉川真司『古代寺院の食堂』『律令国家史論集』 栄原永達男・西山良平・吉川真司編 2010 塙書房
- 吉川真司『文献から見た奈良平安時代の伽藍』『国際シンポジウム 日韓仏教寺院の伽藍と機能』 2015 京都府立大学文学部・古代寺院史研究会
- 吉永壮志「文字史料からみた若狭国と三方郡のはじまり」『美浜町歴史シンポジウム記録集7 若狭国と三方郡のはじまり～若狭の古代社会のあり方から考える～』 美浜町教育委員会編 2013
- 吉永壮志「古代若狭と膳臣」『続日本紀と古代社会 一創立六十周年記念一』 続日本紀研究会編 2014
- 吉野秋二『平安前期の広隆寺と周辺寺領』『古代文化』第64巻3号 古代學協会 2012
- 淀江町教育委員会『上淀廃寺』 1995
- 若狭地方文化財保護委員会『若州管内社寺由緒記上下 同寺社什物記全』 1958

報告書抄録

ふりがな	こうどうじはいじはくつちょうさほうくしょ							
書名	興道寺廃寺発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	美浜町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	松葉竜司							
編集機関	美浜町教育委員会							
所在地	〒919-1192 福井県三方郡美浜町郷市25-25 Tel0770-32-6708							
資料保管場所	美浜町教育委員会事務局 学校教育課 文化財室 〒919-1145 福井県三方郡美浜町金山14-1 Tel0770-32-0027							
発行年月日	西暦2016年(平成28年)3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
市町村	遺跡番号	北緯	東経					
こうどうじはいじ 興道寺廃寺 (興道寺遺跡)	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちこうどうじ 美浜町興道寺	18442	30071 (30073)	35度 35分 52秒	135度 56分 39秒	120820 - 121012	145.3	内容確認調査 (第14次調査)
こうどうじはいじ 興道寺廃寺 (興道寺遺跡)	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちこうどうじ 美浜町興道寺	18442	30071 (30073)	35度 35分 52秒	135度 56分 39秒	130924 - 131220	324.55	内容確認調査 (第15次調査)
こうどうじはいじ 興道寺廃寺 (興道寺遺跡)	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちこうどうじ 美浜町興道寺	18442	30071 (30073)	35度 35分 52秒	135度 56分 39秒	141001 - 141128	130.05	内容確認調査 (第16次調査)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
興道寺廃寺 (興道寺遺跡)	古代寺院 (集落跡)	白鳳～平安 (弥生～中世)	古代寺院に伴う 建物基壇など	須恵器、土師器、製塙土器、瓦、塑像蝶瓦、鐵製品、錢貨など	大きく2時期からなる古代寺院であることが判明			
要約	<p>興道寺廃寺の内容確認調査は平成14年(2002)に着手し、本報告の段階で第16次調査を終えた。本書に収録した調査は主に寺域の様相確認のために3年間において実施した第14～16次調査である。また、本書は興道寺廃寺発掘調査に関する総括報告書となっており、既往の調査にうち、重要な成果について再録した。</p> <p>興道寺廃寺は創建期、再建期と大きく2時期からなる古代寺院であることが判明し、特に8世紀後半から9世紀にかけての再建期の前後には連続的な堂塔の建て替えがあり、この時期には本格的な伽藍を備えた寺院であったことが明らかとなつた。また、寺域確認の調査において、おおむね寺域の範囲が明らかとなり、将来的に保存・活用を図るべき範囲を考える上で重要な成果となつた。</p>							



興道寺庵寺周辺空中写真（真上から撮影）

図版写真2



第14次調査1 トレンチ全景（北から撮影）



第14次調査1 トレンチ全景（西から撮影）



第14次調査1 トレンチ東壁土層断面



第14次調査1 トレンチ東端搅乱



SH140101 (第14次調査1 トレンチ)



SK140101 (第14次調査1 トレンチ)



SK140103 (第14次調査1 トレンチ)



SK140104 (第14次調査1 トレンチ)

図版写真3



P140101 (第14次調査1トレンチ)



P140102 (第14次調査1トレンチ)



P140104 (第14次調査1トレンチ)



P140105 (第14次調査1トレンチ)



P140111 (第14次調査1トレンチ)



P140122 (第14次調査1トレンチ)



P140123 (第14次調査1トレンチ)



P140124 (第14次調査1トレンチ)

図版写真 4



P140126 (第14次調査1トレンチ)



P140128 (第14次調査1トレンチ)



P140130 (第14次調査1トレンチ)



第14次調査2トレンチ東壁土層断面



第14次調査2トレンチ全景 (南から撮影)



地山面の落ち込み (第14次調査2トレンチ)

図版写真5



SK140201・SK140202（第14次調査2トレンチ）



SK140201（第14次調査2トレンチ）



SK140203（第14次調査2トレンチ）



第14次調査3トレンチ全景（北西から撮影）



第14次調査3トレンチ全景（西から撮影）



第14次調査3トレンチ北壁土層断面（西側）



第14次調査3トレンチ北壁土層断面（東側）

図版写真 6



地山面の落ち込み (第14次調査3トレンチ)



SB140301 (北から撮影) (第14次調査3トレンチ)



SB140301 (西から撮影) (第14次調査3トレンチ)



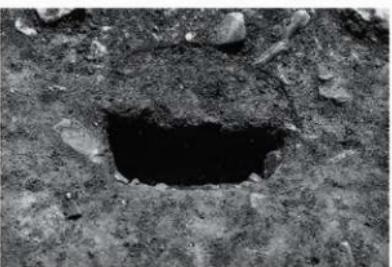
SB140301 貼床 (第14次調査3トレンチ)



SB140301 土層断面 (第14次調査3トレンチ)



SB140301 南辺・SB140301-P1 (第14次調査3トレンチ)



SB140301-P1 (第14次調査3トレンチ)



SB140301-P2 (第14次調査3トレンチ)



第14次調査4 トレンチ調査前現況



第14次調査4 トレンチ全景 (西から撮影)



第14次調査4 トレンチ全景 (東から撮影)



第14次調査4 トレンチ北壁土層断面



SK140401 (第14次調査4 トレンチ)



SK140401 遺物出土状況 (第14次調査4 トレンチ)



SK140402 遺物出土状況 (第14次調査4 トレンチ)

図版写真 8



SK140403 土層断面 (第14次調査4トレンチ)



SK140404 土層断面 (第14次調査4トレンチ)



P140409 (第14次調査4トレンチ)



第14次調査5トレンチ調査前現況



第14次調査5トレンチ全景 (西から撮影)



第14次調査5トレンチ全景 (東から撮影)



第14次調査5トレンチ南壁土層断面



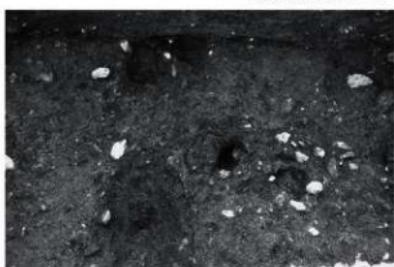
第14次調査5トレンチ断削土層断面



SK140501・SK140502・P150504・P150505
(第14次調査5トレンチ)



SK140501 土層断面(第14次調査5トレンチ)



SK140503・P150501・P150502・P150503
(第14次調査5トレンチ)



SK140503 土層断面(第14次調査5トレンチ)



P140501 土層断面(第14次調査5トレンチ)

図版写真 10



第14次調査6トレンチ全景(南から撮影)



第14次調査6トレンチ全景(北から撮影)



第14次調査6トレンチ東壁土層断面



第14次調査6トレンチ断削土層断面



第15次調査1トレンチ全景(西から撮影)



第15次調査1トレンチ全景(東から撮影)



第15次調査1 トレンチ北壁土層断面



SK150101 (第15次調査1 トレンチ)



SK150102 (第15次調査1 トレンチ)



SK150103・SK150105 (第15次調査1 トレンチ)



SK150104 (第15次調査1 トレンチ)



SK150104 土層断面・遺物出土状況 (第15次調査1 トレンチ)



P150101・P150102 (第15次調査1 トレンチ)



P150111～P150114 (第15次調査1 トレンチ)

図版写真 12



P150130・P150131 (第15次調査1トレンチ)



第15次調査2トレンチ全景1 (西から撮影)



第15次調査2トレンチ全景2 (西から撮影)



第15次調査2トレンチ (東から撮影)



第15次調査2トレンチ南壁土層断面



SK150201 (第15次調査2トレンチ)



SK150204 (第15次調査2トレンチ)



SK150204・SK150205 (第15次調査2トレンチ)

図版写真 13



SK150204 土層断面 (第15次調査2トレンチ)



SK150205 土層断面 (第15次調査2トレンチ)



SK150206・P150234・P150235・P150236 (第15次調査2トレンチ)



P150230 (第15次調査2トレンチ)



P150232 (第15次調査2トレンチ)



第15次調査3 トレンチ全景 (西から撮影)



第15次調査3 トレンチ全景 (東から撮影)



第15次調査3 トレンチ西端

図版写真 14



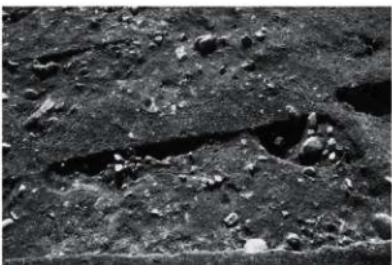
第15次調査3トレンチ東端



第15次調査3トレンチ南壁土層断面



SD150301・SK150305・SK150306(第15次調査3トレンチ)



SK150303・SK150304(第15次調査3トレンチ)



SK150303 土層断面(第15次調査3トレンチ)



SK150304 土層断面(第15次調査3トレンチ)



SK150305 土層断面(第15次調査3トレンチ)



SK150306 土層断面(第15次調査3トレンチ)



SK150307 (第15次調査3トレンチ)



SK150307 土層断面 (第15次調査3トレンチ)



第15次調査4トレンチ全景 (南から撮影)



第15次調査4トレンチ全景 (北から撮影)



第15次調査4トレンチ南側



第15次調査4トレンチ東壁土層断面

図版写真 16



SD150401 (第15次調査4トレンチ)



SD150401 土層断面 (第15次調査4トレンチ)



SD150402 (第15次調査4トレンチ)



SD150402 土層断面 (第15次調査4トレンチ)



SD150402 碓・遺物出土状況 1 (第15次調査4トレンチ)



SD150402 碓・遺物出土状況 2 (第15次調査4トレンチ)



SK150401・SK150402・P150401～P150406
(第15次調査4トレンチ)



第15次調査5トレンチ全景 (北から撮影)



第15次調査5トレンチ東壁・断割土層断面
(第15次調査5トレンチ)



整地層・SB150501 (第15次調査5トレンチ)



整地層断割土層断面 (第15次調査5トレンチ)



SB150501 (北から撮影) (第15次調査5トレンチ)



SB150501 (北から撮影) (第15次調査5トレンチ)



SB150501 焼土検出状況 (第15次調査5トレンチ)



SB150501-P1 (第15次調査5トレンチ)



SB150501-P1 土層断面 (第15次調査5トレンチ)

図版写真 18



SB150501-P2・SB150501-P3 (第15次調査5トレンチ)



SD150501・P150508 (第15次調査5トレンチ)



SD150501 土層断面 (第15次調査5トレンチ)



SK150501 (第15次調査5トレンチ)



SK150502 遺物出土状況 (第15次調査5トレンチ)



第16次調査1 トレンチ全景 (北から撮影)



第16次調査1 トレンチ南側 (南から撮影)



第16次調査1 トレンチ東壁土層断面



SA160101 (第16次調査1トレンチ)



SK160104 土層断面 (第16次調査1トレンチ)



SK160106 土層断面 (第16次調査1トレンチ)



SK160107 土層断面 (第16次調査1トレンチ)



SK160108 土層断面 (第16次調査1トレンチ)



SK160109 土層断面 (第16次調査1トレンチ)



P160105 土層断面 (第16次調査1トレンチ)



P160106 土層断面 (第16次調査1トレンチ)

図版写真 20



P160130 土層断面 (第16次調査1トレンチ)



第16次調査2トレンチ全景 (西から撮影)



第16次調査2トレンチ北壁土層断面



SD160201・SD160202 (第16次調査2トレンチ)



SD160201 (第16次調査2トレンチ)



SD160202-1 (第16次調査2トレンチ)



SD160202-2 (第16次調査2トレンチ)



SD160202-3 (第16次調査2トレンチ)



SD160202-4 (第16次調査2トレンチ)



SD160202 土層断面 1 (第16次調査2トレンチ)



SD160202 土層断面 2 (第16次調査2トレンチ)



SD160202 土層断面 3 (第16次調査3トレンチ)



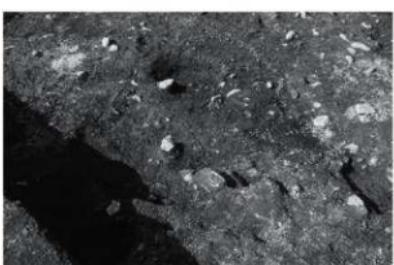
SD160202 土層断面 4 (第16次調査2トレンチ)



SD160202 上層 (第16次調査2トレンチ)



P160201 (第16次調査2トレンチ)



P160204・P160205～P160207 (第16次調査2トレンチ)

図版写真 22



P160208 (第16次調査2 トレンチ)



第16次調査3 トレンチ全景（西から撮影）



第16次調査3 トレンチ全景（東から撮影）



第16次調査3 トレンチ西側



第16次調査3 トレンチ南壁土層断面



第16次調査3 トレンチ北壁土層断面



P160301・P160302 (第16次調査3 トレンチ)



P160304 (第16次調査3 トレンチ)



水田畔 1 (第16次調査3トレンチ)



水田畔 2 (第16次調査3トレンチ)

図版写真 24



SK140101 出土須恵器杯 (第 46 図 1)



P140106 出土遺物 (第 46 図 2)



第 14 次調査 3 トレンチ堆積層出土遺物 (第 50 図 1~3)



SB140301 出土遺物 (第 50 図 4・5)



SK140401 出土遺物 (第 53 図 1・2)



SK140403 出土遺物 (第 53 図 3)



P140409 出土遺物 (第 53 図 4)



SK140402 出土遺物



SK150104 出土須恵器杯（第62図1）



SK150104 出土遺物（第62図2）



SK150102 出土遺物



P150115 出土遺物



P150117 出土遺物



P150118 出土遺物



P150130 出土遺物（第62図3）



SD150201 出土遺物



SK150201 出土遺物



SK150203 出土遺物（第66図1）

図版写真 26



SK150204 出土須恵器杯（第 66 図 2）



SK150204 出土遺物



SK150205 出土遺物（第 66 図 3・4）



SK150206 出土遺物



P150223 出土遺物（第 66 図 5）



P150225 出土遺物（第 66 図 6）



P150227 出土遺物



P150229 出土遺物



SD150402 出土遺物



SB150501 焼土出土遺物（第 74 図 2）



SB150501-P3 出土遺物



SB150501-P4 出土遺物



SB150501 出土遺物（第 74 図 1）

図版写真 28



SD150502 出土遺物



SK150501 出土遺物（第 74 図 3・4）



SK150502 出土遺物（第 74 図 5）



第 15 次調査 5 トレンチ整地土（断面）出土遺物



P150503 出土遺物（第 74 図 6）



SK160109 出土遺物



P160130 出土遺物（第 78 図 1）



SD160201 出土遺物（第 81 図 1）



P160207 出土遺物



SD160202 出土遺物（第 81 図 2）

図版写真 30



第1次調査2 トレンチ全景(北から撮影)



第1次調査3 トレンチ全景(西から撮影)



第1次調査2 トレンチ西壁土層断面



SB010201 (第1次調査2 トレンチ)



SB010201 床面 (第1次調査2 トレンチ)



SB010201 床面出土製塙土器 (第1次調査2 トレンチ)



創建期塔基壇南東隅部・SK010201（第1次調査2トレンチ）



創建期塔基壇南東隅部（第1次調査2トレンチ）



創建期塔基壇外装（第1次調査2トレンチ）



創建期塔基壇縁辺溝土層断面（第1次調査2トレンチ）



SA010201（第1次調査2トレンチ）



SK010201 土層断面（第1次調査2トレンチ）



SK010201 遺物出土状況（第1次調査2トレンチ）

図版写真 32



SD010301 (第1次調査3トレンチ)



SD010301 土層断面 (第1次調査3トレンチ)



第2次調査2トレンチ全景 (東から撮影)



第2次調査2トレンチ全景 (西から撮影)



SK020101・SK020102 検出状況 (第2次調査1トレンチ)



創建期塔基壇西辺検出状況（第2次調査2トレンチ）



創建期塔基壇西辺瓦出土状況1（第2次調査2トレンチ）



再建期塔基壇西辺整地層（第2次調査2トレンチ）



創建期塔基壇西辺瓦出土状況2（第2次調査2トレンチ）



再建期塔基壇西辺整地層・堆積層（第2次調査2トレンチ）

図版写真 34



SK020103 (第2次調査2トレンチ)



P020204 (第2次調査2トレンチ)

SD020202・SD020204 (第2次調査2トレンチ)



第2次調査2トレンチ東側全景 (南から撮影)



第2次調査3トレンチ東側全景 (北から撮影)



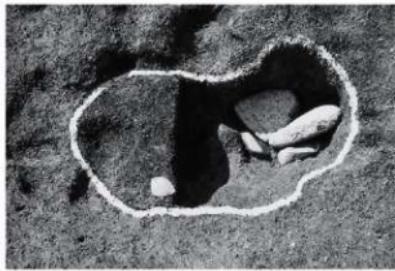
SK030201 (SK030401) (第3次調査2・4トレンチ)



P030303・P030305・P030306 (第3次調査3トレンチ)



SD030401 (第3次調査4トレンチ)



P030305 (第3次調査3トレンチ)



第4次調査4トレンチ全景 (南から撮影)

図版写真 36



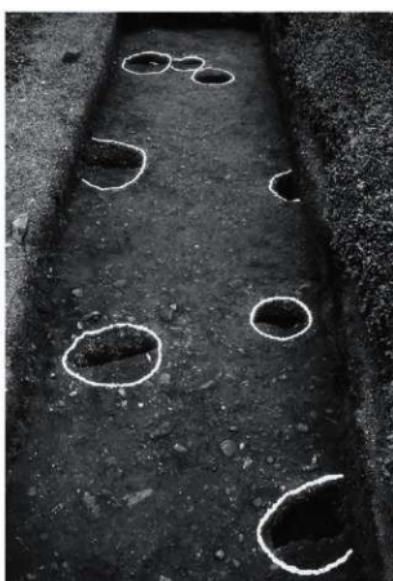
P030306 (第3次調査3 トレンチ)



第4次調査4 トレンチ東壁土層断面



第4次調査5 トレンチ西側 (南から撮影)



P040601～P040607 (第4次調査6 トレンチ)



第4次調査7 トレンチ全景 (東から撮影)



再建期塔基壇西辺・整地層（第4次調査7トレンチ）



創建期塔基壇東辺瓦溜まり・再建期塔基壇整地層
(第4次調査7トレンチ)



創建期塔基壇西辺瓦溜まり・再建期整地層土層断面
(第4次調査7トレンチ)



創建期塔基壇西辺瓦溜まり（第4次調査7トレンチ）



SK040801・P040801・P040802（第4次調査8トレンチ）



第4次調査10トレンチ全景（東から撮影）

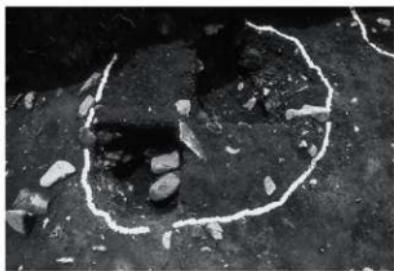
図版写真 38



SD041001 (第4次調査 10 トレンチ)



SD041001 土層断面 (第4次調査 10 トレンチ)



P041001 (第4次調査 10 トレンチ)



P041005 (第4次調査 10 トレンチ)



第5次調査区調査区全景 (西から撮影)



第5次調査区南壁土層断面



第5次調査区北壁土層断面



第6次調査1 トレンチ全景（南から撮影）



SK060103（第6次調査1 トレンチ）



SK060103 稲出土状況（第6次調査1 トレンチ）



SK060103 土層断面（第6次調査1 トレンチ）



再建期金堂基壇東辺（第6次調査2 トレンチ）



再建期金堂基壇東辺瓦溜まり（第6次調査2 トレンチ）

図版写真 40



再建期金堂基壇東辺外装（第6次調査2トレンチ）



創建期金堂基壇東辺瓦溜まり1（第6次調査2トレンチ）



創建期金堂基壇東辺瓦溜まり2（第6次調査2トレンチ）



再建期金堂基壇東辺整地層除去状況（第6次調査2トレンチ）



再建期金堂基壇西辺1（第6次調査3トレンチ）



再建期金堂基壇西辺2（第6次調査3トレンチ）



再建期金堂基壇西辺外装（第6次調査3トレンチ）

図版写真 41



再建期金堂基壇西辺瓦溜まり 1 (第6次調査3トレンチ)



再建期金堂基壇西辺瓦溜まり 2 (第6次調査3トレンチ)



再建期金堂基壇西辺瓦溜まり 3 (第6次調査3トレンチ)



再建期金堂基壇北辺削平痕跡 1 (第6次調査3トレンチ)



再建期金堂基壇北辺削平痕跡 2 (第6次調査3トレンチ)



再建期金堂基壇北辺断ち割り (第6次調査3トレンチ)



第6次調査4トレンチ全景 (南から撮影)



第6次調査5トレンチ全景 (西から撮影)

図版写真 42



第6次調査6 ブランチ全景（西から撮影）



SD060601 土層断面（第6次調査6 ブランチ）



SH060701 (第6次調査7 ブランチ)



P060701 土層断面（第6次調査7 ブランチ）



第7次調査1 ブランチ土層断面



第7次調査2 ブランチ全景（東から撮影）



第7次調査2 ブランチ全景（東から撮影）



SD070202 (第7次調査2 ブランチ)



SK070201 (第7次調査2トレンチ)



SD070201 瓦出土状況 (第7次調査2トレンチ)



第7次調査3トレンチ全景 (北から撮影)



創建期塔基壇北辺瓦溜まり土層断面 (第7次調査3トレンチ)



創建期塔基壇北辺瓦溜まり 1 (第7次調査3トレンチ)



創建期塔基壇北辺瓦溜まり 2 (第7次調査3トレンチ)



再建期金堂基壇東辺瓦溜まり (第7次調査4トレンチ)

図版写真 44



再建期金堂基壇東辺外装抜き痕 (第7次調査4トレンチ)



再建期金堂基壇東辺削平痕跡 (第7次調査4トレンチ)



瓦出土状況 (第7次調査5トレンチ)



第8次調査3トレンチ全景 (南から撮影)



再建期中門基壇南辺外装 (第8次調査3トレンチ)



再建期中門基壇南辺遺物出土状況 1 (第8次調査3トレンチ)



再建期中門基壇西辺遺物出土状況 (第8次調査3トレンチ)



再建期中門基壇南辺遺物出土状況 2 (第8次調査3トレンチ)



再建期中門基壇南辺西辺銭貨出土状況 (第8次調査3トレンチ)

図版写真 46



再建期中門基壇北辺 (第8次調査3トレンチ)



P080302 (第8次調査3トレンチ)



再建期中門基壇南辺断ち割り (第8次調査3トレンチ)



再建期中門基壇北辺断ち割り (第8次調査3トレンチ)



瓦出土状況 (第8次調査4トレンチ)



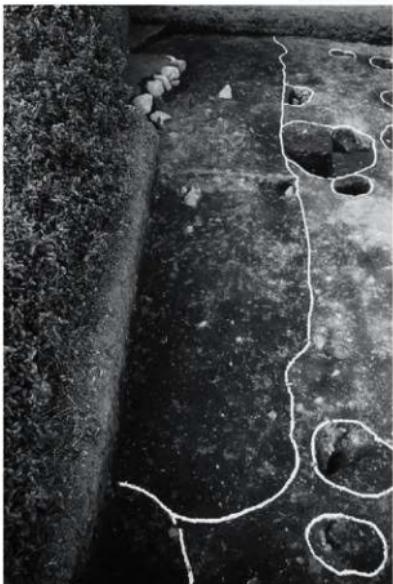
再建期中門基壇西側堆積層遺物出土状況(第9次調査1トレンチ)



再建期中門基壇西側整地面(第9次調査1トレンチ)



再建期中門基壇西側整地面断面
(第9次調査1トレンチ)



SK090204(第9次調査2トレンチ)



第9次調査2トレンチ全景(南から撮影)



再建期中門基壇北東隅部(第9次調査2トレンチ)



再建期中門基壇北東隅部東辺石積み(第9次調査2トレンチ)



第9次調査3トレンチ全景(北から撮影)

図版写真 48



第9次調査4トレンチ全景(北から撮影)



SB090401(第9次調査4トレンチ)



SB090401 土層断面(第9次調査4トレンチ)



SB090401 遺物出土状況(第9次調査4トレンチ)



SA090401(第9次調査4トレンチ)



SK090401 土層断面(第9次調査4トレンチ)



第9次調査5トレンチ全景(東から撮影)



SK090601(第9次調査6トレンチ)



第9次調査 7・8 トレンチ全景(西から撮影)



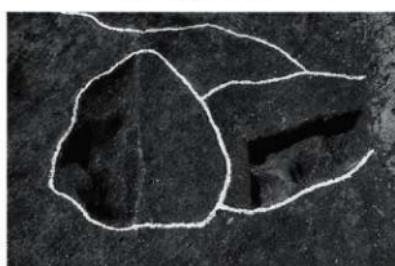
第9次調査 8 トレンチ全景(東から撮影)



SB090801 (北から撮影) (第9次調査 8 トレンチ)



SB090802(第9次調査 8 トレンチ)



SB090802-SK1・SK2 (第9次調査 8 トレンチ)



SK090801～SK090805 (第9次調査 8 トレンチ)

図版写真 50



SK090801 土層断面(第9次調査8トレンチ)



SK090802 土層断面(第9次調査8トレンチ)



SK090803(第9次調査8トレンチ)



SK090803 確検出状況(第9次調査8トレンチ)



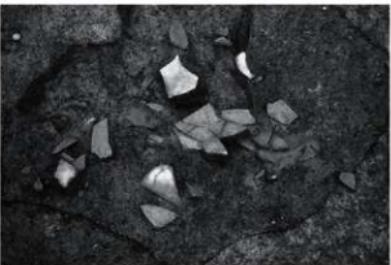
SK090804 土層断面(第9次調査8トレンチ)



SK090805 土層断面(第9次調査8トレンチ)



第9次調査9トレンチ南側(東から撮影)



SK090901 遺物出土状況(第9次調査9トレンチ)



第9次調査 11 トレンチ西側(西から撮影)



第9次調査 11 トレンチ東側(東から撮影)



第10次調査 1 トレンチ北側(南から撮影)



SB100101・SB100201(第10次調査 1・2 トレンチ)



SB100201(第10次調査 2 トレンチ)



SB100101 土層断面(第10次調査 1 トレンチ)

図版写真 52



SB100201-SD1(第10次調査2トレンチ)



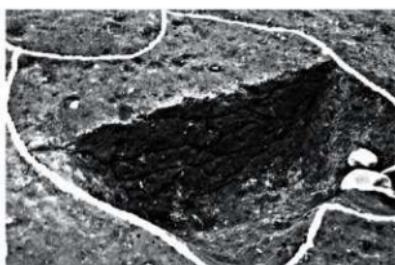
SB100201 床面(第10次調査2トレンチ)



SB100102(第10次調査1トレンチ)



SK100101・SK100102・SK100106(第10次調査1トレンチ)



SK100103 土層断面(第10次調査1トレンチ)



SK100104 土層断面(第10次調査1トレンチ)



第10次調査3トレンチ全景(東から撮影)



第10次調査4トレンチ全景(西から撮影)



SD100401(第10次調査4トレンチ)



再建期金堂基壇南北整地面断面(SD100401)南北土層断面1
(第10次調査4トレンチ)



再建期金堂基壇南北整地面断面(SD100401)南北土層断面2
(第10次調査4トレンチ)



再建期金堂基壇東辺1(第10次調査5トレンチ)



再建期金堂基壇東辺2(第10次調査05トレンチ)



創建期・再建期金堂基壇断面東西土層断面1
(第10次調査5トレンチ)



創建期・再建期金堂基壇断面東西土層断面2
(第10次調査5トレンチ)

図版写真 54



再建期金堂基壇北西整地面(第10次調査6トレンチ)



再建期金堂基壇北西石列(第10次調査6トレンチ)



第10次調査7トレンチ全景(東から撮影)



SH100901・SA100901(第10次調査9トレンチ)



SD100901・SD100902(第10次調査9トレンチ)



第10次調査10・11トレンチ東側(北から撮影)



第10次調査10トレンチ南側(東から撮影)



SH101001・SH101101(第10次調査10・11トレンチ)



SH101101 柱穴並び(第10次調査11トレンチ)



P101035(第10次調査10トレンチ)



再建期中門基壇西側擾乱坑(第11次調査1トレンチ)



SD110101 検出状況(第11次調査1トレンチ)



SD110101(第11次調査1トレンチ)



SD110101・再建期整地面断割南北土層断面(第11次調査1トレンチ)



再建期南門基壇西側整地面断割南北土層断面
(第11次調査1トレンチ)

図版写真 56



第11次調査2トレンチ西側(北から撮影)



第11次調査2トレンチ南側(東から撮影)



再建期中門基壇南北土層断面(第11次調査2トレンチ)



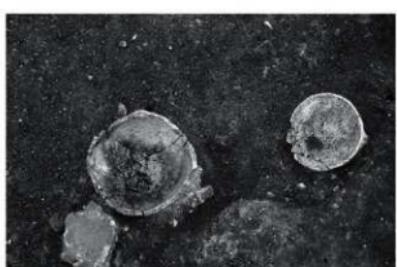
再建期中門基壇北側東西土層断面(第11次調査2トレンチ)



SK110201(第11次調査2トレンチ)



SK110202(第11次調査2トレンチ)



SK110202遺物出土状況(第11次調査2トレンチ)



第11次調査3トレンチ全景(南から撮影)



SD110301 南北土層断面(第11次調査3トレンチ)



SK110301 土層断面(第11次調査3トレンチ)



再建期塔基壇西辺 1 (第11次調査4トレンチ)



再建期塔基壇西辺 2 (第11次調査4トレンチ)



創建期・再建期塔基壇(第11次調査3・4トレンチ)

図版写真 58



再建期塔基壇西辺 3 (第11次調査3・4トレンチ)



P110402・P110406(第11次調査4トレンチ)



P110409(第11次調査4トレンチ)



SK110401(第11次調査4トレンチ)



創建期・再建期塔基壇東辺 (第11次調査4トレンチ)



再建期塔基壇東側堆積層土層断面 (第11次調査4トレンチ)



創建期・再建期塔基壇東西土層断面 1 (第11次調査4トレンチ)



創建期・再建期塔基壇東西土層断面 2 (第11次調査4トレンチ)



創建期・再建期塔基壇東西土層断面 3 (第 11 次調査 4 トレンチ)



第 11 次調査 5 トレンチ全景(北から撮影)



再建期金堂基壇北側堆積層遺物出土状況 1

(第 11 次調査 5 トレンチ)



再建期金堂基壇北側堆積層遺物出土状況 2

(第 11 次調査 5 トレンチ)



再建期金堂基壇北側堆積層遺物出土状況 3

(第 11 次調査 5 トレンチ)



再建期金堂基壇北側堆積層遺物出土状況 4

(第 11 次調査 5 トレンチ)



再建期金堂基壇北側堆積層土層断面・遺物出土状況 5

(第 11 次調査 5 トレンチ)



再建期金堂基壇北側堆積層塑像螺髮出土状況 1

(第 11 次調査 5 トレンチ)

図版写真 60



再建期金堂基壇北面階段(第11次調査5トレンチ)



再建期金堂基壇北側整地面断割南北土層断面
(第11次調査5トレンチ)



第11次調査6トレンチ全景(西から撮影)



再建期金堂基壇西辺(第11次調査6トレンチ)



第11次調査7トレンチ全景(南から撮影)



SD110701(第11次調査7トレンチ)



SD110701 土層断面(第11次調査7トレンチ)



SD110701 遺物出土状況(第 11 次調査 7 トレンチ)



第 11 次調査 8 トレンチ全景(南から撮影)

第 11 次調査 10 トレンチ全景(南から撮影)



第 11 次調査 11・12 トレンチ全景(南から撮影)

図版写真 62



再建期南門基壇 1 (第11次調査 11トレンチ)



再建期南門基壇 2 (第11次調査 11トレンチ)



再建期南門基壇礫層(第11次調査11トレンチ)



再建期南門基壇検出状況(第11次調査11トレンチ)



再建期南門基壇北側搅乱坑(第11次調査11トレンチ)



再建期南門基壇断面南北土層断面(第11次調査11トレンチ)



再建期南門基壇北西隅部石積み1(第11次調査11トレンチ)

図版写真 64



再建期南門基壇北西隅部石積み 2 (第11次調査 11トレンチ)



再建期南門基壇北西隅部石積み 3 (第11次調査 11トレンチ)



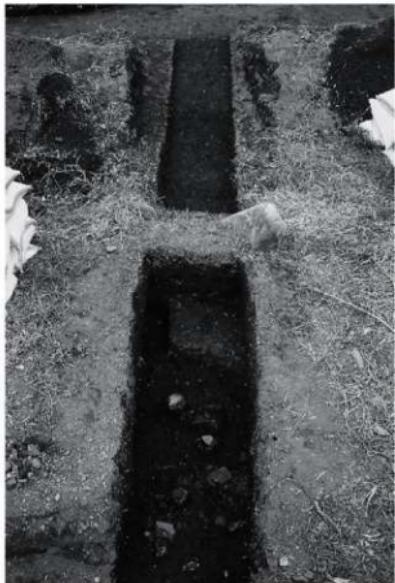
SD111201 土層断面(第11次調査 12トレンチ)



創建期講堂基壇東辺(第11次調査 13トレンチ)



創建期講堂基壇西辺付近(第11次調査 13トレンチ)



創建期講堂基壇南辺(第11次調査5・13トレンチ)



SD111101 土層断面(第11次調査13トレンチ)



第12次調査1 トレンチ全景(北から撮影)



再建期中門基壇北西側整地面断面南北土層断面

(第12次調査1 トレンチ)



第12次調査2 トレンチ全景(北から撮影)



再建期南門基壇北西隅部検出状況(第12次調査2トレンチ)



再建期南門基壇南西隅部(第12次調査2～4トレンチ)

図版写真 66



再建期南門基壇西辺 1 (第 12 次調査 2~4 トレンチ)



再建期南門基壇西辺 2 (第 12 次調査 2 トレンチ)



再建期南門基壇北西隅部石積み 1 (第 12 次調査 2 トレンチ)



再建期南門基壇北西隅部石積み 2 (第 12 次調査 2 トレンチ)



再建期南門基壇北西隅部石積み 3 (第 12 次調査 2 トレンチ)



再建期南門基壇西辺断面東西土層断面 (第 12 次調査 2 トレンチ)



再建期南門基壇南東側整地面断割東西土層断面 1
(第12次調査4トレンチ)



再建期南門基壇南東側整地面断割東西土層断面 2
(第12次調査4トレンチ)



P120406 土層断面(第12次調査4トレンチ)



第12次調査5トレンチ全景(北から撮影)



SK120501 土層断面(第12次調査5トレンチ)



第12次調査6トレンチ全景(北から撮影)

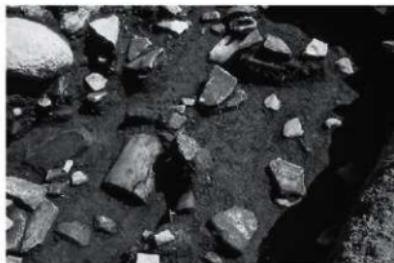


再建期金堂基壇北面階段・再建期講堂基壇南辺位置関係
(第12次調査6・7トレンチ)



第12次調査7トレンチ全景(南から撮影)

図版写真 68



再建期金堂基壇北側堆積層塑像螺旋出土状況
(第12次調査7トレンチ)



再建期講堂基壇南辺(第12次調査7トレンチ)



再建期講堂基壇南辺断削南北土層断面1
(第12次調査7トレンチ)



再建期講堂基壇南辺断削南北土層断面2
(第12次調査7トレンチ)



創建期講堂基壇北辺(第12次調査8トレンチ)



創建期講堂基壇北辺断削南北土層断面1
(第12次調査8トレンチ)



創建期講堂基壇北辺断削南北土層断面2
(第12次調査8トレンチ)



SD120901 出土状況(第12次調査9トレンチ)



第12次調査9トレンチ全景(西から撮影)



SD120901(第12次調査9トレンチ)



SD120901 土層断面(第12次調査9トレンチ)



再建期南門基壇南方整地面断割南北土層断面
(第13次調査1トレンチ)



再建期南門基壇南方整地面断割東西土層断面
(第13次調査1トレンチ)



第13次調査2トレンチ全景(南西から撮影)

図版写真 70



第13次調査1 トレンチ全景(北から撮影)



第13次調査1 トレンチ全景(東から撮影)



再建期講堂基壇南西隅部(第13次調査2 トレンチ)



再建期講堂基壇西辺土層断面(第13次調査2トレンチ)



創建期・再建期講堂基壇西辺断削東西土層断面(第13次調査2トレンチ)



第13次調査3トレンチ全景(南から撮影)

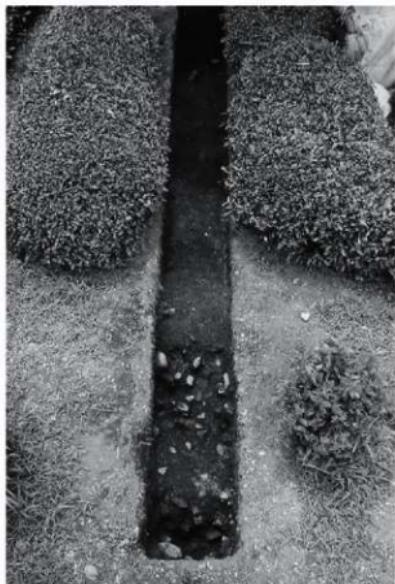


SD130301(第13次調査3トレンチ)

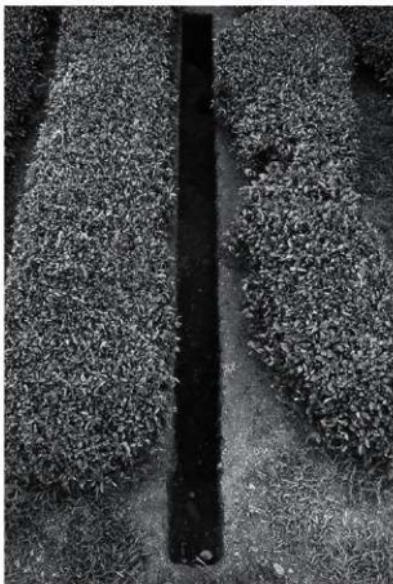


SD130301 土層断面(第13次調査3トレンチ)

図版写真 72



第13次調査4トレンチ全景(北から撮影)



第13次調査6トレンチ全景(北から撮影)



第7次調査 2 トレンチ整地層出土軒丸瓦



再建期金堂基壇 (SB110501) 北側堆積層出土軒丸瓦



再建期金堂基壇 (SB060201) 東辺瓦溜まり出土軒丸瓦



再建期塔基壇 (SB040702) 西辺整地層出土軒丸瓦



再建期塔基壇 (SB020201) 西辺堆積層出土軒丸瓦



第6次調査 5 トレンチ表土出土軒丸瓦



再建期金堂基壇 (SB110501)
北側堆積層出土軒丸瓦



再建期金堂基壇 (SB120601)
北側堆積層出土軒丸瓦

図版写真 74



再建期金堂基壇 (SB100502)
東側堆積層出土軒丸瓦



第2次調査 2 トレンチ表土出土軒丸瓦



再建期金堂基壇 (SB110501)
北側堆積層出土軒丸瓦



再建期塔基壇 (SB020201) 西辺堆積層出土軒平瓦



SK060103 出土軒平瓦



再建期金堂基壇 (SB110501) 北側堆積層出土軒平瓦



再建期金堂基壇 (SB100402)
南西側堆積層出土軒平瓦



再建期塔基壇 (SB020201) 西辺堆積層出土軒平瓦



再建期金堂基壇（SB060201）東辺瓦溜まり出土軒平瓦



再建期金堂基壇（SB060201）東辺瓦溜まり
出土軒平瓦



再建期金堂基壇（SB060201）東辺瓦溜まり
出土軒平瓦



再建期金堂基壇（SB060201）東辺瓦溜まり
出土軒平瓦



再建期金堂基壇北西側堆積層出土軒平瓦
(第10次調査6トレンチ)



再建期中門基壇（SB090101）西側整地層（断割部分）出土軒平瓦



再建期金堂基壇（SB100402）南西側堆積層出土軒平瓦

図版写真 76



再建期中門基壇(SB090101)西側整地層出土丸瓦



再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層出土丸瓦



再建期塔基壇 (SB020201) 西辺堆積層出土契斗瓦



再建期金堂基壇 (SB110501) 北側堆積層
出土鶴尾



興道寺廬寺出土塑像螺髮

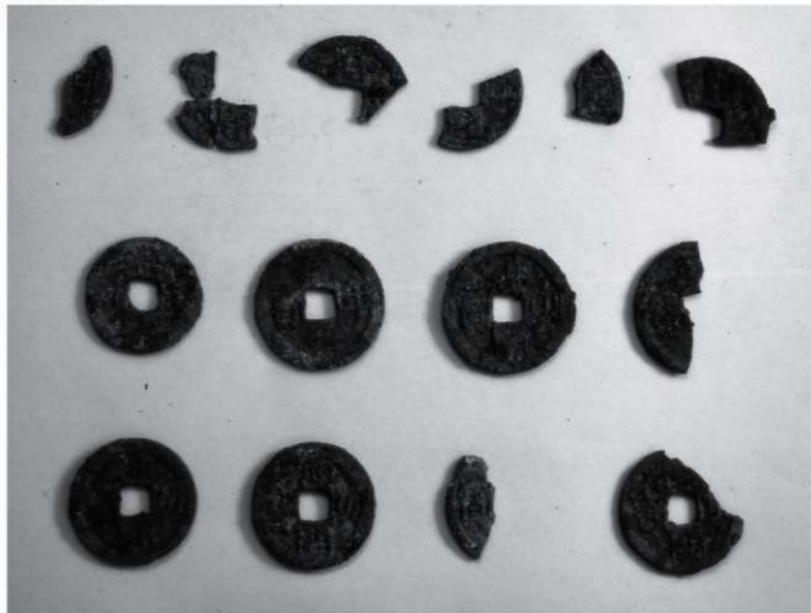


再建期金堂基壇 (SB110501) 北側堆積層出土土壁表面



再建期金堂基壇 (SB110501) 北側堆積層出土土壁裏面

図版写真 78



興道寺廐寺出土錢貨



SD120901 出土須恵器杯蓋



SD110701 出土須恵器杯



再建期塔基壇(SB110201)整地面出土須恵器蓋



興道寺廐寺出土軒丸瓦（第28図1）



興道寺廐寺出土軒丸瓦（第28図2）



興道寺廐寺出土軒丸瓦（第28図3）



興道寺廐寺出土軒丸瓦（第28図4）



興道寺廐寺出土軒平瓦（第29図5）

「興道寺廃寺発掘調査報告書」

2016年3月31日発行

発 行 美浜町教育委員会
〒 919-1192
福井県三方郡美浜町郷市 25-25
TEL 0770-32-6708
FAX 0770-32-1115

印 刷 若越印刷株式会社 美浜営業所
〒 919-1145
福井県三方郡美浜町金山 19-7-1
TEL 0770-32-1230
FAX 0770-23-2288

この電子書籍は、2016年3月18日、美浜町教育委員会が発行した『興道寺廃寺発掘調査報告書』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、正確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、美浜町教育委員会、美浜町立図書館にあります。これ以外にも福井県立図書館、福井県教育委員会、福井県内の市町教育委員会や図書館、近隣の都道府県教育委員会や図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにも寄贈・献本しています。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

この電子書籍の底本作成時に他機関等から写真・図表等の提供を受けている場合がありますが、電子書籍を作成し『全国遭跡報告総覧』にアップロードする上で、複製権、公衆送信権にかかる許諾を受けていないものについては、該当部分を削除し、白抜きとします。これらの写真等の閲覧は底本にて行ってください。

書名：興道寺廃寺発掘調査報告書

発行：美浜町教育委員会

〒919-1138 福井県三方郡美浜町河原市8号8番地（美浜町歴史文化館）

電話：0770-32-0027

電子書籍制作日：令和2年(2020)3月17日